

キャンプ瑞慶覧埋蔵文化財試掘調査

—平成4～8年度—

2022（令和4）年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

キャンプ瑞慶覧埋蔵文化財試掘調査

—平成4～8年度—

2022（令和4）年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

序文

本書は、平成4～8（1992～1996）年度にかけて在沖米軍施設キャンプ瑞慶覧基地内において実施した埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査の成果を取りまとめたものです。

キャンプ瑞慶覧基地内の試掘調査は、本町に所在する埋蔵文化財の有無を明確にするためのものであり、関係機関の協力を得て北谷町教育委員会が継続的に実施してきた事業であります。

北谷町域に所在するキャンプ瑞慶覧においては、平成25年4月に公表された「沖縄における在日米軍施設・区域に関する統合計画」のなかで、インダストリアル・コリドー地区が2024年度又はその後に返還予定となっているほか、他施設からの施設移転等に伴い、埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査の件数も年々増加傾向にあります。

そのため、過年度において調査を実施した成果の取りまとめを行い、確認された埋蔵文化財の位置や性格だけでなく、地表下の状況確認に役立つ資料を作成することを目指し、報告書の作成を進めていくことといたしました。

本報告書が基地内における開発行為の事前協議資料としてだけでなく、本町の歴史・文化・自然を学ぶための資料、文化財の保護・活用に供する資料として広く活用できる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、多くの関係機関の方々よりご助言・ご指導を賜り厚く御礼申し上げますとともに、調査及び資料整理作業にご協力いただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

2022（令和4）年3月
北谷町教育委員会
教育長 津嘉山 信行

例 言

1. 本報告書は、平成4年度から平成8年度にかけて北谷町教育委員会が実施したキャンプ瑞慶覧基地内の試掘調査について、その成果を取りまとめたものである。各発掘調査の実施時期や調査経緯については、本文にて詳述した。
2. 本報告書の作成にあたっては、内閣府の駐留軍用地跡地利用推進事業費補助金と文化庁補助を受けて事業を実施した。
3. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/2,500地形図（昭和54年測量）をもとに北谷町役場都市計画課が作成したものである。本報告の方位は磁北をさす。

4. 遺物の同定については下記の通りご教示を賜った。

石 質 大城 逸朗（理学博士・おきなわ石の会）

5. 本報告書の編集は、太田菜摘美・上地千賀子・照屋元子が行った。執筆分担は目次のとおりである。
6. 本遺跡の遺物の注記及び遺物・取上げの凡例は次のとおりである。

・注記凡例

地区・調査種別	調査地区名	試掘坑 (No.)	層	調査年・日付	袋番号
瑞試	MC-862	No.1	1	971121	袋12



瑞試, MC-826. 1.971121.
袋12

※小破片等については、いくつかの項目を省略して記入し、台帳番号ごとにユニバックに入れ保管している

7. 遺物の注記については調査時に設定された層序（元層序）を記入しているが、本報告書を作成するにあたり、調査した層序を整理して総括し、調査地区ごとに基本層序を設定した。そのため、本書において報告する層序は基本層序に基づいて行う。基本層序の詳細については本文中にて記述した。
8. 本報告書において報告する遺物については、調査範囲の限られた試掘調査ゆえ、小破片のものが多かったため、実測・写真撮影等に耐えうるものを選定し、掲載した。
9. 本報告書の編年表記は、遺物の種類等によって時代表記が異なっているが、あえて統一せず、執筆担当者が使用する時代表記のまま掲載した。
10. 本書に掲載した発掘調査に関する写真・実測図などの記録および出土遺物については、全て北谷町教育委員会が保管している。

本文目次

序文	
例言	
目次	

第Ⅰ章 はじめに

第1節 北谷町の概要【太田】	1
第2節 キャンプ瑞慶寛地区の概要【太田】	8
第3節 キャンプ瑞慶寛周辺の関連遺跡等【太田】	8
第4節 調査・報告の方法等【太田】	10

第Ⅱ章 平成4年度 試掘調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯【太田】	14
第2節 調査体制【太田】	14
第3節 調査成果【太田・上地】	14

第Ⅲ章 平成5年度 試掘調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯【太田】	49
第2節 調査体制【太田】	49
第3節 調査成果【太田・上地】	49

第Ⅳ章 平成6年度 試掘調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯【太田】	68
第2節 調査体制【太田】	68
第3節 調査成果【太田・上地】	68

第Ⅴ章 平成7年度 試掘調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯【太田】	104
第2節 調査体制【太田】	104
第3節 調査成果【太田・上地】	104

第Ⅵ章 平成8年度 試掘調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯【太田】	134
第2節 調査体制【太田】	134
第3節 調査成果【太田・上地】	134

第Ⅶ章 総括	162
--------	-----

引用・参考文献	170
報告書抄録	

挿図目次

第1図	北谷町の位置	1
第2図	北谷町全体図	1
第3図	地形分類	2
第4図	表層地質	3
第5図	表層地質断面	3
第6図	北谷町道路一覧	6
第7図	キャンブ瑞慶覧 調査地区位置(平成4～8年度)	11
第8図	試掘カード	13
第9図	平成4年度 調査地区位置(北側)	15
第10図	平成4年度 調査地区位置(南側)	16
第11図	層序1(平成4年度 管理棟(1) 地区 MC-279-D)	23
第12図	層序2(平成4年度 管理棟(2) 地区 MC-271-D) 1	24
第13図	層序3(平成4年度 管理棟(2) 地区 MC-271-D) 2	25
第14図	層序4(平成4年度 管理棟(2) 地区 MC-271-D) 3	26
第15図	層序5(平成4年度 管理棟(3) 地区 MC-314-D) 1	27
第16図	層序6(平成4年度 管理棟(3) 地区 MC-314-D) 2	28
第17図	層序7(平成4年度 管理棟(4) 地区 MC-319-D) 1	29
第18図	層序8(平成4年度 管理棟(4) 地区 MC-319-D) 2	30
第19図	層序9(平成4年度 工場(1) 地区 MC-290-D)	31
第20図	層序10(平成4年度 工場(2) 地区 MC-313-D)	32
第21図	層序11(平成4年度 管理棟地区 6044) 1	33
第22図	層序12(平成4年度 管理棟地区 6044) 2	34
第23図	平成5年度 調査地区位置	50
第24図	層序1(平成5年度 ファミリーサービスセンター地区)	54
第25図	層序2(平成5年度 家具販売店地区)	55
第26図	層序3(平成5年度 ビルディング地区) 1	56
第27図	層序4(平成5年度 ビルディング地区) 2	57
第28図	層序5(平成5年度 銀行地区 MC-372-D3)	58
第29図	平成6年度 調査地区位置	69
第30図	平成6年度 出土遺物1(ガラス製品)	74
第31図	層序1(平成6年度 工場(営繕) 地区 MC-391-D)	79
第32図	層序2(平成6年度 工場(車両南) 地区 MC-403-D)	80
第33図	層序3(平成6年度 工場(車両北) 地区 MC-376)	81
第34図	層序4(平成6年度 パスターミナル地区 MC-455-R)	82
第35図	層序5(平成6年度 家具販売所地区 MC-450-R) 1	83
第36図	層序6(平成6年度 家具販売所地区 MC-450-R) 2	84
第37図	層序7(平成6年度 家具販売所地区 MC-450-R) 3	85
第38図	層序8(平成6年度 OWAX 本部地区 MC-452-R) 1	86
第39図	層序9(平成6年度 OWAX 本部地区 MC-452-R) 2	87
第40図	層序10(平成6年度 道路地区 MC-413-D)	88
第41図	平成7年度 調査地区位置	105
第42図	平成7年度 出土遺物(染付・褐輪陶器・陶質土器・沖繩産無輪陶器・本土産磁器)	109
第43図	層序1(平成7年度 カウンセリングセンター地区 MC621-D)	117
第44図	層序2(平成7年度 管理棟地区 MC-510) 1	118
第45図	層序3(平成7年度 管理棟地区 MC-510) 2	119
第46図	層序4(平成7年度 倉庫地区 MC-511) 1	120
第47図	層序5(平成7年度 倉庫地区 MC-511) 2	121
第48図	層序6(平成7年度 倉庫地区 MC-511) 3	122
第49図	層序7(平成7年度 ピクニック場地区 MC-458-R)	123

挿図目次

第50図	平成8年度 調査地区位置 (南側)	135
第51図	平成8年度 調査地区位置 (北側)	136
第52図	層序1 (平成8年度 管理棟地区 MC-609-D)	142
第53図	層序2 (平成8年度 管理棟地区 MC-609-D)	143
第54図	層序3 (平成8年度 厚生施設地区 MC-616-D)	144
第55図	層序4 (平成8年度 厚生施設地区 MC-616-D)	145
第56図	層序5 (平成8年度 倉庫地区 AR303-D)	146
第57図	層序6 (平成8年度 倉庫地区 AR303-D)	147
第58図	層序7 (平成8年度 バスターミナル地区)	148
第59図	層序8 (平成8年度 バスターミナル地区)	149
第60図	層序9 (平成8年度 倉庫(資材)地区)	150
第61図	層序10 (平成8年度 倉庫(資材)地区)	151
第62図	平成4～8年度 調査成果	163
第63図	戦前の土地利用状況 (1945年1月3日米軍撮影)	165

図版目次

図版1	平成4年度 管理棟(1)地区 (MC-279-D)	35
図版2	平成4年度 管理棟(1)地区 (MC-279-D)	36
図版3	平成4年度 管理棟(2)地区 (MC-271-D)	37
図版4	平成4年度 管理棟(2)地区 (MC-271-D)	38
図版5	平成4年度 管理棟(2)地区 (MC-271-D)	39
図版6	平成4年度 管理棟(3)地区 (MC-314-D)	40
図版7	平成4年度 管理棟(3)地区 (MC-314-D)	41
図版8	平成4年度 管理棟(4)地区 (MC-319-D)	42
図版9	平成4年度 管理棟(4)地区 (MC-319-D)	43
図版10	平成4年度 管理棟(4)地区 (MC-319-D)	44
図版11	平成4年度 工場(1)地区 (MC-290-D)	45
図版12	平成4年度 工場(2)地区 (MC-313-D)	46
図版13	平成4年度 管理棟地区(6044)	47
図版14	平成4年度 管理棟地区(6044)	48
図版15	平成5年度 ファミリーサービスセンター地区	59
図版16	平成5年度 家具販売店地区	60
図版17	平成5年度 家具販売店地区	61
図版18	平成5年度 ビルディング地区	62
図版19	平成5年度 ビルディング地区	63
図版20	平成5年度 ビルディング地区	64
図版21	平成5年度 ビルディング地区	65
図版22	平成5年度 ビルディング地区	66
図版23	平成5年度 銀行地区 (MC-372-D3)	67
図版24	平成6年度 出土遺物1 (ガラス製品)	74
図版25	平成6年度 出土遺物2 (脊椎動物遺体)	74
図版26	平成6年度 工場(営繕)地区 (MC-391-D)	89
図版27	平成6年度 工場(営繕)地区 (MC-391-D) 2、工場(車両南)地区 (MC-403-D)	90
図版28	平成6年度 工場(車両南)地区 (MC-403-D) 2、工場(車両北)地区 (MC-376)	91
図版29	平成6年度 工場(車両北)地区 (MC-376)	92
図版30	平成6年度 バスターミナル地区 (MC-455-R)	93
図版31	平成6年度 バスターミナル地区 (MC-455-R) 2、家具販売所地区 (MC-450-R)	94
図版32	平成6年度 家具販売所地区 (MC-450-R)	95
図版33	平成6年度 家具販売所地区 (MC-450-R)	96

図版目次

図版 34	平成 6 年度 家具販売所地区 (MC-450-R) 4	97
図版 35	平成 6 年度 家具販売所地区 (MC-450-R) 5	98
図版 36	平成 6 年度 OWAX 本部地区 (MC-452-R) 1	99
図版 37	平成 6 年度 OWAX 本部地区 (MC-452-R) 2	100
図版 38	平成 6 年度 OWAX 本部地区 (MC-452-R) 3	101
図版 39	平成 6 年度 OWAX 本部地区 (MC-452-R) 4、道路地区 (MC-413-D) 1	102
図版 40	平成 6 年度 道路地区 (MC-413-D) 2	103
図版 41	平成 7 年度 出土遺物 (染付・褐釉陶器・陶質土器・沖縄産無釉陶器・本土産磁器)	110
図版 42	平成 7 年度 貝類遺体	113
図版 43	平成 7 年度 カウンセリングセンター地区 (MC-621-D)	124
図版 44	平成 7 年度 管理棟地区 (MC-510) 1	125
図版 45	平成 7 年度 管理棟地区 (MC-510) 2	126
図版 46	平成 7 年度 管理棟地区 (MC-510) 3	127
図版 47	平成 7 年度 倉庫地区 (MC-511) 1	128
図版 48	平成 7 年度 倉庫地区 (MC-511) 2	129
図版 49	平成 7 年度 倉庫地区 (MC-511) 3	130
図版 50	平成 7 年度 倉庫地区 (MC-511) 4	131
図版 51	平成 7 年度 倉庫地区 (MC-511) 5	132
図版 52	平成 7 年度 ビクニック場地区 (MC-458-R)	133
図版 53	平成 8 年度 管理棟地区 (MC-609-D) 1	152
図版 54	平成 8 年度 管理棟地区 (MC-609-D) 2	153
図版 55	平成 8 年度 管理棟地区 (MC-609-D) 3	154
図版 56	平成 8 年度 管理棟地区 (MC-609-D) 4	155
図版 57	平成 8 年度 厚生施設地区 (MC-616-D) 1	156
図版 58	平成 8 年度 厚生施設地区 (MC-616-D) 2	157
図版 59	平成 8 年度 厚生施設地区 (MC-616-D) 3	158
図版 60	平成 8 年度 倉庫地区 (AR303-D) 1	159
図版 61	平成 8 年度 倉庫地区 (AR303-D) 2、バスターミナル地区 1	160
図版 62	平成 8 年度 バスターミナル地区 2	161

表目次

第 1 表	北谷町遺跡一覧	7
第 2 表	平成 4 年度 調査区別遺物出土状況	21
第 3 表	平成 5 年度 調査区別遺物出土状況	52
第 4 表	平成 6 年度 出土遺物観察一覧	74
第 5 表	平成 6 年度 調査区別遺物出土状況	77
第 6 表	平成 7 年度 出土遺物集計	107
第 7 表	平成 7 年度 貝類遺体出土状況	111
第 8 表	平成 7 年度 貝類遺体の分類学的位置と生息場所類型	112
第 9 表	平成 7 年度 脊椎動物遺体出土状況	114
第 10 表	平成 7 年度 脊椎動物遺体種名一覧	114
第 11 表	平成 7 年度 調査区別遺物出土状況	115
第 12 表	平成 8 年度 調査区別遺物出土状況	140
第 13 表	年度ごとの調査箇所数まとめ	162

第I章 はじめに

第1節 北谷町の概要

1. 地理的環境

北谷町は沖縄島中部の西海岸、県都那覇市から北東約16kmに位置している。北に嘉手納町、東に沖縄市と北中城村、南に宜野湾市と接し、西は全域が東シナ海に面し彼方には慶良間諸島が眺望できる。町の総面積は13.93km²で、南北約6km、東西約4.3kmの長方形をなし、ほぼ中心(北緯26度18分58秒、東経127度45分55秒)に町役場が位置する。

本町は、米軍基地の多い沖縄県内においても基地占有率が3番目に高い自治体で、町総面積における軍用地の比率は51.6%を占める(2020年3月末現在)。そのため土地利用上大きな制約があり、丘陵台地からなる東部地域と主に海岸埋立地からなる西部地域の両居住域は基地によって分断されている。

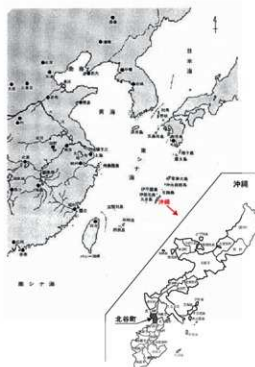
産業は西海岸地域を中心に第三次産業が盛んで、ハンビー地区やアメリカンビレッジなどでは国内外から訪れる観光客で賑わいをみせている。また、近年はフィッシャリーナ整備事業や自然海製塩事業など、地域特性を生かした新しい地場産業の創出に取り組んでいる。

交通の面では、国道58号が西海岸側を縦断し、県道23・24・130号線が国道以東へ延びる。現在は、国道58号の道路拡幅や県道24号線バイパスの建設が進められているが、基地の存在により部分的な工事となっている。

2021年11月末現在の人口は約29,004人で、現在進められている桑江伊平土地区画整理事業認可前(平成16年3月11日認可)に比べ2,646人、率にして1.10%増となっている。今後も公有水面埋立地の利用や返還軍用地の跡地利用に伴って、一層の人口増加が見込まれている。

2. 自然的環境

本町の気候は亜熱帯海洋性に属し、四季を通して温暖である。年平均気温は22℃、平均湿度は77%前後で冬期が短い。年降水量は2,000～3,000mmと多雨で、梅雨と台風期に集中する。



第1図 北谷町の位置



第2図 北谷町全体

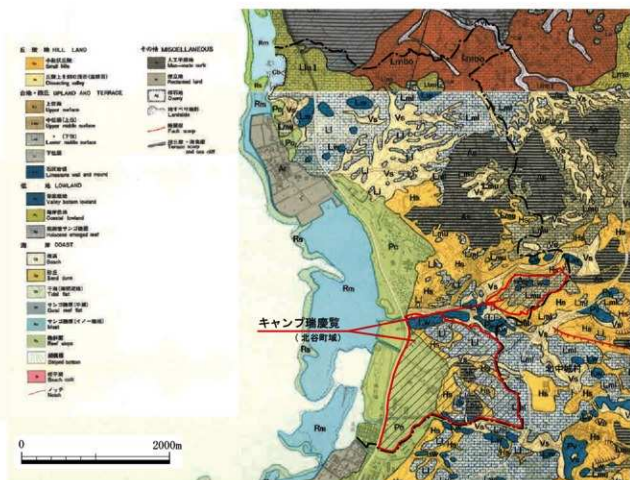
地形を概観すると、町の北西-南東方向に走る桑江断層を大きな境とし、東高西低を呈す。東部・南部では3段の段丘(標高100 m以上、100～50 m、50～30 m)が見られ、侵食が進み起伏に富んだ地形となっている。北部では、洞穴やドリネ、石灰岩堤、石灰岩丘等のカルスト地形が発達している。西部の海岸低地はほとんど埋立地や人工ビーチとなっており、僅かに自然海浜が残る。

表層地質は、基盤の島尻層群を琉球層群が不整合に覆い、低地では琉球層群を沖積層が不整合に覆う。琉球層群は、砂礫堆積物の国頭礫層とサンゴ礫性堆積物の琉球石灰岩層からなり、前者は沖縄島北部、後者は中・南部に広く分布する。

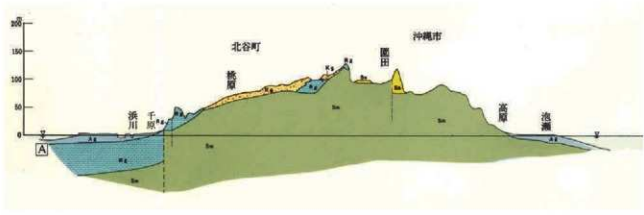
本町にも国頭礫層が分布しており、同層は基盤である名護層の影響を受けて酸性化し、風化した土壤(国頭マージ)にはイジュやヤマモモが生育する。

水理地質は、不透水層の基盤とこれを不整合で覆う帯水層(琉球石灰岩)との不整合部で湧出する。国史跡伊礼原遺跡に隣接するウーチヌカーも同機構による。

植生では、先述のイジュ・ヤマモモ等と、中南部に広がるアルカリ化した土壤(島尻マージ)に生息するアカギ・オオバギ・ヤブニッケイ等が混生し、学術的にも貴重な地域である。嘉手納基地内やその周辺、庁舎北側の丘陵地、北谷城周辺、河川流域に森林が比較的良好に残るが、その割合は町土の7%と高くない。動物相は、良好な植生が残っている場所を中心に1,411種が確認され、2000年に行われた動物調査では、希少性の高い哺乳類のオリオオコウモリ、鳥類のミフウズラ、昆虫類のクロイワゼミ等を含む陸棲動物や、海城、汽水城、河川域で多様な水棲動物が確認されている。



第3図 地形分類 (「土地分類基本調査 沖縄中南部・中北部」に加算)



3. 歴史的環境

旧石器時代

本書刊行時点で旧石器時代に比定される遺跡はない。1966年に多和田真淳氏によって発見された桃原洞穴遺跡出土の化石人骨が約16,000年前のものだとされたが、近年の研究では中世に属すると考えられている。同遺跡付近では1983年に土地区画整理事業が施行され、その際に鹿化石が3点発見されているが、現在は宅地化しているため、鹿化石出土地を確認することは困難である。

貝塚時代前期（縄文時代相当期）

本町最古級の遺跡は、桑江断層下の標高2～4mの沖積地に立地する伊礼原遺跡である。同遺跡は、縄文海進ピーク時にあたる前1～2期（縄文時代早期～前期）の頃は海食崖付近の低湿地に、海退によって陸地化が進む前3期（同中期）以降は、1～2期の頃には無かった砂丘上に遺跡が形成される。一帯の砂丘は、前4期のほか、続く後1期（弥生から古墳）にも侵食と再堆積を繰り返しており、地形の発達過程を良好に示す。低湿地からは滑石を含む曽畑式土器が出土し、九州との交流が窺える。町北部に位置する前4～5期の砂辺貝塚は、標高33mの残丘カルストの台地上に住居跡を、崖下に貝塚を形成する。砂辺貝塚から南西に300m、標高7mの鍾乳洞内に前5期の墓域を形成するクマヤール洞穴遺跡があり、洞内からは50数体分の埋葬人骨とともに副葬品が発見された。近年、沖縄島の洞穴遺跡から前1期に比定される爪形土器より古段階の尖底土器の発見が相次いでいる。クマヤール洞穴遺跡からも類似する資料が得られており、今後の詳細な調査・研究によっては町内最古の遺跡となる可能性がある。

貝塚時代後期（弥生時代から平安時代並行期）

本期の遺跡はキャンプ桑江北側地区の標高3～5mに集中する。平安山や桑江の低地では砂丘や浜堤の発達に伴って後1期の遺跡が増加する。遺跡からは焼土遺構や貝塚、土壇墓などが検出されるが、住居跡は認められない。後2期からグスク時代の初期にあたる小堀原遺跡では、10～12世紀代のオオムギ・イネ・アワや、カムイヤキ埋納土壇墓が発見され、喜界島城久遺跡群との関連が目ざされている。その他、平安山原B遺跡からは10世紀まで遡り得る風呂鉢が出土するなど、一帯からは農耕に関連する遺物が多くみられる。

グスク時代

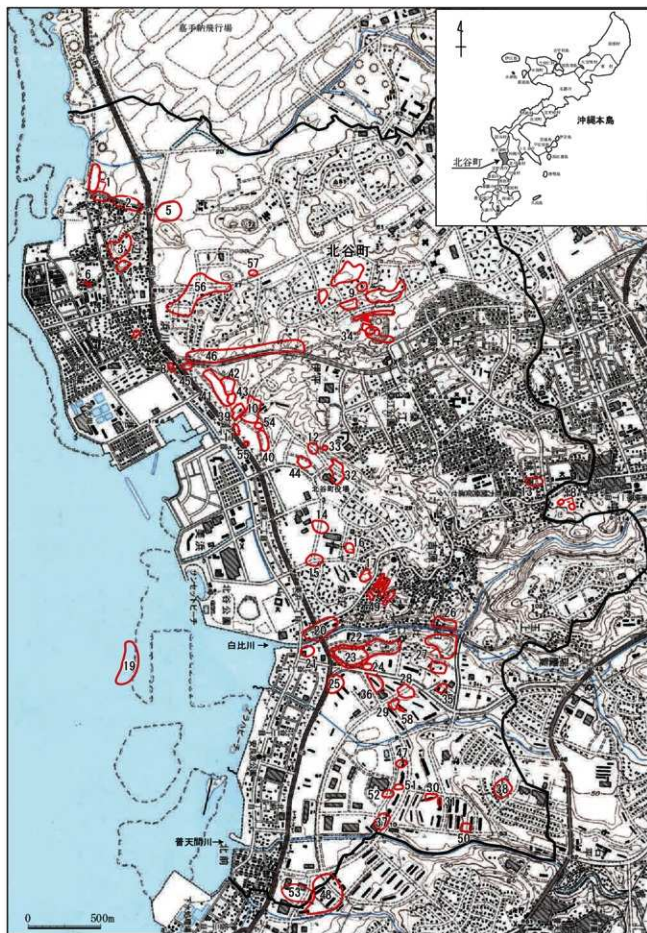
北谷町役場の建設に伴い発掘が行われた後兼久原遺跡から、掘立柱建物跡と高床式倉庫がセットで検出されたほか、製鉄・鍛冶関連の遺物や遺構、土壇墓などが発見された。近年、隣接する小堀原遺跡との比較により、ほぼ同時期に存在した、集団・集落間内部の社会的な位置づけに迫る研究が進んでいる。本町唯一のグスクである北谷城は、町役場から南へ約1.3kmの石灰岩丘陵上に立地する。グスクは13世紀後半から築城に伴う造成が開始、14世紀から15世紀中頃に石垣が構築され、15世紀後半に終焉したと考えられている。按司に関する記録はほとんどなく、金満按司、大川按司、谷茶按司の3系統の興亡があったとの伝承が残る。「北谷」の文字は、嘉靖年間（1522～1566年）の俞姓大宗家譜中に「北谷間切平安山地頭職」と見え、遅くとも16世紀半ばには存在していたようである。また、琉球国王が地方役人に給した辞令書（1577年）に「きたたんまきり」と見られることから、当時は北谷を「きたたん」と読んでいたようである。

近世 (1609-1879)

1649年に作成された『絵図郷村帳』をみると、近世の北谷間切には、北谷・くわい(桑江)・平安山・すなへ(砂辺)・野国・屋郎(屋良)・賀手納(嘉手納)・山内・あきな(安仁屋)の9つの村があったことが分かる。1660～1670年代には、間切の分割・新設に伴って山内が越來間切に、あきなが宜野湾間切に割かれ、新たに玉代勢、伝道、伊礼、浜川、野里が誕生し、計12村となって近代まで引き継がれた。1700年代前半には士族の増大・官職の欠乏により、首里王府が貧乏士族の転職を許可・奨励した。これにより、町方(首里・泊・那覇・久米村)の貧土層が生活の糧を求めて地方へ下り、未開の地に屋取集落が形成された。伊礼原B遺跡では、急激な開墾による土砂流出跡が確認されており、屋取集落形成によるものと考えられている。近世末期の1840年には、北谷沖にイギリス商船のインディアン・オーク号の座礁事故が起き、北谷間切の人々は同船の乗組員全員を救助・保護し、帰国の手助けをした。インディアン・オーク号座礁地では当時の積み荷の一部が今も海底に残されている。

近現代

1908(明治41)年に施行された島嶼町村制以後、北谷間切は北谷村(むら)となった。戦前は水田の広がる農村として栄えていたが先の大戦で焦土と化し、沖縄戦や戦後の米軍基地建設により地形は大きく改変された。米軍上陸直前に守備隊が建設した特攻艇秘匿壕は、北谷城が立地する丘陵北側に現在も残されている。戦後は村全域が米軍の軍事占領下に置かれ、中でも嘉手納基地の存在は村を南北に二分し行政執行に支障をきたす要因となった。これらを受け、1948(昭和23)年には北谷村(そん)から嘉手納村を分村し、1980(昭和55)年には北谷町へと町制移行している。



第6図 北谷町遺跡一覧

第1表 北谷町遺跡一覧

2022年3月現在

No.	遺跡名	時期	所在地
1	砂辺(すなべ)サーク原貝塚	貝塚前期	宇砂辺巻久原
2	砂辺サーク原遺跡	貝塚前IV期～近世	砂辺加志原
3	砂辺貝塚	貝塚前IV期～グスク	砂辺村内原
4	砂辺ウガン遺跡	貝塚前期	砂辺加志原
5	カーシナーボントン遺物散布地	貝塚前V期	砂辺加志原
6	クマヤ一帯穴遺跡	貝塚前II期～戦前	砂辺村内原
7	黒川千原第1山(はまがむせんばるいむやま)遺物散布地	貝塚前V期	黒川黒川千原
8	黒川ウガン遺跡	貝塚前期	黒川黒川
9	上・下勢原区古墓群(かみ・しもせどくごぼく)	近世	上勢原平安山伊森原、伊礼伊森原、下勢原平安山下勢原
10	伊礼原(いらいばる)遺跡	貝塚前I期～戦前	伊平伊礼原
11	伊礼原B遺跡	貝塚I～V期・戦前・近世・戦前	伊平伊礼原
12	亀江ノ原(くわえのとりん)遺物散布地	グスク～古墳	亀江小塚原
13	鹿化石出土地	旧石器	吉原東ノ原・戦原
14	根原古跡(ねいばるふるじま)A遺跡	近世	亀江亀江原・戦原
15	根原古高井遺跡	近世	亀江根原
16	伊地巻久原(いじまきくばる)古墓	近世	亀江伊地巻久原
17	根原古墓群	近世	亀江根原
18	根原(とうばる)洞穴遺跡	中世	吉原東新川原
19	インディアン・オーク号の採掘地	近世	北谷地先
20	池(いち)グスク	グスク	吉原東宇地原・西宇地原
21	白北川(しろがわ)河口遺物散布地	貝塚前II期	北谷西表原
22	北谷城(ちやたんてすく)遺跡群	貝塚後期末～グスク	大村城原
23	北谷城	貝塚後期末～近世	大村城原
24	北谷城第7遺跡	貝塚後期～グスク	大村城原
25	北谷番所址	近世	北谷北谷原
26	吉原東角尻原(よしはらあがりちめたまばる)遺物散布地	グスク	吉原東角尻原・西角尻原
27	山田原(やまがーばる)古墓群	近世	大村山田原
28	玉代勢原(たまよせばる)遺跡	貝塚後期末～グスク	大村玉代勢原
29	長者山(ちやうろうやま)遺物散布地	グスク～近世	大村玉代勢原
30	大道原(うふどうばる)A遺跡	グスク	北谷大道原
31	大道原B遺跡	貝塚前V期	北谷大道原
32	根巻久原(くしかにくばる)遺跡	グスク	亀江根巻久原、宇亀江小塚原
33	ジョニーチャー古墓	グスク	亀江小塚原
34	伊礼伊森原(いらいばるいらいばる)遺跡	グスク	上勢原伊礼伊森原
35	根原(くしばる)遺跡	グスク～近世	大村玉代勢原
36	黒川原(くわがーばる)遺跡	グスク	北谷黒川原
37	黒千原(くろふしばる)遺跡	貝塚後期	北谷黒千原
38	横原原(よこたげばる)遺跡	グスク	北谷横原原
39	伊礼原口遺跡	貝塚後期～近世	伊平伊礼原
40	伊礼原B遺跡	貝塚前II期～近世	伊平伊礼原
41	平安山原(はんざんばる)A遺跡	貝塚後期～近世	伊平平安山原
42	平安山原B遺跡	貝塚後期～近世・戦前	伊平平安山原
43	平安山原C遺跡	貝塚後期～近世	伊平平安山原
44	小塚原(くわいばる)遺跡	貝塚後期～近世	亀江小塚原
45	千原(せんばる)遺跡	グスク	伊平千原
46	大作原(うふさくばる)古墓群	貝塚前期・近世	伊平大作原
47	東表原(あがりうわていばる)遺跡	貝塚前V期	北谷東表原
48	新塚下原(あらてすくしちやばる)第2遺跡	貝塚前I期～近世	北谷宮仁塚原
49	東宇地原(あがりうしばる)古墓群	近世	吉原東宇地原
50	大道原C遺跡	近世	北谷大道原
51	大道原D遺跡	グスク	北谷大当原
52	高野原(たかふしばる)水田跡	近世～戦前	北谷高野原
53	宮仁塚原(みやにやばる)遺跡	グスク～近世	北谷宮仁塚原
54	伊礼原A遺跡	貝塚前II期～貝塚後期	伊平伊礼原
55	根巻(くらんもー)	近世～戦後	伊平伊礼原
56	平安山又上集落跡	戦前	宇直川
57	下勢原集落跡	戦前	宇下勢原
58	根原(めいばる)遺跡	貝塚前IV期・貝塚後II期	宇字村

注: 時代表記の順は「グスク」→「I期～II期貝塚群(1600年以前)」、「近世」→「I期貝塚群(1600年以前)～明治以前」、「戦前」→「II期貝塚群」

*番号は第6頁より

第2節 キャンプ瑞慶覧地区の概要

キャンプ瑞慶覧は、北谷町のほか、沖縄市、宜野湾市、北中城村にまたがって所在する、在沖米軍海兵隊の所管する在沖米軍施設である。北谷町域では、字大村、北谷、北前等にまたがって所在する。

第二次世界大戦以前は、現在の北谷町域と嘉手納町域をあわせた地域が「北谷村(ちゃたんそん)」というひとつの行政区画であり、当該地域には「三箇字」と呼ばれた北谷・玉代勢・伝道といった集落のほか、「北谷ヌ前屋取(チャタンヌメーヤードウイ)」、「石平屋取(イシンダヤードウイ)」、「仲山屋取(ナケーマヤードウイ)」、「屋宜屋取(ヤギヤードウイ)」と呼ばれた屋取集落が所在していた。北谷(チャタン)・玉代勢(タメーシ)・伝道(デンドー)の3つの集落は、集落の北側の丘陵上に所在していた「北谷グスク」と関連の深い集落といわれ、北谷村のなかでも古くからある集落である「本字」と呼ばれた集落に含まれる。本字と呼ばれた8つの集落、北谷・玉代勢・伝道・桑江(クウェー)・伊礼(イリー)・平安山(ハンザン)・浜川(ハマガー)・砂辺(シナビ)は、1700年代までには成立していたといわれ、北谷ヌ前・石平屋取を含む屋取集落は1700年代以降、首里や那覇などから入植してきた人々が作った集落である。

これら集落のほか、当該地には「北谷ターブクワ」と呼ばれた耕作地帯が広がっていた。北谷ターブクワは旧北谷集落の東側に広がっており、沖縄本島有数の水田地域として北部の奥間(現国頭村)、羽地(現名護市)とともに県下三大美田に数えられていた。

沖縄戦終結後には、北谷町全域が米軍に接収され、基地の建設が進められたことにより、戦前の家屋敷、田畑だけでなく、河川や丘陵といった自然景観も大規模な改変にさらされた。当該地の集落に居住していた住民の多くは北谷町域外などに移住せざるを得ず、令和2(2020)年3月31日に周知の文化財である「北谷城跡」の所在する丘陵を含むキャンプ瑞慶覧の一部が返還されたものの、大部分は現在も基地に占有される状況が継続している。

第3節 キャンプ瑞慶覧周辺の関連遺跡等

1. 北谷城跡(ちゃたんじょうあと)

北谷城跡は、北谷町字大村に所在し、本町に残存する唯一の城(グスク)跡である。東西約500m、南北約165m、標高約44mを最高地とする丘陵上に築かれている。丘陵北側には白比川しろひがわが西流し、東側は丘陵が続く。

北谷城跡の位置する丘陵を含む一帯は、キャンプ瑞慶覧基地内に所在していたが、令和2(2020)年3月31日に返還された。

丘陵周辺で過去に実施された試掘調査等の成果から、グスク時代には丘陵の麓まで海が迫り、洋上に突き出た地形は自然の要害をなしていたとみられる。丘陵は南北に良港となり得る河口を持つことから、防衛と交易に適した地形であったと推測される。

城の構造としては、少なくとも5つの曲輪と、地元の古老が「西グスク」「東グスク」と呼称する2か所の平場から構成される。丘陵最高所には一の曲輪が位置し、西へ二の曲輪、三の曲輪、四の曲輪が連なる。三の曲輪北西部から西側へ狭小な尾根が伸び、西グスクと繋がる。尾根の北崖下には五の曲輪が位置し、白比川に南面する。一の曲輪から東へ尾根が伸び、その先に東グスクがある。一の曲輪は標高約44m、東グスクは標高約41mとほとんど差はないが、その間で一度標高を

減じ、標高約36～37mとなる。底地には尾根を分断する形で堀切が確認されている。

城の築城時期については記録がなく不明であるが、伝承として金満按司、大川按司、谷茶按司の3系統の興亡があったと伝わるほか、首里王府によって近世に編纂された国歌謡集『おもろさうし』の中に「きたたんのてだ」、「きたたんの世のぬし」といった表現で按司を褒め称えるおもろがみられる。

丘陵の利用は、出土遺物等から7～11世紀には何らかの利用があったと推測される。しかし、11～12世紀には平地の遺跡が活況する様相がみられ、丘陵の利用は低調であった。13世紀には再び利用され、早ければ13世紀後半から築城に伴う造成が行われる。

グスクの変遷は、前期・中期・後期に細分が可能で、前期は曲輪内の造成が行われた13世紀後半～14世紀、中期は石垣や殿舎が築かれた14世紀～15世紀中頃、後期は廃城となった15世紀中頃～16世紀前半と捉えられる。中期の遺構としては曲輪を圍繞する石垣や二の曲輪の殿舎、三の曲輪の建物跡等が確認され、遺物の出土量も多いことから、中期が北谷城の最盛期であったと考えられる。

近世、廃城となった北谷城は、丘陵麓に位置していた伝道・玉代勢・北谷の三箇字（集落）の聖域であったことが史料から読み取れる。城内には「東御嶽」「西御嶽」「殿」といった拝所が所在し、首里王府から辞令を受けた「北谷ノロ」を中心に祭祀が執り行われていた。戦後、一帯が米軍基地として接収されたことから、一部の拝所はグスク外へ移転されたものの、地域の尽力により再びグスクへ遷され、現在も祭祀が行われている。

北谷城は自然の地形を巧みに取り込みながら堅牢に築かれ、沖縄本島内のグスクが収斂されるなか、中山地域における北方の要として琉球王国成立後まで存続し、その成立過程の一端を解明できる拠点グスクであることなどから、令和3（2021）年3月26日に国史跡として指定された。

2. 北谷番所址（ちゃたんばんじょあと）

北谷城跡の南側を通る県道130号線が国道58号と接する南東角一帯が北谷番所址にあたり、現在はキャンプ瑞慶覧基地内に所在している。15世紀中頃～16世紀前半、北谷城が廃城となった後にその機能が北谷番所に移ったと考えられている。戦前は北玉小学校用地として転用された経緯がある。

3. 長老山遺物散布地（ちょうろうやまいぶつさんぶち）

長老山と呼ばれる小丘陵は、現在キャンプ瑞慶覧基地内に所在している。1954年の米軍作成の地図によると、標高約22mの舌状台地の西側斜面に位置しており、現在は字北谷・玉代勢・伝道等の拝所を合祀する拝所となっている。長老山は旧玉代勢集落にあった「樹昌院」の歴代住職の墓域として利用されてきたといわれている。そのなかでも1580年代に玉代勢集落に生まれ、臨濟宗妙心寺派の正統を伝えたという「南陽紹弘禅師（俗に北谷長老）」の墓所として知られている。

丘陵部ではグスク土器等の遺物が採集できるグスク時代の遺跡であり、北谷城や近隣のグスク期の遺跡と関連する遺跡と考えられる。

4. 玉代勢原遺跡（たまよせばるいせき）

玉代勢原遺跡は長老山の北側約200mに位置し、略東西にのびる標高約16mの丘陵南側斜面にあたる。戦前まで丘陵部には玉代勢原集落が所在しており、そのほぼ中央部に位置する。1991年、

施設建設に伴う緊急発掘調査が実施され、戦前の屋敷跡、グスク土器や中国産陶磁器、くびれ平底土器など、時代幅のある遺物、遺構が出土した。調査の結果、玉代勢原遺跡はグスク時代から戦前まで連続した利用状況が認められ、くびれ平底土器から青磁までの遺物は北谷城跡で出土したものと類似していることから、相関関係の様相を呈すると考えられる。

第4節 調査・報告の方法等

本報告においては、調査時の写真・壁面図（略図含む）等の調査資料が確認できるものを優先的に取りまとめ、調査年度ごとに報告を行うこととする。一部、図面・現場写真の所在が不明なものもあり、それについては未掲載とし、各節にてその旨を記載している。

調査の経緯については、各章において当時の那覇防衛施設局（現沖縄防衛局）との照会文書等をもとに記載しているが、文書の保存年限を大幅に過ぎていることもあり、文書の所在が確認できないものもあったが、可能な限り情報を記載するよう努めた。

壁面図については、平成4年度から平成7年度までは調査時作成した壁面の略図と現場写真をもとに作成した。平成8年度の調査からは北谷町教育委員会が作成した「試掘カード（第8図）」を用いて記録を実施されているため、試掘カードを用いて壁面図等の作成を行った。調査地区の標高と記録壁面の方位については未記載のものが多く、標高は調査時の現地表を0mとして図を作成し、記録壁面の方位については不明なものは未記載とした。壁面図と調査時の壁面写真で掘削深度等に大きく差異がある場合は、原図やそこに記載された所見、写真に写ったスケール等の情報を勘案し、可能なものについては修正作業を行った。壁面図の整理作業にあたっては、調査地区ごとに基本層序を作成し、壁面図では基本層序ごとに色の塗り分けを行った。凡例は図面掲載頁内に付す。層序の所見については、略図や調査カードに記載された表現をそのまま用いた。また、本報告においては層序の推移がわかりやすいように試掘坑の配置を略方位で東から西、北から南というふうに並び替えを行い、配置した。調査時の試掘坑の配置については、各年度ごとに試掘位置の確認が可能な図面を作成したのでそちらを参照されたい。

掲載する資料（出土遺物等）については、試掘調査における調査範囲が狭小であることなどから出土量は僅少であった。そのため、写真撮影・図化作業等に耐えうる、状態の良い資料を選定して掲載することとし、小破片の資料等については出土遺物の一覧表等での記載に留めた。また、一部の遺物の表現（例：南蛮焼）については、調査時の所見等に記載された表現をそのまま用いた。



- 凡例
- 遺構
 - 遺物
 - 未調査・調査不明トレンチ
 - 町域ライン
 - 平成4年度 試掘範囲
 - 平成5年度 試掘範囲
 - 平成6年度 試掘範囲
 - 平成7年度 試掘範囲
 - 平成8年度 試掘範囲



第7回 キャンプ瑞慶覧 調査地区位置 (平成4～8年度)

第Ⅱ章 平成4年度 試掘調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成4年度の試掘確認調査については、那覇防衛施設局（現沖縄防衛局）より、平成4年8月4日付け施那施第260号（AFQ）にて、提供施設整備工事及び移設整備工事実施予定箇所における埋蔵文化財の有無照会があり、北谷町教育委員会は平成4年8月31日付け北教委社発第1074号で、照会のあったキャンプ瑞慶覧内の管理棟（1）～（4）、工場（1）・（2）の計6箇所について試掘調査が必要である旨を回答した。調査は平成4年11月24日から同年12月2日まで、管理棟（1）地区（MC279-D）で3箇所、管理棟（2）地区（MC271-D）12箇所、管理棟（3）地区（MC314-D）で9箇所、管理棟（4）地区（MC319-D）6箇所、工場（1）地区（MC290-D）1箇所、工場（2）地区（MC313-D）3箇所の試掘調査を実施した。調査結果については平成5年1月14日付け北教委社発1074号にて回答した。

また、上記6地区以外に、那覇防衛施設局より、平成5年1月13日付け施那施第16号（AFQ）にて、提供施設（管理棟）整備工事における埋蔵文化財の有無照会があり、北谷町教育委員会は平成5年（平成4年度/1993）1月20日から同年1月22日まで管理棟建設予定地6箇所（施設番号：6044）の試掘調査を実施し、調査結果については平成5年3月16日付け北教委社発2190号にて、埋蔵文化財は確認できなかった旨回答している。

調査期間：平成4年（1992）11月24日～12月2日・平成5年1月20日～1月22日

時系列では、まず11月24日に管理棟（4）地区（MC319-D）、11月25日は管理棟（2）地区（MC271-D）の一部と管理棟（3）地区（MC314-D）の試掘を行った。11月27日は工場（1）地区（MC290-D）と工場（2）地区（MC313-D）を調査、12月1日は管理棟（1）地区（MC279-D）、12月2日は管理棟（2）地区（MC271-D）の残りの調査を実施した。

第2節 調査体制

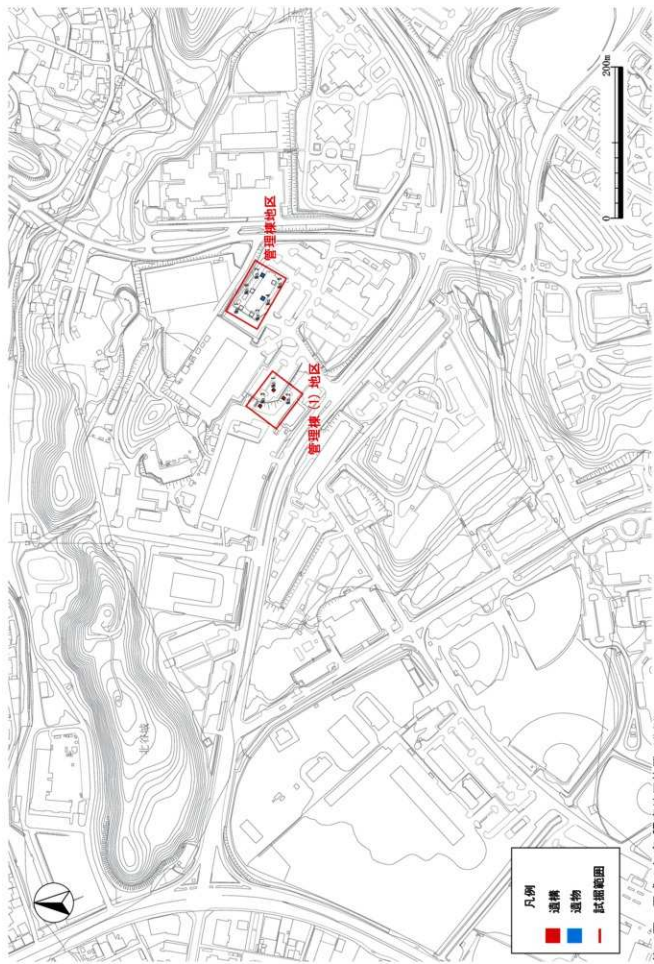
調査主体	北谷町教育委員会
調査責任者	教育長 富山 憲一
事務局	社会教育課長 照屋 勝雄 社会教育係長 知念 良範
調査担当	社会教育主査 中村 恵

第3節 調査成果

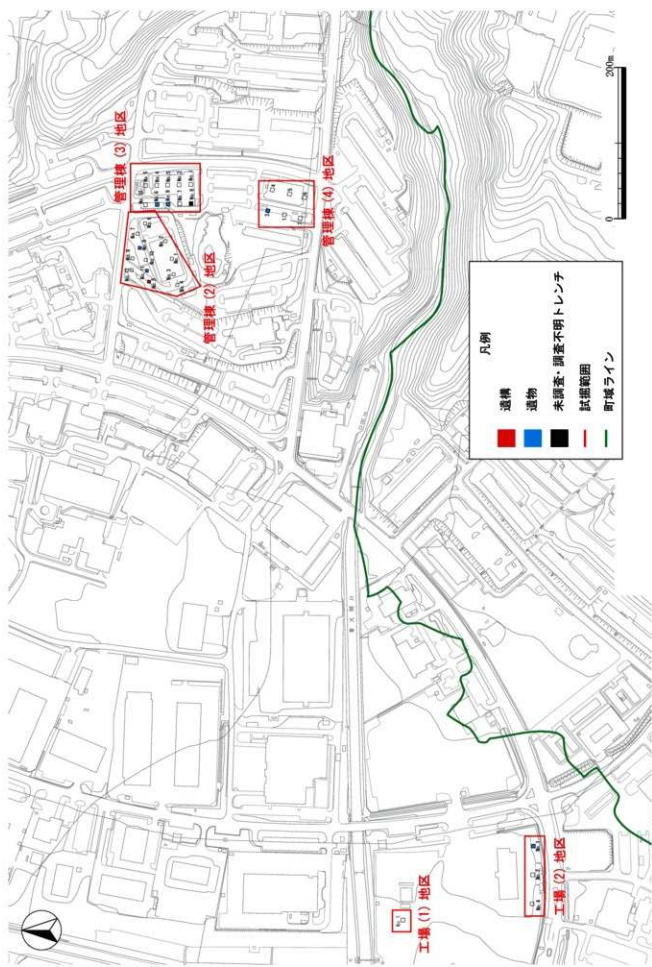
試掘調査は、管理棟（1）～（4）、工場（1）・（2）の6地区で実施し、管理棟（1）・（2）・（3）の3地区で埋蔵文化財を確認した。基本層序・遺物・遺構は、調査地区ごとに取りまとめ、以下に記す。

管理棟（1）地区（MC-279-D）

試掘坑は3箇所設定し、すべてで文化層を確認した。



第9図 平成4年度調査地区位置(北側)



第10図 平成4年度調査地区位置(南側)

1. 基本層序

- I層**：上層はアスファルト舗装、路盤の碎石層で、下層は褐色土の客土層。米軍基地造成に伴うものと考えられる。1.5～2 m程の厚さである。
- II層**：地表下約1.5～3 mで確認された厚さ約0.5～1 mの黒褐色・暗褐色土層で、文化層（遺物包含層）である。上層は壺屋焼等を含む近世～戦前の時期の層にあたとみられる。
- III層**：黒褐色・暗褐色土（遺物包含層）の下層部にあたり、青磁や南蛮焼等が出土する、グスク時代に比定される層が確認された。
- IV層**：No.1では赤土層、No.2では島尻層（クチャ）からの移行層、No.3では砂質土層が確認されており、土質は異なるがいずれも遺物や遺構が出土したとの記録はなく、自然堆積層と考えられる。
- V層**：島尻層（クチャ）。基盤層と考えられる。

2. 遺構・遺物

No.1からはグスク時代に比定される層で遺構とみられる痕跡が認められたが、詳細は不明である。No.2では戦前の畑跡の痕跡が確認された。

遺物はNo.1では青磁、南蛮焼、壺屋焼が出土、No.2では貝類、木炭片、No.3では染付、壺屋焼が出土したが、いずれも小片で図化するに至らなかった。

小結

No.1～3の3箇所でも文化層が確認され、出土遺物等からグスク時代～近世・近代の時期の遺跡と判断される。調査区は平成4年度以前の試掘調査で確認された玉代勢原遺跡の北西側にあたり、戦前の旧玉代勢集落の位置に近接する。試掘調査の成果を受けて、発見された遺跡は「後原遺跡」と呼称している。

管理棟（2）地区（MC-271-D）

試掘坑は12箇所設定し、うち4箇所でも文化層が確認された。

1. 基本層序

- I層**：現表土・客土層。米軍基地造成に伴うものとみられる。
- II層**：No.5・9・10・11の4箇所でも確認された文化層（遺物包含層）である。地表下約0.7～1 mに、0.5～1 mほどの厚さで堆積する暗褐色土層で、沖縄産陶器、土器片、木炭片等が出土した。層上部は近世～戦前の時期、下層はグスク時代の層序とみられる。
- III層**：赤土層で、地山とみられる。No.5・8～12の6箇所でも確認された。
- IV層**：石灰岩層で、基盤層とみられる。No.1～4・6・7については基盤層である石灰岩直上で客土が確認されていることから、石灰岩層まで造成が及んでいる様子が認められた。

2. 遺構・遺物

遺構は、No.5で落ち込み状の遺構を検出した。同層では土器片、本土産磁器、沖縄産陶器（湧田焼）等が出土したが、ほとんど小片で図化に至らなかった。No.11では沖縄産陶器（壺屋陶器）が出土したが、これも小片で図化に値しない資料であった。

小結

遺跡の範囲については、北側の斜面下は地山層が僅かに残り、南側の斜面上は基盤の石灰岩まで

削平されている様子が確認された。このことから、文化層が確認された4箇所の試掘坑の略東西の斜面周辺にのみ、遺跡が残存している状況と考えられる。試掘調査の成果を受けて、発見された遺跡は「大道原A遺跡」と呼称している。

管理棟(3)地区(MC-314-D)

試掘坑は10箇所設定し、うち2箇所^{ウムドウボ}で文化層が確認された。No.8については調査時の写真、略図等が確認できなかったため、何らかの理由で掘削が行われなかった可能性がある。No.2・10については掘削状況の写真が確認されなかったため未掲載とした。

1. 基本層序

I層：現表土。米軍基地造成に伴う客土のほか、造成後に堆積した二次堆積層が確認された。

No.6・7・9は造成後にアスファルト舗装されている。

II層：No.6・9の2箇所^{ウムドウボ}で確認された暗褐色土の文化層である。No.6では表土下約80cmに、厚さ約1.3mの暗褐色土層が確認された。No.6では石灰岩礫層を挟んで上下二枚の遺物包含層が確認された。遺物は礫層との境目に集中するとの記録がある。出土遺物等から、グスク時代の層と判断した。No.9の暗褐色土層については、出土遺物等の記録がないが、隣接するNo.6の堆積状況等から、II a層（グスク時代の層）に対応すると推測される。

III層：No.6で確認された、上下の文化層に挟まれた石灰岩礫層。出土遺物等がなく、時期は不明である。

IV層：No.6で確認された。細片ではあるが、胎土の特徴から宇佐浜式土器とみられる土器片が出土していることから、縄文時代晩期の層と推測される。

V層：赤土層で、自然堆積層とみられる。No.2～7・9・10の8箇所^{ウムドウボ}で確認された。

VI層：石灰岩層で、基盤層とみられる。No.2・3・5では石灰岩層の直上に腐植土層（基本層序V層に含む）が堆積しており、石灰岩の風化に伴うものかと推測される。

2. 遺構・遺物

9箇所のうち、どの試掘坑からも遺構の検出はなく、遺物はNo.7で土器が出土したが、小片のため作図不可能であった。

小結

文化層はNo.6・9の二箇所^{ウムドウボ}で確認されたが、その周辺については基地造成に伴う攪乱や地形の削平等を受け、消失したと考えられる。そのため、西側に所在する大道原A遺跡との関連は不明である。No.7の暗褐色土層については、所見で移行層との記載があり、自然堆積ととれる様相であるが、近接するNo.6・9で確認された文化層と土色等で類似がみられることなどから判断がつかかねるため、基本層序には加えていない。

試掘調査の成果を受けて、発見された遺跡については「大道原B遺跡」と呼称している。

管理棟(4)地区[MC-319-D]

試掘坑は6箇所設定した。遺物は少量認められたが、遺構は確認されなかった。

1. 基本層序

I層：現表土。米軍基地造成に伴う客土とみられる。

II層：赤土層。No.2・No.4ではマンガンの堆積が認められる。地山とみられる。

Ⅲ層：調査時の所見では有機質土壌や腐植土層としている。この下層には風化石灰岩層が確認されており、石灰岩層の上に堆積する自然堆積層と考えられる。

Ⅳ層：風化石灰岩層。岩盤とみられる。

2. 遺構・遺物

6箇所のうち遺構はどの試掘坑からも確認できなかった。遺物の出土はNo.3の客土層で磁器の破片が出土したのみである。

小結

基本的な層序は、まず基地造成に伴う客土とみられる層が堆積し、以下は自然堆積層とみられる赤土層、腐植土層、基盤層とみられる風化石灰岩層が検出されている。No.3で磁器片が出土したものの、客土層からの出土であり、設定した6箇所の試掘坑では文化層とみられる層が確認されなかったことから、遺跡なしと判断された。

工場（1）地区 [MC-290-D]

試掘坑は1箇所設定した。遺物・遺構等は確認されなかった。

1. 基本層序

Ⅰ層：現表土。米軍基地造成に伴う客土とみられる。

Ⅱ層：暗褐色土層。遺物・遺構等は確認されなかったが、周辺の調査状況等を参考に、旧表土層と判断した。

Ⅲ層：赤褐色土層。地山とみられる風化土壌で、島尻マージ層である。

Ⅳ層：灰褐色シルト層。クチャにマージとみられる土壌が混じる。下層に赤褐色を呈する層が認められた。

Ⅴ層：海底砂利層。

2. 遺構・遺物

1箇所のみの調査で、この調査区では遺構の検出も遺物の出土も確認されなかった。

小結

遺物・遺構等は確認されなかったため、遺跡なしと判断された。しかし、プライマリーな自然堆積層の残存状況は良く、地山とみられる島尻マージ層、海底堆積層とみられる砂利層が確認された。現地地形図に記載された標高をもとにすると、調査区の地表下約3.6mで海拔0mとなるため、検出された層序は一带の旧環境の様相を良く残していると思われる。

工場（2）地区 [MC-313-D]

試掘坑は3箇所設定した。遺物・遺構等は確認されなかったが、No.4の試掘坑で水田跡と推測される層が確認された。

1. 基本層序

Ⅰ層：Ⅰ層は米軍基地造成に伴う造成土層であるが、土質の違いによりa・bに細分できる。Ⅰa層はコーラル、赤土といった米軍基地造成に伴う客土で、現表土である。Ⅰb層は灰白色シルト層で、戦後米軍が一带の田畑を埋め立てるのに用いた浚渫土と推測される。

Ⅱ層：暗褐色土層。No.4のみで確認された。遺物・遺構等は確認されなかった。米軍基地造成以

前の旧表土、もしくは旧耕作土の可能性がある。

Ⅲ層：暗褐色土の泥炭層で、Ⅱ層と同様、No.4でのみ確認された。タニシを含むことから、水田として利用された層である可能性がある。

Ⅳ層：No.2・No.3で検出された高植土層。No.4では湖底の堆積と表現しており、自然堆積層と推測される。遺物・遺構等は確認されなかった。

Ⅴ層：混土砂層で、No.1では暗褐色、No.2では褐色を呈すが、同質の層序と思われる。遺物・遺構等は確認されなかったため、自然堆積層とみられる。

Ⅵ層：旧海底堆積とみられる混礫層・砂層。No.1では灰褐色砂層、No.2は灰褐色混礫砂層・灰褐色砂層、No.4では砂礫層と表現しているが、基本層序としては旧海底堆積に関連する層として一括した。

Ⅶ層：No.1で確認されたニービ（砂岩）。所見では砂層と記載。基盤層にあたとみられる。

2. 遺構・遺物

3箇所とも遺構の検出はなく、遺物もNo.1でシャコガイが確認されたのみで、人工遺物は確認されなかった。

小結

遺物・遺構等は確認されなかったが、No.4の試掘坑で水田跡の可能性のある層序が確認された。しかし、時期を特定できるものがなく、詳細は不明である。だが、1940～50年代に作成された土地台帳をもとに作成された文化課所蔵資料から、調査区周辺が水田として利用されていたことが確認できた。そのため、少なくとも米軍基地造成以前、調査区周辺が水田として利用されていたと判断される。

また、現地地形図に記載された標高をもとにすると、地表下約3.6mで海拔0mとなり、旧海底の堆積層とみられる砂礫・砂層が確認されていることから、同年度に調査を実施した、工場（1）[MC-290-D]地区同様、一帯の旧環境の様相を良く残していると思われる。

管理棟地区（施設番号：6044）

試掘坑は6箇所設定し、2箇所で時期不明の旧表土層を確認したが、遺構等は未確認である。

1. 基本層序

I層：米軍基地造成に伴う客土層である。土質等により細分可能であるが、基本層序では客土層として一括する。No.2では客土層中に土器、沖繩産陶器（壺屋焼）の破片が含まれていた。

Ⅱ層：暗褐色土層。旧表土層とみられるが、遺構等は未確認のため、時期の断定は控える。

No.4の層下部は、層上部より古い時期の旧表土層の可能性がある。

Ⅲ層：赤土層等の自然堆積とみられる層。基本層序では自然堆積として一括する。

Ⅳ層：石灰岩礫層。基盤の石灰岩の風化層とみられる。

2. 遺構・遺物

遺構・遺物の出土は認められなかったため、遺跡なしと判断された。

小結

試掘坑は6箇所設定し、うち2箇所で時期不明の旧表土層が確認されたが、遺構・遺物は確認されなかったため、遺跡なしと判断された。

第2表 平成4年度 調査区別遺物出土状況

調査年	調査月日	調査区	試掘No.	遺構	遺物	備 考
1992年	11月25日 ・12月2日	管理棟(2)地区 (MC-271-D)	1			
			2			
			3			
			4			
			5	落ち込み	土器・湧田焼・木炭片	包含層
			6			
			7			
			8			
			9			生物包含層
			10			
			11		壺屋陶器	
			12			
	11月25日	管理棟(3)地区 (MC-314-D)	1			
			2			
			3			
			4			
			5			
			6		土器	遺物包含層
			7			
			9			遺物包含層
			10			
			11月24日	管理棟(4)地区 (MC-319-D)	1	
	2					
	3				磁器	
4						
5						
6						
11月27日	工場地(1)区(MC-290-D)	1				
11月27日	工場(2)地区 (MC-313-D)	1		シャコ貝		
		2				
		4				
12月1日	管理棟(1)地区 (MC-279-D)	1	不明遺構	青磁・南蛮焼・壺屋焼	表土下2.7mに約50cmの黒褐色土層(層中に石灰岩礫のレベル、遺物出土)	
		2	畑	貝殻・木炭片	表土下3mに、約1mの暗褐色土層(貝殻、炭化物を含む文化層)	
		3		壺屋焼・染付碗	表土下1.5mに、約1mの黒褐色土層、その上層に遺物出土するレベル、下層に約30cmの貝層、2枚の文化層あり	
1993年	1月21・ 22日	管理棟地区 (施設番号6044)	1			有機質
			2		土器・壺屋陶器	
			3			
			4		炭	
			5			
			6			有機質土

第2表に調査日の順に試掘の詳細を示した。平成4年度は計7地区で調査を行い、これまで地区別で各々述べたように管理棟(1)～(4)地区の数箇所まで遺物が確認され、工場(1)・(2)地区の2地区では人工遺物は認められなかった。国道58号に近い工場(1)・(2)地区では海浜に近く、沖積層で海拔が低いことから、4m程度掘削すると水が湧く。遺物は自然遺物であるシャコガイのみの出土である。

管理棟(1)～(4)地区では、人工遺物の出土が僅かに認められ土器、沖繩産陶器(湧田焼・壺屋焼)、磁器、南蛮焼、青磁、染付等が出土した。時期的には沖繩産陶器は近世に相当し、青磁・南蛮焼等はグスク時代に相当するが、点数は少ない。土器は縄文晩期からグスク土器とみられるが、いずれの遺物も小片のため図化は困難なものばかりである。

以上、平成4年度にキャンプ瑞慶覧内で実施した管理棟(1)～(4)地区、工場(1)・(2)地区、別途調査を実施した管理棟地区の計7地区の試掘調査では、管理棟(1)地区で「後原遺跡」、管理棟(2)地区で「大道原A遺跡」、管理棟(3)地区で「大道原B遺跡」、計3件の埋蔵文化財を発見、確認した。

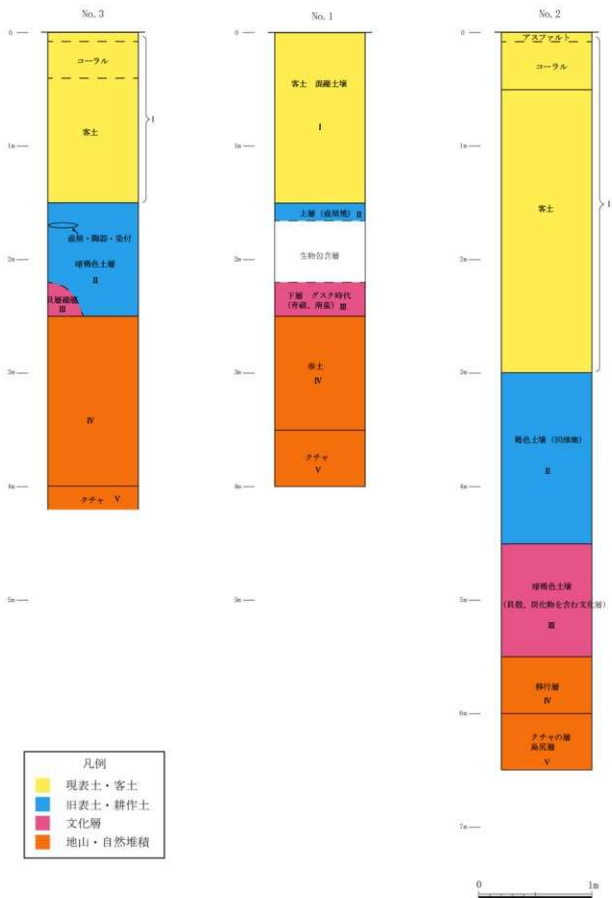
「後原遺跡」についてはグスク時代、近世～戦前の時期を示す遺物が出土しており、近接する玉代勢原遺跡、戦前の旧玉代勢集落との関連が想定される。

「大道原A遺跡」、「大道原B遺跡」は近接するが、米軍基地建設に伴う造成により遺跡の一部が削平等の影響を受けた状況であったため、関連は不明である。「大道原A遺跡」はグスク時代、近世～戦前の時期、「大道原B遺跡」は縄文時代晩期・グスク時代の時期の層が確認された。

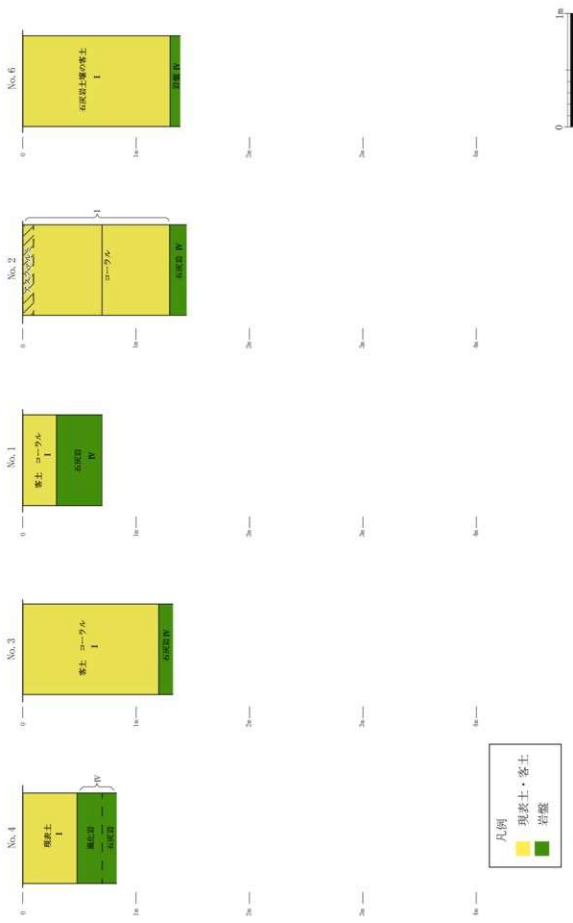
また、工場(2)地区では、一箇所の試掘坑で水田跡とみられる層序が確認された。戦前、北谷城の南側には北谷・玉代勢・伝道の3つの字(旧村)があり、これらは総称して「北谷三箇」きたやみきよかまたは「三村」と呼ばれていた。この北谷三箇の南側には田んぼ地帯が広がっており、「北谷ターブック」きたやターブックと呼ばれ、美田地帯として知られていた。工場(2)地区で確認された水田跡とみられる層は、遺物・遺構等時期を特定できるものが検出されなかったため、時期・詳細は不明であるが、「北谷ターブック」に関連する層と考えられる。一帯にあった田畑については、戦後、米軍が浚渫土を用いて埋め立てたとの証言が複数あり^{註1}、検出状況等から工場(2)地区の調査で確認された基本層序I b層がそれに対応すると推測される。

その他、工場(1)・(2)地区では、最下層部で旧海底堆積層とみられる砂礫・砂層が確認されている。試掘調査の成果等から、グスク時代には北谷城跡の所在する丘陵麓まで海が迫っていたことがわかっており^{註2}、工場(1)・(2)地区でも旧海底堆積層とみられる層が確認されたことは、調査区一帯の旧来の地形環境を示すものと思われる。

註1・2 『北谷城—総括報告書—』 北谷町文化財調査報告書第44集 2020年 北谷町教育委員会 64頁



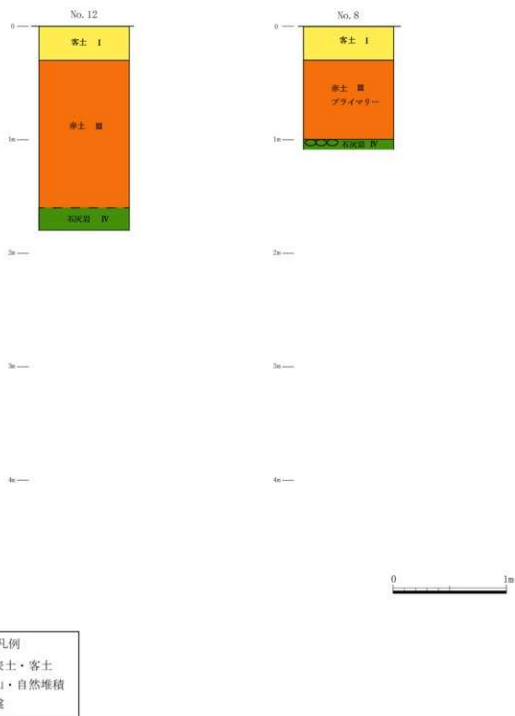
第11図 層序1 (平成4年度 管理棟(1)地区 MC-279-D)



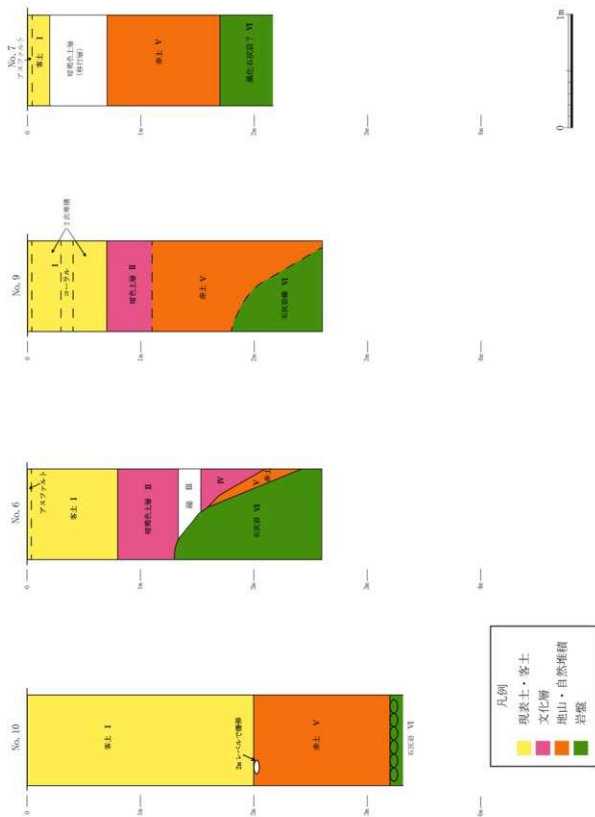
第 12 図 附序 2 (平成 4 年度 管理等 (2) 地区 MC-271-D) 1



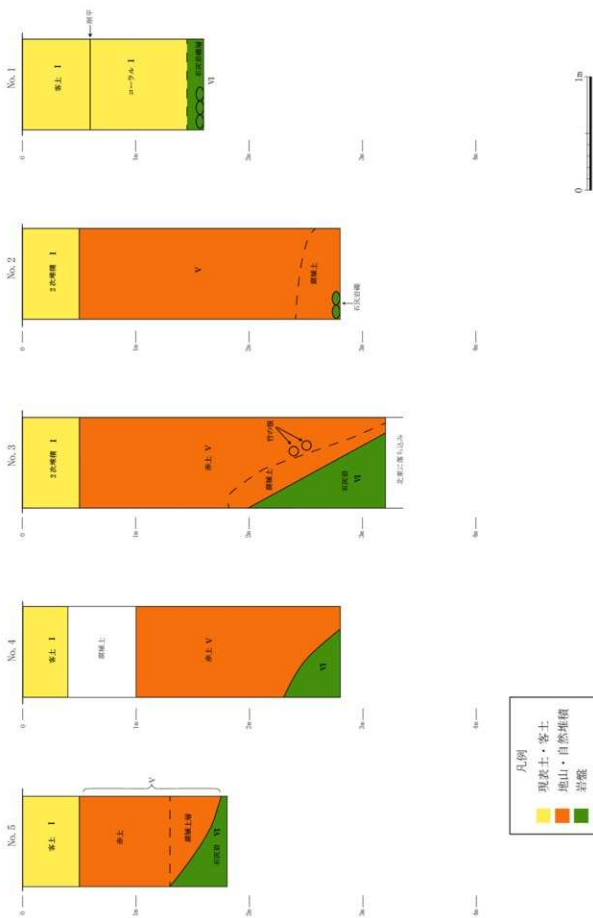
第 13 図 層序 3 (平成 4 年度 管理等 (2) 地区 MC-271-D) 2



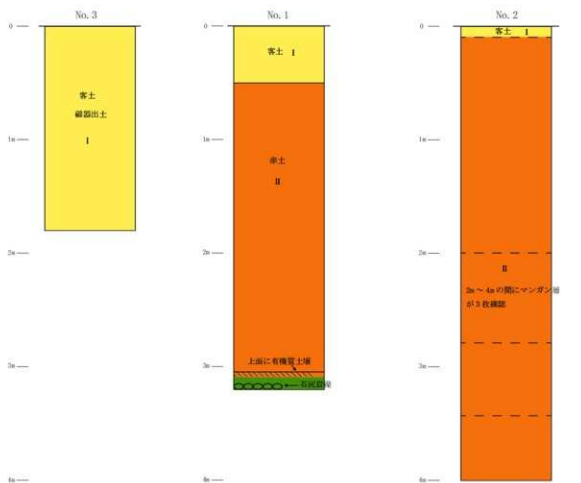
第14図 層序4 (平成4年度 管理棟(2)地区 MC-271-D) 3



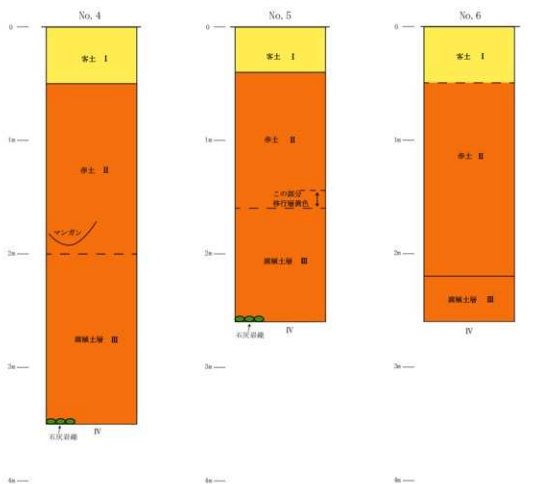
第 15 図 附序 5 (平成 4 年度 管理等 (3) 地区 MC-314-D) 1



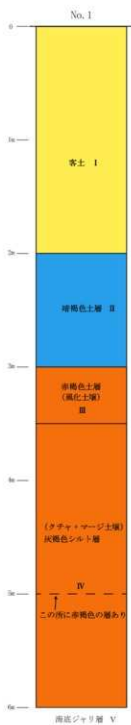
第 16 図 附序 6 (平成 4 年度 管理等 (3) 地区 MC-314-D) 2



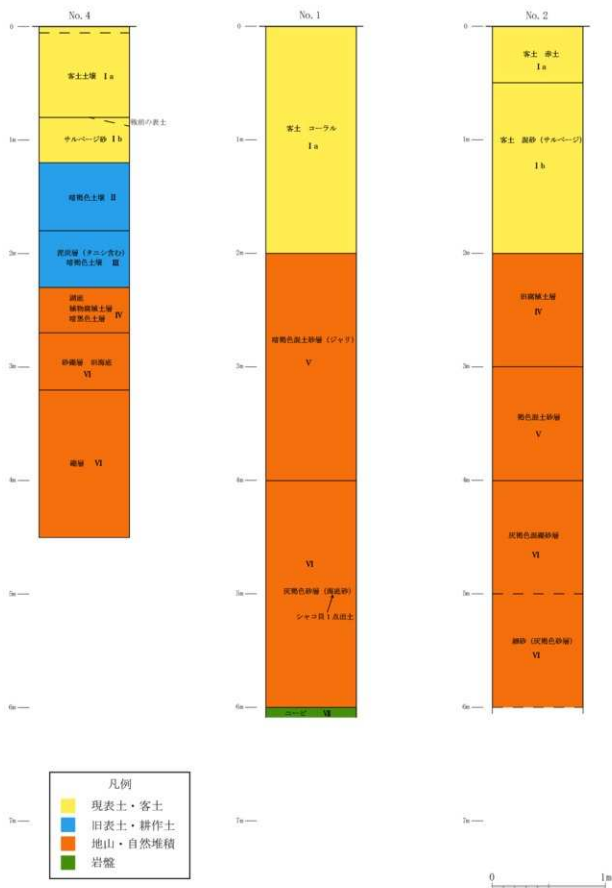
第17図 層序7 (平成4年度 管理棟(4)地区 MC-319-D) 1



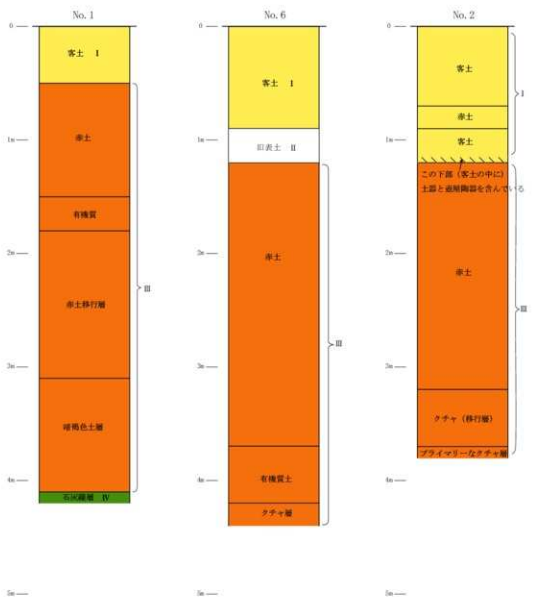
第 18 図 層序 8 (平成 4 年度 管理棟 (4) 地区 MC-319-D) 2



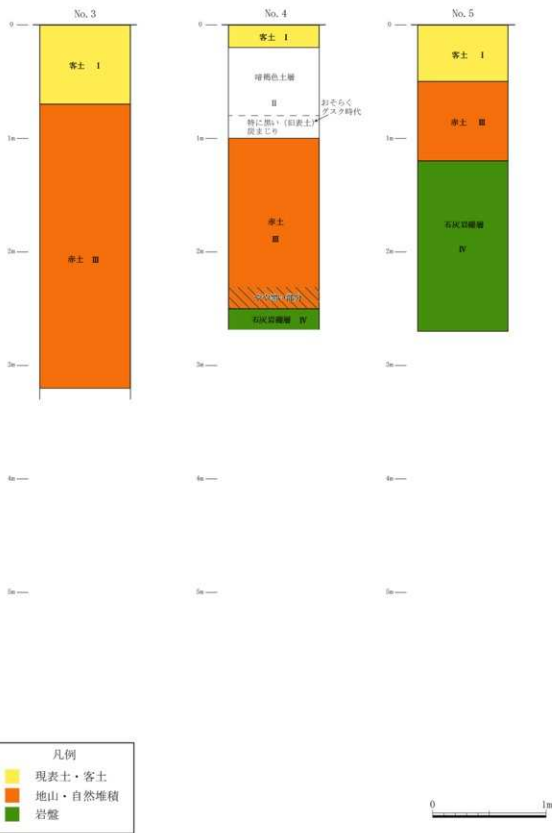
第19図 層序9 (平成4年度 工場(1)地区 MC-290-D)



第20図 層序10 (平成4年度 工場(2)地区 MC-313-D)



第 21 図 層序 11 (平成 4 年度 管理棟地区 6044) 1



第 22 図 層序 12 (平成 4 年度 管理棟地区 6044) 2



試掘 No. 1 上層



試掘 No. 1 下層



試掘 No. 2 上層



試掘 No. 2 下層

図版 1 平成 4 年度 管理棟 (1) 地区 (MC-279-D) 1



試掘 No. 3 上層



試掘 No. 3 上層



試掘 No. 3 下層



試掘 No. 3 下層

図版 2 平成 4 年度 管理棟 (1) 地区 (MC-279-D) 2



試掘 No. 1



試掘 No. 2



試掘 No. 3



試掘 No. 4



試掘 No. 5

図版 3 平成 4 年度 管理棟 (2) 地区 (MC-271-D) 1



試掘 No. 6



試掘 No. 7



試掘 No. 8



試掘 No. 10



試掘 No. 9

図版4 平成4年度 管理棟(2)地区 (MC-271-D) 2



No. 11 上层



No. 11 上层



No. 12 掘削途中状況



No. 12 完掘状況

図版5 平成4年度 管理棟(2)地区(MC-271-D) 3



試掘 No. 1



試掘 No. 3



試掘 No. 4



試掘 No. 5

図版 6 平成 4 年度 管理棟 (3) 地区 (MC-314-D) 1



試掘 No. 6

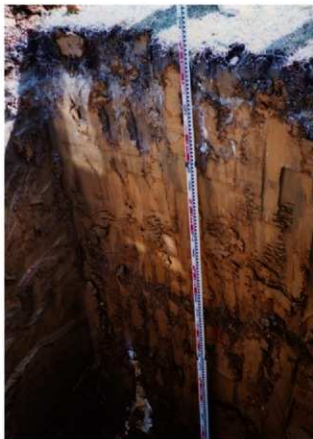


試掘 No. 9



試掘 No. 7

図版 7 平成 4 年度 管理棟 (3) 地区 (MC-314-D) 2



試掘 No. 1 上层



試掘 No. 1 下层



試掘 No. 2 上层



試掘 No. 2 下层

図版8 平成4年度 管理棟 (4) 地区 (MC-319) 1



試掘 No. 3



試掘 No. 4 上层

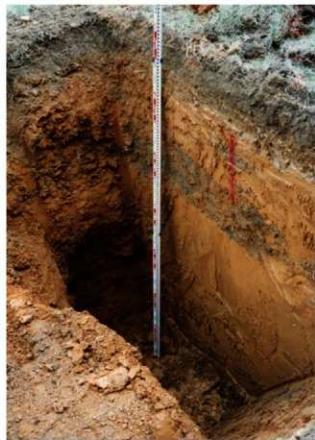


試掘 No. 4 下層

図版9 平成4年度 管理棟 (4) 地区 (MC-319-D) 2



試掘 No. 5



試掘 No. 6



試掘 No. 6 下層

図版 10 平成4年度 管理棟 (4) 地区 (MC-319-D) 3



試掘 No. 1 上层



試掘 No. 1 下層



試掘 No. 1 最下層

図版 11 平成4年度 工場(1)地区 (MC-290-D)



試掘 No. 1 上層



試掘 No. 1 下層



試掘 No. 2 上層



試掘 No. 2 下層

図版 12 平成4年度 工場 (2) 地区 (MC-313-D)



試掘 No. 1



試掘 No. 2



試掘 No. 3 上层



試掘 No. 3 下層

図版 13 平成4年度 管理棟地区 (6044) 1



試掘 No. 4



試掘 No. 5



試掘 No. 6

図版 14 平成4年度 管理棟地区 (6044) 2

第Ⅲ章 平成5年度 試掘調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成5年度の試掘確認調査については、ファミリーサービスセンター地区、家具販売店地区、銀行地区のほか、ビルディング移転計画に基づく試掘調査、計4地区で調査を実施した。

ファミリーサービスセンター地区、家具販売店地区、銀行地区については、那覇防衛施設局（現沖縄防衛局）より有無照会等を受けて調査を実施したが、当該文書の所在が確認できなかったため、文書でのやり取りの詳細は不明である。3地区の調査は平成5年11月17日から同年11月18日の期間で実施した。

ビルディング移転計画に基づく試掘調査（以下、ビルディング地区と呼称する）については、沖縄県中部土木事務所の道路拡幅計画に伴い計画された建物移転に関連するもので、調査は平成5年11月22日から同年11月24日の期間で実施しているが、有無照会等の文書の所在が確認できなかったため、調査経緯に係る詳細は不明である。

調査期間：平成5(1993)年11月17日～11月24日

調査は11月17日にファミリーサービスセンター地区と銀行地区、11月18日には家具販売店地区を、11月22日・24日にはビルディング地区で試掘調査を行った。以下、地区別に記述する。

第2節 調査体制

調査主体	北谷町教育委員会	
調査責任者	教 育 長	當山 憲一
事 務 局	社会教育課長	照屋 勝雄
	社会教育係長	知念 良範
調査担当	社会教育主査	中村 愿

第3節 調査成果

試掘調査は、ファミリーサービスセンター地区、家具販売店地区、銀行地区の3地区を同時期に実施し、家具販売店地区で埋蔵文化財を確認した。そのほか、ビルディング地区にて調査を実施し、遺物の出土は確認されたが、遺物包含層はなしと判断された。基本層序・遺構・遺物は、調査地区ごとに取りまとめ、以下に記す。

ファミリーサービスセンター地区

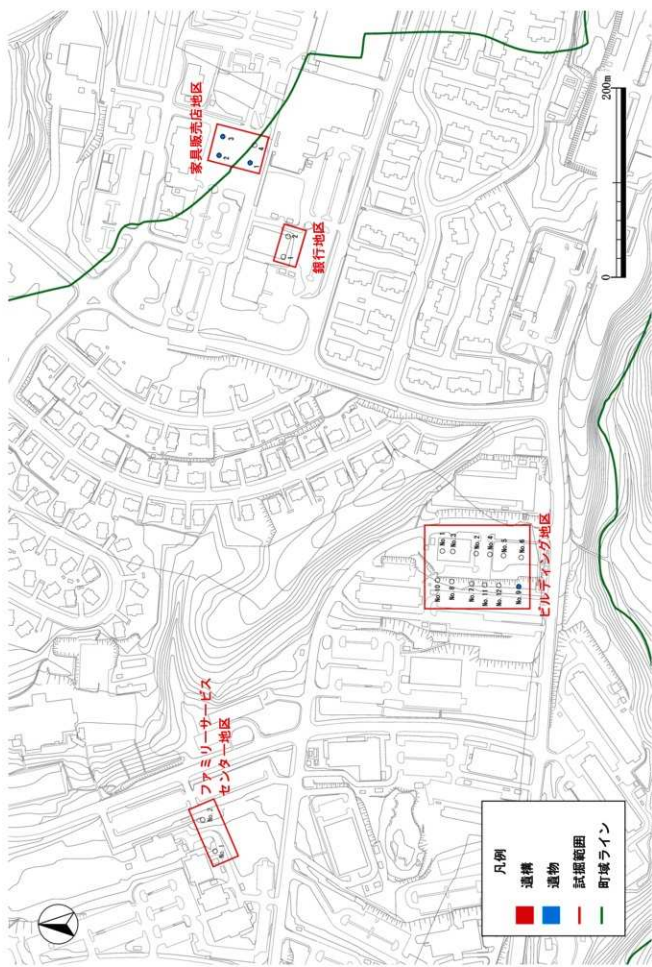
試掘坑は2箇所設定した。遺構・遺物等は確認されなかった。

1. 基本層序

I層：客土とみられる層で、米軍基地造成に伴うものと考えられる。約3mと厚い。

II層：旧表土層であるが、No1とNo2では土色が異なるが、旧表土層として一括してとらえた。

No1は赤色土層上面にビット状の窪みが認められるが、人為的なものか自然に形成されたものは



第23図 平成5年度調査地区位置

不明である。厚さは約1m。№2は暗褐色土壌で、厚さは約30cm。

Ⅲ層：褐色土層で、自然堆積の地山層とみられる。

Ⅳ層：岩盤。基盤層と考えられる。

2. 遺構・遺物

2箇所の試掘を実施、遺構検出、遺物の出土は確認されていない。層序の項目で述べたように3m近い客土がみられ、下層の旧表土は赤土、暗褐色土層などで包含層は認められなかった。

小結

調査結果では、地表下約3mまで米軍基地造成に伴うものとみられる客土層が確認された。その下層に旧表土層とみられる層が残るが、遺物、遺構等は確認されなかったため、遺跡なしと判断された。

家具販売店地区

試掘坑は4箇所設定し、3箇所¹⁾で文化層を確認した。

1. 基本層序

Ⅰ層：客土とみられる層で、いくつか細分できるが、すべて米軍基地造成に伴うものと考えられるため一括する。№4ではコーラル層の下に、調査時の所見で2次堆積とした層があるが、周辺の試掘坑で確認した層序の検出状況、№4で検出された層序の堆積状況等から検討した結果、直上のコーラル層を造成した際に攪乱を受けるなど、客土層の影響を受けている層ではないかと解釈した。

Ⅱ層：赤土、暗褐色を呈する層で、基地造成以前の旧表土層と推測される。遺物・遺構等は確認されなかった。

Ⅲ層：暗褐色を呈する層で、土器片等の遺物を含む文化層（包含層）である。時期としては、グスク時代の層とみられる。№1～3で確認された。

Ⅳ層：赤土、褐色土を呈する層で、自然堆積の地山層とみられる。

2. 遺構・遺物

4箇所のうち№1～3で僅かに土器の出土が認められたが、№2・3は北中城村との町村境にあたる。又、№1から出土した土器は5mm大の資料であったため、図化は困難と判断した。

小結

調査の結果、№1～3でグスク時代の時期に比定される文化層が確認された。文化層が確認された試掘坑の位置から、文化層は調査区南側に良く残存していると想定されるが、№4については地表下約3mまで基地造成の影響を受けている様子が認められたため、残存していた文化層が基地造成に伴い削られた可能性もある。試掘調査の成果を受けて、発見された遺跡は「横富原遺跡¹⁾」と呼称している。

ビルディング地区

試掘坑は12箇所設定した。№9の試掘坑で土器片の出土が確認されたが、出土した層は客土層と判断され、遺跡なしと判断されている。

1. 基本層序

I層：客土とみられる層で、いくつか細分できるが、すべて米軍基地造成に伴うものと考えられる。No.2で二次堆積としている暗褐色土層は、隣接するNo.4で検出された客土層と土色等が類似することなどから、同じく米軍基地造成に伴うものと解釈した。No.9では土器片を含む暗褐色土層が確認されているが、現場での精査の結果、客土層と判断されている。

II層：暗褐色を呈する層で、基地造成以前の旧表土層と推測される遺構・遺物等は確認されなかった。

III層：赤、赤褐色を呈する層で、自然堆積の地山層とみられる。遺物・遺構は確認されず、混入物もほとんどみられない。

IV層：基盤層と考えられる。石灰岩層。

2. 遺構・遺物

遺構は検出されていない。遺物については、No.9で土器片が出土しているが、遺物包含層ではなく客土層からの出土となっている。

小結

全体的に客土層の堆積が厚く、地表下4mまで客土の堆積が確認された場所もあった。12箇所設定した試掘坑のうち、No.9で土器片を含む層が確認されたが、現場での精査の結果、米軍基地造成に伴う客土層と判断されている。No.3・8では基地造成以前の旧表土層が認められたが、遺構・遺物等は確認されなかったため、遺跡なしと判断された。

銀行地区 (MC372-D3)

試掘坑は2箇所設定した。遺物、遺構等は確認されなかった。

1. 基本層序

I層：赤土層。遺物、遺構等は確認されず、混入物もほとんどみられない。自然堆積層とみられる。

II層：石灰岩礫層。岩盤である石灰岩の風化層とみられる。

2. 遺物・遺構

遺物、遺構は確認されなかった。

小結

調査区に設定した2箇所の試掘坑では、遺物、遺構等は確認されなかった。I層で確認された赤土層は自然堆積とみられ、以下は岩盤とみられる石灰岩礫層であることから、今回の調査では遺跡なしと判断された。

第3表 平成5年度 調査区別遺物出土状況-1

調査年	調査月日	調査区	試掘No.	遺構	遺物	遺物の種類	備考
1993年	11月19日	ファミリーサービスセンター地区	1	×	×		
			2	×	×		
		銀行地区 (MC372-D3)	1	×	×		
			2	×	×		
	11月18日	家具販売店地区	1	×	○	土器	
			2	×	○	土器	町外(北中城村)
			3	×	○	土器	町外(北中城村)
			4	×	×		

第3表 平成5年度 調査区別遺物出土状況 -2

調査年	調査月日	調査区	試掘 No.	遺構	遺物	遺物の種類	備考
1993年	11月22日 ・24日	ビルディング移転計画試掘調査地区	1	×	×		
			2	×	×		
			3	×	×		
			4	×	×		
			5	×	×		
			6	×	×		
			7	×	×		
			8	×	×		
			9	×	○	土器	
			10	×	×		
			11	×	×		
			12	×	×		

第3表に示すようにファミリーサービスセンター地区、家具販売店地区、銀行地区、ビルディング地区の4地区で掘削を実施した。ファミリーサービスセンター地区では3m近い客土がみられ、包含層は認められなかった。銀行地区も遺物の出土は確認されなかった。家具販売店地区はNo.1～3で僅かに土器の出土が認められたが、図化は困難であった。ビルディング地区ではNo.9で土器が確認されたが、当該層は客土で本来の堆積層の出土ではないため、掲載を見送った。

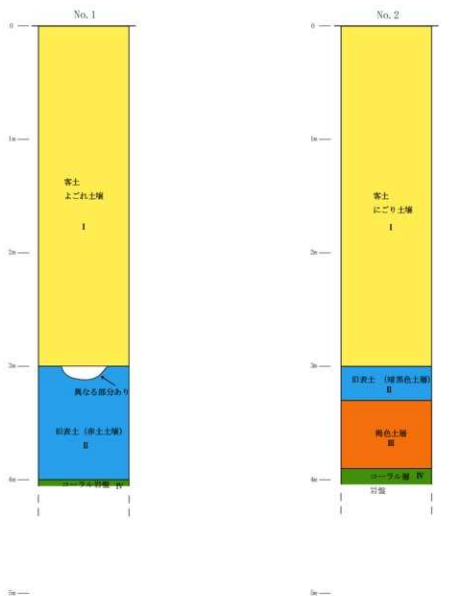
以上、平成5年度にキャンプ瑞慶覧内で実施したファミリーサービスセンター地区、家具販売店地区、銀行地区、ビルディング地区の計4ヶ所での試掘調査のうち1箇所、家具販売店地区で「横高原遺跡」を発見、確認した。

「横高原遺跡」については、包含層は地表下3.2～3.3mの深さで確認されており、土器片等、グスク時代の時期に比定される遺物が出土している。位置としては北谷町と北中城村の町・村域にまたがっており、『北中城村の遺跡』では、「遺跡一帯は、もともと小丘陵があったようであるが、米軍基地建設の際に造成され平坦地になっている。」^{註1}と述べられている。

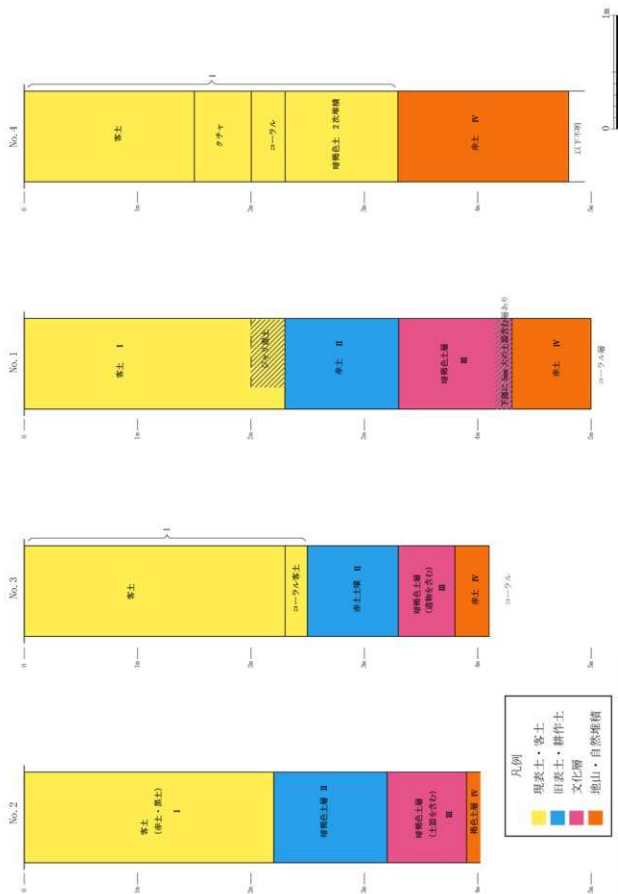
戦前、調査地区一帯は「石平屋取」と呼ばれる屋取集落が所在していたが^{註2}、今回の調査結果では近現代の集落跡は確認されなかったため、層上部は基地造成に伴う削平等の影響があったとみられる。

註1 『北中城村の遺跡』北中城村文化財調査報告書 第3集 1995年 北中城村教育委員会

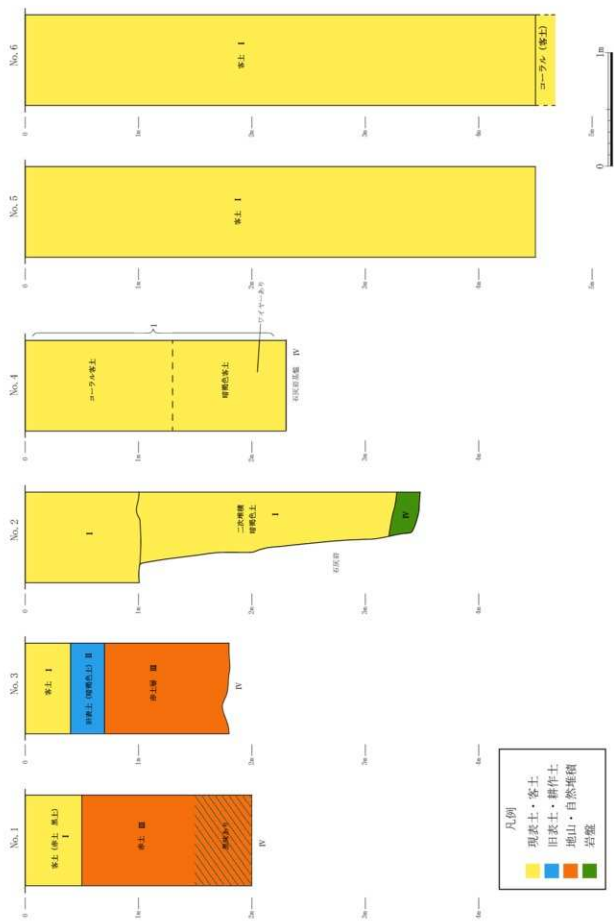
註2 『北谷町の地名』北谷町文化財調査報告書 第24集 2006年 北谷町教育委員会



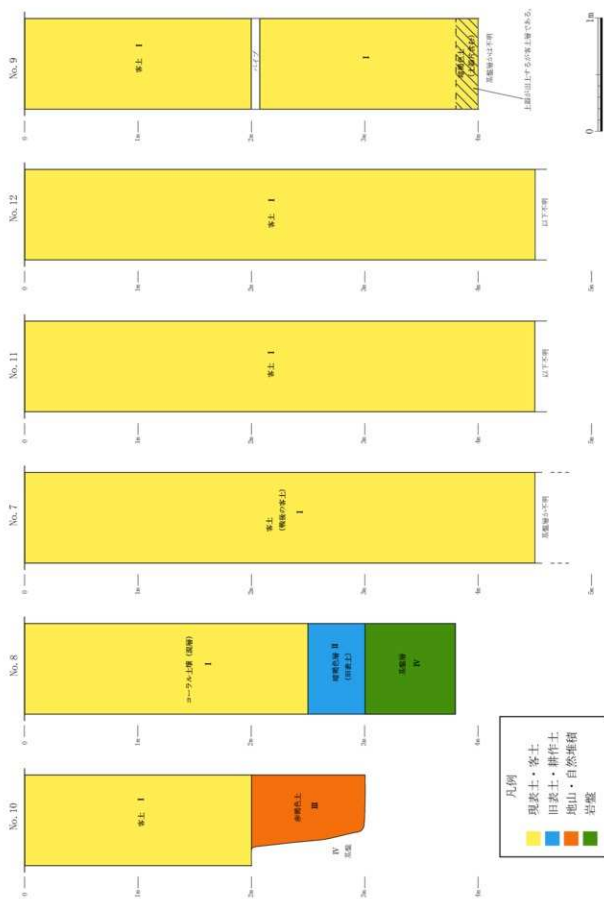
第 24 図 層序 1 (平成 5 年度 ファミリーサービスセンター地区)



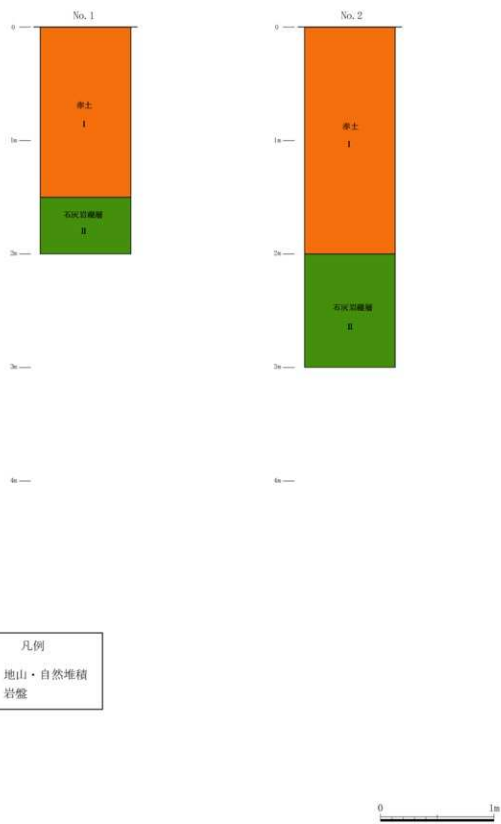
第 25 図 層序 2 (平成 5 年度 家具販売店地区)



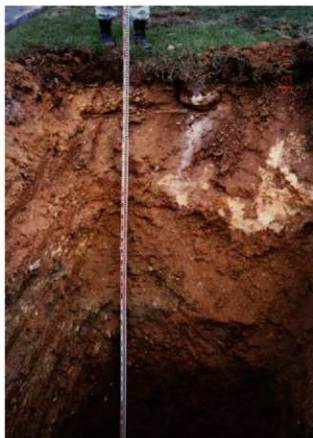
第 26 図 層序 3 (平成 5 年度 ヒルディング地区) 1



第 27 図 層序 4 (平成 5 年度 ビルディング地区) 2



第 28 図 層序 5 (平成 5 年度 銀行地区 MC-372-D3)



No. 1 上層



No. 1 下層



No. 2 上層



No. 2 下層

図版 15 平成5年度 ファミリーサービスセンター地区



No. 1 上层



No. 1 下层



No. 2 上层



No. 2 下层

図版 16 平成5年度 家具販売店地区 1



No. 3 上层



No. 3 下层



No. 4 上层



No. 4 下层

图版 17 平成 5 年度 家具販売店地区 2



試掘 No. 1



試掘 No. 2



試掘 No. 3



試掘 No. 4

図版 18 平成 5 年度 ビルディング地区 1



試掘 No. 5 上層



試掘 No. 5 下層



試掘 No. 6 上層



試掘 No. 6 下層

図版 19 平成5年度 ビルディング地区 2



試掘 No. 7 上層



試掘 No. 7 下層



試掘 No. 8 上層



試掘 No. 8 下層

図版 20 平成5年度 ビルディング地区 3



試掘 No. 9 上層



試掘 No. 9 下層



試掘 No. 10 上層



試掘 No. 10 下層

図版 21 平成 5 年度 ビルディング地区 4



試掘 No. 11 上層



試掘 No. 11 下層



試掘 No. 12 上層



試掘 No. 12 下層

図版 22 平成5年度 ビルディング地区 5



試掘 No.1



試掘 No. 2

図版 23 平成5年度 銀行地区 (MC-372-D3)

第IV章 平成6年度 試掘調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成6年度の試掘確認調査については、那覇防衛施設局（現沖縄防衛局）より、平成6年8月24日付け施那施第257号（AFQ）にて、提供施設整備工事及び移設整備工事実施予定箇所における埋蔵文化財の有無照会があった。北谷町教育委員会は平成6年9月30日付け北教社6第975号で、キャンプ瑞慶覧内の道路（歩道橋）建設予定地については工事立会とし、工場（営繕）・工場（車両南・北）2箇所・道路・バスターミナル・家具販売所及びOWAX本部の7地区については試掘調査が必要である旨を回答した。調査は平成6年11月24日から平成6年12月1日まで実施し、調査結果については平成7年2月3日付け北教社975号にて回答した。

調査期間：平成6年（1994）11月24日～12月1日

11月24日に家具販売店地区の10箇所の掘削を、11月29日には工場（車両南）地区の3箇所で掘削を行い、11月24日～12月1日の期間においてバスターミナル地区、工場（車両北）地区、工場（営繕）地区、道路地区、OWAX本部地区の5地区の調査を各々行った。

第2節 調査体制

調査主体	北谷町教育委員会	
調査責任者	教育長	富山 憲一
事務局	社会教育課長	照屋 勝雄
	社会教育係長	知念 良範
調査担当	社会教育主査	中村 愿

第3節 調査成果

試掘調査は、工場（営繕）・工場（車両南・北）2箇所・バスターミナル・家具販売所及びOWAX本部・道路の7地区で実施し、工場（営繕）・家具販売所工場・道路の3地区では埋蔵文化財を確認し、工場（車両）2箇所・バスターミナル・OWAX本部地区においては、戦前の集落、水田や畑の痕跡等が確認された。以下、基本層序・遺構・遺物については地区ごとに記述する。

工場（営繕）地区（MC-391-D）

試掘坑は3箇所設定し、No.1で土器を含む文化層が確認された。

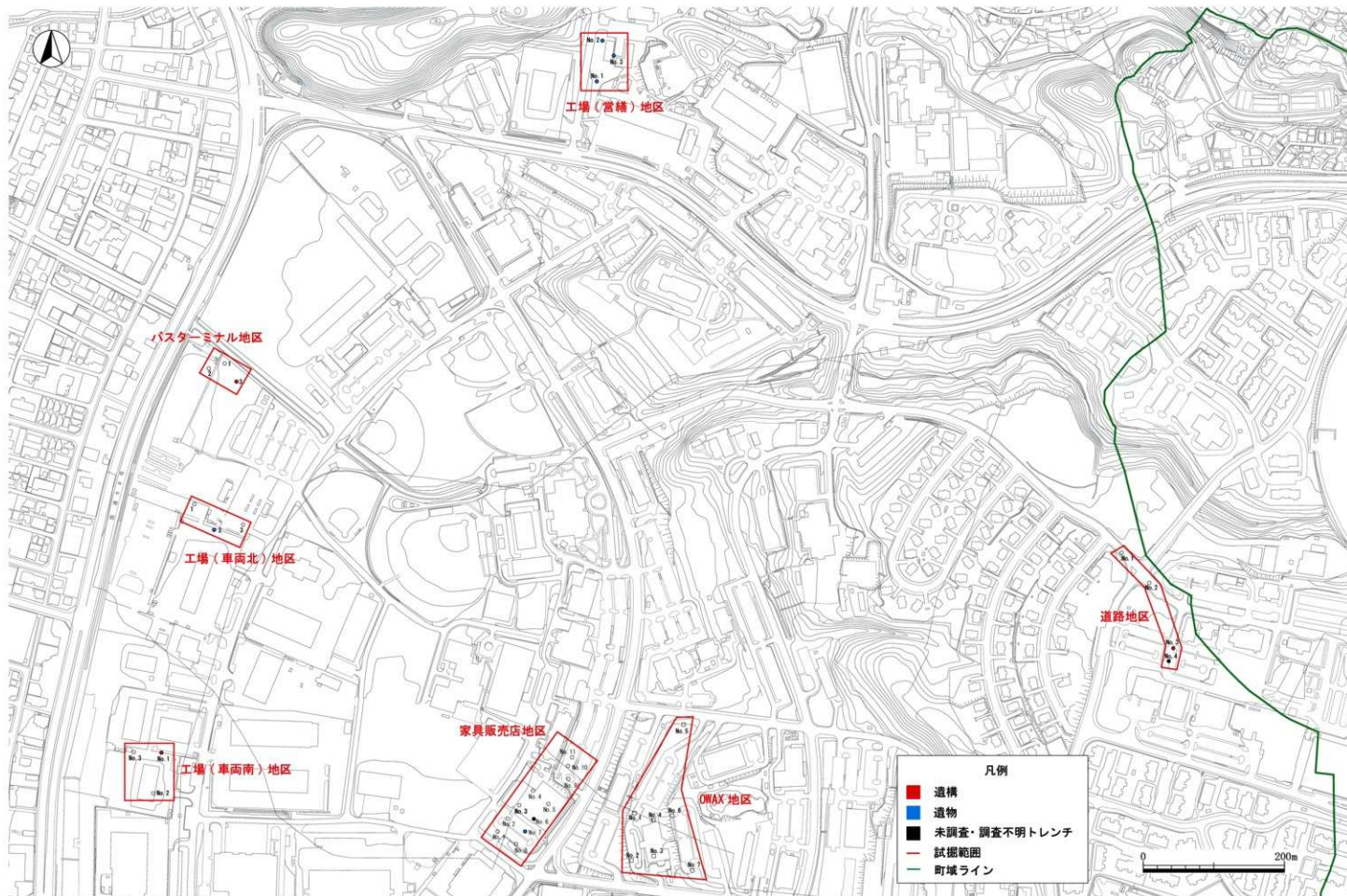
1. 基本層序

I層：米軍基地造成に伴う客土層。石灰岩礫もしくはコンクリート片の混じる褐色土層。

II層：暗褐色土層。No.1で確認された。戦前の旧表土層とみられる。

III層：黒色の有機質土層。No.1で確認された。植物の根、土器片などが含まれる文化層で、床面に沈殿する鉄分の褐色土壌が部分的にみられることから、水田として利用されていたと推測される。出土した土器の特徴から、グスク時代の層と判断された。

IV層：赤土層。No.2・3で確認された。遺物等を含まない。自然堆積層とみられる。



第29図 平成6年度 調査地区位置

V層：炭化物を含む褐色土層。人工遺物は確認されないため、自然堆積層とみられる。

VI層：島尻層（クチャ）の基盤層。細分するとVI a層は白色を呈する風化土層、VI b層は青灰色を呈する粘質土層であった。

2. 遺構・遺物

3箇所の試掘のうちNo.1で土器、No.2で炭、No.3でも炭化物が少量検出された。No.1から出土した土器は図化できる状態ではなく、掲載を見送った。

小結

3箇所の試掘坑を設定し調査をした結果、No.1の試掘坑で湧水を伴い、黒色を呈する有機質土壌（基本層序Ⅲ層）が確認され、1 cm 大の土器片が数点検出された。図化は困難であったが、これら出土土器の特徴から、当該層はグスク時代の時期のものと判断された。有機質土壌には植物の根が多く含まれ、床面には沈殿する鉄分の褐色土壌が部分的にみられる。出土遺物等の成果から、グスク時代の水田の可能性が高い。

工場（車両南）地区（MC-403-D）

試掘坑は3箇所設定し、遺物は確認されなかった。しかし、No.1で水田として利用した可能性のある層が確認された。

1. 基本層序

I層：米軍基地造成に伴う客土層。白色を呈する砂層。この下層に戦前の旧表土・耕作土層とみられる層が確認されており、戦後米軍が一带の集落跡や畑等を埋め立てるのに用いた浚渫土とみられる。

II層：黒褐色を呈する有機質の砂質土層で、No.1については戦前の旧表土・耕作土層と判断された。遺物等は確認されていない。

III層：白色砂層。No.1・2では、層の下部が赤色を呈する。試掘坑すべてで地下水が多く湧く様子がみられたため、色の違いはこの湧水等の影響が考えられる。

IV層：砂利層。海砂とみられる砂層で、旧海底の堆積等の自然堆積層とみられる。現場では土質等から細分しているが、調査時の写真では湧水が著しく滲水しており、壁面の確認ができなかったため、細分した記述は控える。

2. 遺構・遺物

遺構・遺物の出土は確認されなかったが、No.1では水田として利用した可能性のある層が確認された。

小結

No.1の試掘坑で戦前のものとみられる旧表土、水田として利用した可能性のある層が確認されたが、遺物等は確認されていない。調査区全体として湧水の流出が著しく、調査時の現場写真では基本層序Ⅲ層以下は壁面の崩落、湧水の滲水等があり、堆積状況が不明瞭な点はあるが、Ⅲ層以下は自然堆積層とみられる。

工場（車両北）地区（MC-376）

試掘坑は3箇所設定し、遺物は確認されなかった。しかし、No.2で水田として利用した可能性のある層が確認された。

1. 基本層序

- I層：米軍基地造成に伴う客土層。白色を呈する砂層。この下層に戦前の旧表土、耕作土層とみられる層が確認されていることから、戦後米軍が一带を埋め立てるのに用いた浚渫土とみられる。
- II層：戦前の集落に伴う旧表土、耕作土層。黒色を呈する砂質の腐植土層で、No.2ではタンシを多く含むことから水田として利用していたのではないかと推測される。遺物等は確認されていない。
- III層：灰色砂層。No.1・2の試掘坑で確認された。遺物・遺構等は確認されなかったため、自然堆積層とみられる。
- IV層：黄褐色・褐色を呈する砂層。No.1・3のグリッドで確認された。No.1では層上部は黄褐色砂層で、下部に5～6cmの褐色の層があるとしているが、下層部との色の違いは湧水等の影響によるものと思われる。
- V層：海底堆積層とみられる砂層。現場では土質等から細分しているが、調査時の写真では湧水が著しく滞水しており、壁面の確認ができなかったため、細分した記述は控える。

2. 遺構・遺物

3箇所を試掘を実施したが、No.2で自然貝が僅かに出土したのみで、人工遺物の出土は見られなかった。

小結

基本層序I層は米軍基地造成に伴う客土層で、戦後米軍が一带を埋め立てるのに用いた浚渫土とみられる。調査においてNo.2・3の試掘坑で戦前のものとみられる旧表土、水田として利用した可能性のある層が確認された。そのほか、地表下3m前後から、海底堆積層とみられる砂層が確認されているが、上記の工場（車両南）地区同様、壁面の崩落、湧水の滞水等が著しく、下層部については不明瞭な点があったため、層序の細分は控えた。

バスターミナル地区（MC-455-R）

試掘坑は3箇所設定し、No.3では戦前の集落の痕跡とみられる屋敷礎、位牌等が検出された。その下層からは、旧耕作土層とみられる層が2枚確認された。基本層序については、いずれの試掘坑でも様相がやや異なり、取りまとめるのが困難であったため、試掘坑別で記載しておく。遺構・遺物については基本層序のあとに地区全体の様相を記述する。

1. 基本層序

No.1

- I層：米軍基地造成に伴う客土層。細分すると、I a層は黄褐色土を主体として石灰岩礫がまばらに混入する層、I b層は灰白色シルト層で、I b層は平成4年度の工場（2）[MC-313-D]地区の調査等でも確認された、戦後米軍が一带の田畑を埋め立てるのに用いた浚渫土と推測される。

II層：褐色砂層。遺物等は出土していない。下部と次の層の境目にあたる部分の赤みが強い。調査時には地下水の流出が著しかったことから、地下水の影響によるものかとも考えられるが、詳細は不明である。周辺の試掘調査で類似する層が確認されていないため、自然堆積か客土かは判然としない。

III層：海産砂礫層。II層とは異なり、灰白色の粒の荒い砂で、海底堆積層とみられる。

No. 2

I層：米軍基地造成に伴う客土層。黄白色を呈する砂利層で、クラッシャーを含む。地表面はアスファルト舗装されている。

II層：黒色土層。

III層：暗褐色土層。

IV層：自然堆積とみられる腐植土層。木片・植物遺体等を含む。

V層：海産砂利層。自然堆積層とみられる。

No. 3

I層：米軍基地造成に伴う客土層。細分すると、I a層は黄白色を呈する砂質土層、I b層は灰白色シルト層で、No. 1でも確認された浚渫土とみられる。I c層は混凝層、I d層は灰褐色を呈する砂層で、I d層最下部では次の層との境目で屋敷礎、位牌が検出されたことから、戦前の表土を埋めるために入れられたものと推測される。

II層：旧耕作砂層。暗灰色を呈する砂質土層。

III層：旧耕土層。暗灰色を呈する。

IV層：海底砂礫層。海底の自然堆積層とみられる。

2. 遺構・遺物

No. 1・2では遺物は見られず、No. 3での遺物は位牌の他、獣骨、近代遺物（ガラス製品）が確認された。以下、遺物について個別に記述する。

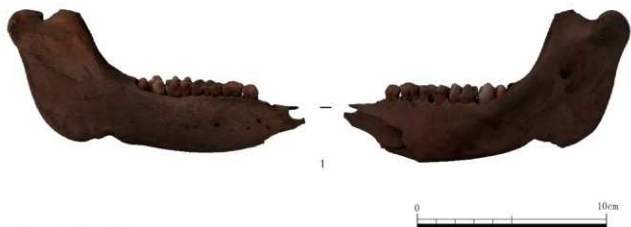
第30図のガラス製品は戦前の資料と推測され、同一個体と思われる破片が幾つか出土した。全体は、かなり薄手に作られ脆く、可能なかぎり接合を行ったが完形には至らなかった。文字のある面を表面とし、上面観は横楕円形を呈す。口の部分はやや厚手を成し、口径2.5cm、口の長さは1.3cm、ガラスの厚さは4mmを測り、口の部分は逆ハの字に開く。一段の段差を設け、若干窄まり、首の長さは1.6cm、肩の張る形状を呈し、胴部の厚さは約2mmである。他遺跡出土の類似品と文字の印字部分、内容量を示す刻みの部分などを比較すると、図上復元では全体の高さが15.7cm程度と推測される。横幅は6.4cmで底面の厚みは3mm強である。表面中央には「●●●●●●」の表記が見られ、左右に分量の目盛りが刻まれている。瓶の色は着色されておらず透明色である。この製品を使用していた当時の病院から処方された医薬品の瓶と考えられる。

戦前当時、飲料品などは回収、再利用（リターナブル）の瓶が多く使用されており、医薬品の瓶もそれに相当するものと考えられ再利用品と思われる。

図版25はイノシシ又はブタの下顎骨（右）で残存状態は良好だが、顎の先端が欠損している。歯は1本を除いて揃っている。



第30図・図版24 ガラス製品



図版25 脊椎動物遺体

第4表 平成6年度 出土遺物観察一覧

調査区名称	地区	試掘 no.	遺物	種類	部位	用途	左右	日付	年代	備考
バスターミナル地区	MC 455-R	No. 3	ガラス製品	瓶	口～胴/底部	医薬品用	-	1994.11.28	近世・近代	●●●●●の表記
			獣骨	イノシシ or ブタ	下顎骨	-	R	1994.11.28	-	-

小結

3箇所の試掘坑のうち、No.3では戦前の集落に伴うものとみられる屋敷礎、図化したガラス製品のほか、獣骨・位牌といった遺物が出土した。その下層には2枚の耕作土層が確認され、層土中からは時期を特定できる遺物等は出土していないが、層直上の遺物の状況等から、戦前の耕作土層と推測される。また、No.2で確認されたⅡ層・Ⅲ層は湿地性の堆積層と推測され、水田等に利用された可能性があるが、詳細不明である。また、すべての試掘坑において地表下3m以下からは海底堆積等の自然堆積層とみられる砂礫層が確認されている。

家具販売所地区 (MC-450-R)

試掘坑は予定建物長軸に沿って二列平行に4ヶ所、その北側に直線的に3箇所、計11箇所設定したが、No.6は壁面図の所在が確認できなかったため、壁面図・堆積状況の写真は未掲載とした。調査時の記録によると、No.6の層序検出状況等はNo.5の状況と類似する。No.7・8で文化層を確認し、No.7の試掘坑では土器の出土が確認された。

1. 基本層序

- I層：客土層。細分すると赤土、クラッシャー、クチャに似る暗灰色砂質土などがあるが、すべて米軍基地の造成に伴う客土と考えられるため一括する。
- II層：No.9・10で確認された赤土層を旧表土ととらえた。遺物・遺構等は確認されていない。
- III層：No.4で確認された、畑として利用されたとみられる層である。遺物等が未確認のため、いつの時期に畑として利用されたかは不明であるが、戦前の時期である可能性が高い。
- IV層：No.7・8で確認された暗褐色土層。No.8では上層・下層で細分が可能であり、IV a、IV bと細分した。遺物等が出土した記録はなく、詳細不明のため人為的な堆積か、自然堆積かは判断できなかった。
- V層：No.7・8で確認された細砂有機質層で、No.7では層中から5～10cm大の土器片が約30点検出された。出土土器の特徴から貝塚時代後期に相当する、約2400～2000年前の時期のもの判断された。
- VI層：No.1～3で確認された灰色粘質土（クチャ）層と、No.4で確認されたニービ（砂岩）の風化土層。自然堆積層である。
- VII層：赤土を含む石灰岩混雑層、石灰岩基盤層。No.5・9～11の最下部で確認された。

2. 遺構・遺物

試掘坑10箇所のうち、No.7で貝塚時代後期と推定される土器片が出土したが、胴部のみで図化が困難だったため、未掲載である。その他の試掘坑では遺物の出土は認められなかった。

小結

調査の結果、南東隅のNo.7・8の2地点で現地表下約6mに黒褐色シルト層がみられ、その層中に5～10cm大の土器が約30点、一括で検出された。出土土器の特徴から貝塚時代後期にあたる時期のもの判断された。

その広がりについては、北側のNo.5・6地点での現地表土下約4mで琉球石灰岩の露頭がみられることから、表土下6mに位置する包含層はNo.6地点から以北には琉球石灰岩によって遮断されていると考えられ、南側の佐阿天川（普天間川）との間に広がると思われる。家具販売所で確認された遺跡は調査で新たに確認された遺跡で、「稲千原遺跡」と呼称している。

OWAX 本部地区 (MC-452-R)

試掘坑は7箇所設定し、いずれも遺物、遺構等は確認されなかった。

1. 基本層序

- I層：客土層。米軍基地の造成に伴うものと考えられる。細分すると現表土のほか、赤土層もしくは混雑赤土層、コーラル層等があるが、客土として一括する。
- II層：基地造成以前の自然堆積とみられる赤土層。遺構・遺物等の出土はなく、地山層とみられる。

Ⅲ層：岩盤の風化の影響を受けたとみられる石灰岩礫層を含む石灰岩基盤層。

2. 遺構・遺物

いずれの試掘坑からも遺構・遺物等の出土は認められなかった。

小結

7箇所を設定した試掘坑では遺物・遺構等は確認されなかったため、遺跡なしと判断された。Na2・5～7では基地造成以前の自然堆積層とみられる赤土層が検出されているが、全体的に米軍基地造成に伴う客土層の堆積が厚く、基盤層直上や地表下5m以上まで客土層が確認された試掘坑もあった。

道路地区 (MC-413-D)

試掘坑は4箇所設定されていたが、調査時の壁面図が確認できるのはNa1～3のみで、Na4については図面が残されていないため、掘削を行っていない可能性がある。Na3では土器の小片、炭を含む文化層が確認された。

1. 基本層序

Ⅰ層：米軍基地造成に伴う客土層。赤土を主体とし、礫やクチャに似る灰色粘質土がブロック状に混じる。Na2では地表下約3.5mまで厚く堆積する。

Ⅱ層：Na2・3で確認された暗褐色土層。旧表土層とみられる。遺物・遺構等が出土していないが、戦前の層と考えられる。

Ⅲ層：Na3で確認された遺物包含層。炭や土器の小破片を含む黒褐色土層で、出土した土器の特徴からグスク時代の層と推測される。

Ⅳ層：赤土層。遺物・遺構等を含まない。自然堆積層とみられる。

Ⅴ層：石灰岩礫層。岩盤である石灰岩の表面が風化したものとみられ、基盤層と考えられる。

2. 遺構・遺物

Na1・2では遺構検出、遺物の出土も確認されなかった。No.3は包含層が確認され土器、炭が出土した。土器は破片で図化できる資料ではなかった。

小結

道路地区では、南側のNa3で客土・暗褐色土壌の下位（地表下約3m）に、厚さ50cmの木炭を多量に含む黒褐色土層が確認され、木炭に混在して土器の小破片が数点検出された。出土土器の特徴から、グスク時代のもつと判断された。

当該地区は平成5年度に試掘調査を行った、「横富原遺跡」が確認された場所から西側約50mに位置し、包含層の堆積状況も類似していることから、同一の遺跡の範囲内であると判断した。

第5表 平成6年度 調査区別遺物出土状況

調査年	調査月日	試掘地区	試掘No.	遺構	遺物	備考	
1994年	11月24日～ 12月1日	工場（営繕）地区 （MC-391-D）	1		土器		
			2		炭		
			3		炭化物		
	11月29日	工場地区（車両南/ MC-403-D）	1	田んぼ			
			2				有機質含む
			3				有機質
	11月24日～ 12月1日	工場地区（車両北/ MC-376）	1				
			2		貝		
			3				
	11月24日～ 12月1日	バスターミナル地区 （MC-455-R）	1				
			2				
			3	屋敷礎	位牌・骸骨・近代遺物		
	11月24日	家具販売所地区 （MC-450-R）	1				
			2				
			3				
			4				
			5				
			7		後期土器		
			8				
			9				
			10				
			11				
			11月24日～ 12月1日	OWAX 本部地区 （MC-452-R）	1		
	2						
	3						
	4						
	5						
6							
7							
11月24日～ 12月1日	道路地区 （MC-413-D）	1					
		2					
		3		土器・炭		包含層	

第5表に示すとおり、工場（車両南）地区のNo.1～3と、OWAX 本部地区の調査では遺物の出土は確認されなかった。工場（車両北）地区は、No.2で自然貝のみ出土が確認され、人工遺物の出土はみられなかった。工場（営繕）地区のNo.1、道路地区のNo.3土器が出土しているが、小片であった。他、家具販売所地区のNo.7で出土した後期土器は、胴部のみで図化できる資料はみられなかった。図化できた資料はバスターミナル地区で個別に記述したとおり、No.3の骸骨と戦前当時のガラス製品である医薬品の瓶のみとなっている。

以上のように、今回の試掘調査では工場（営繕）地区ではグスク時代のもとのと推測される水田跡が確認され、道路地区は「横高原遺跡」の範囲が西側まで拡大することが判明した。家具販売所区で確認された遺跡は本調査で新たに確認された遺跡で、「くろふしぼる稲千原遺跡」と呼称している。

工場（営繕）地区は、町内に唯一残存するグスクである「北谷城跡」の所在する丘陵の南東側麓に位置し、「北谷三箇」と呼ばれた伝道集落があった場所に近接する。このことから、確認された

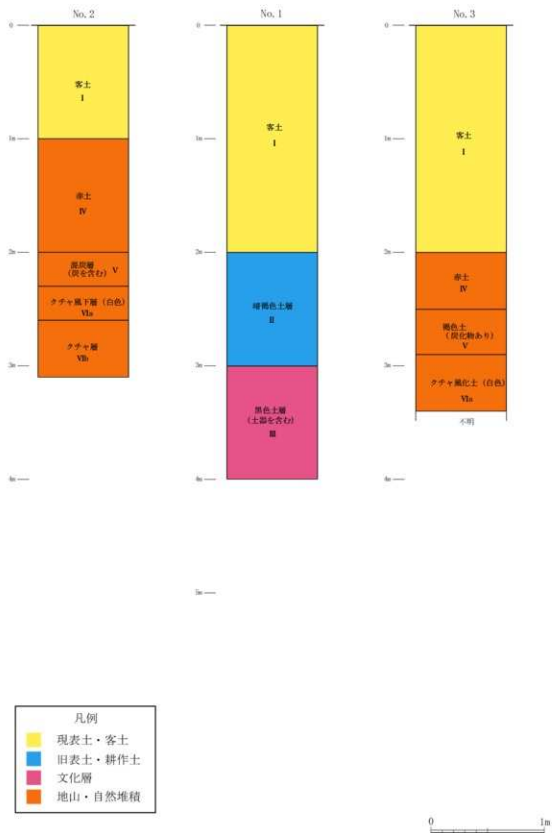
グスク時代の水田とみられる層は、グスクや旧集落と関連するものと推測される。

道路地区で確認された遺物包含層からはグスク土器とみられる土器の小破片が出土しており、堆積状況の類似、遺物包含層が確認された位置関係から、平成5年度に確認された「横高原遺跡」の範囲内に含まれるものと判断された。

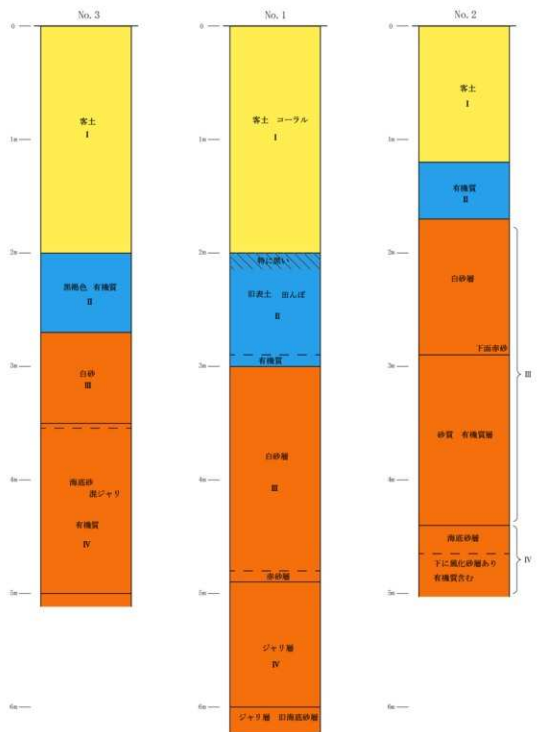
家具販売所区で確認された「稲千原遺跡」では、現地表下約6mの層で浜屋原式土器とみられる貝塚時代後期にあたる時期の土器が出土している^{註1}。Na8では遺物の出土は認められなかったが、堆積状況や土質等からNa7の遺物包含層と同一層序と判断される層が確認された。そのため遺跡の範囲はNa8を含め、調査地区外の南側に広がると推測される。

また、バスターミナル地区、工場（車両南・北）地区では、米軍基地造成に伴う客土層（一帯の集落や田畑を埋め立てるのに用いたといわれる浚渫土とみられる砂層を含む）の直下に、戦前の集落の屋敷跡とみられる痕跡、水田や畑として利用したとみられる耕作土層が確認された。戦前、一帯には「北谷三箇」のひとつであった北谷集落、「北谷ヌ前屋取」と呼ばれる屋取集落が所在しており、バスターミナル地区、工場（車両北）地区、工場（車両南）地区等で確認された屋敷跡の痕跡等はこれら旧集落に由来するものと考えられる。また、バスターミナル地区、工場（車両北・南）地区の調査時においては試掘坑の掘削に伴う湧水が著しく、加えて現地表下約3m以下からは海砂とみられる砂層の堆積であったため、壁面の崩落が多く発生した。そのため砂層の詳細な分層については差し控えたが、最下層部については旧海底堆積とみられる層が確認されている。

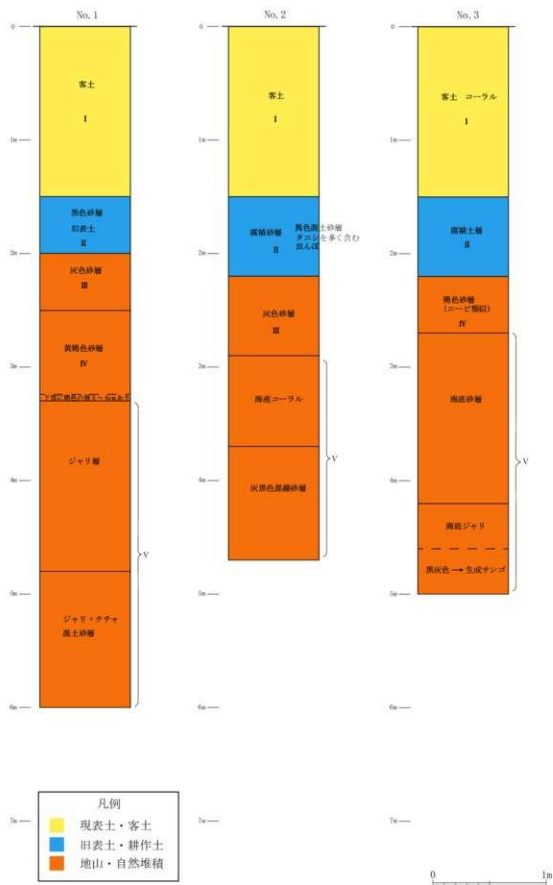
註1 『北谷町史 第一巻 通史編』 2005年 北谷町史編集委員会編



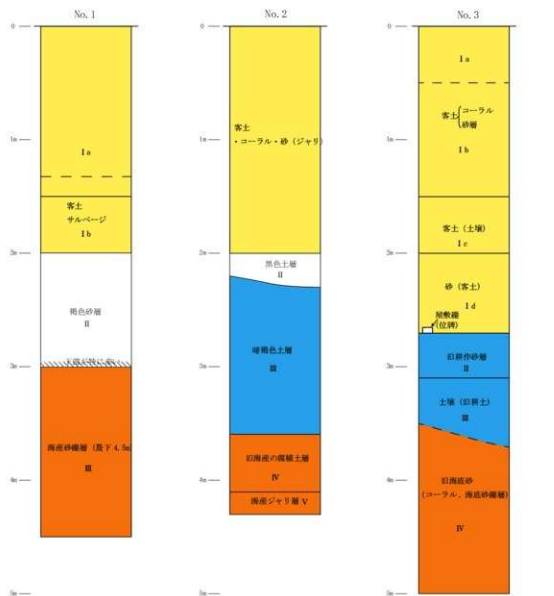
第31図 層序1 (平成6年度 工場(営繕)地区 MC-391-D)



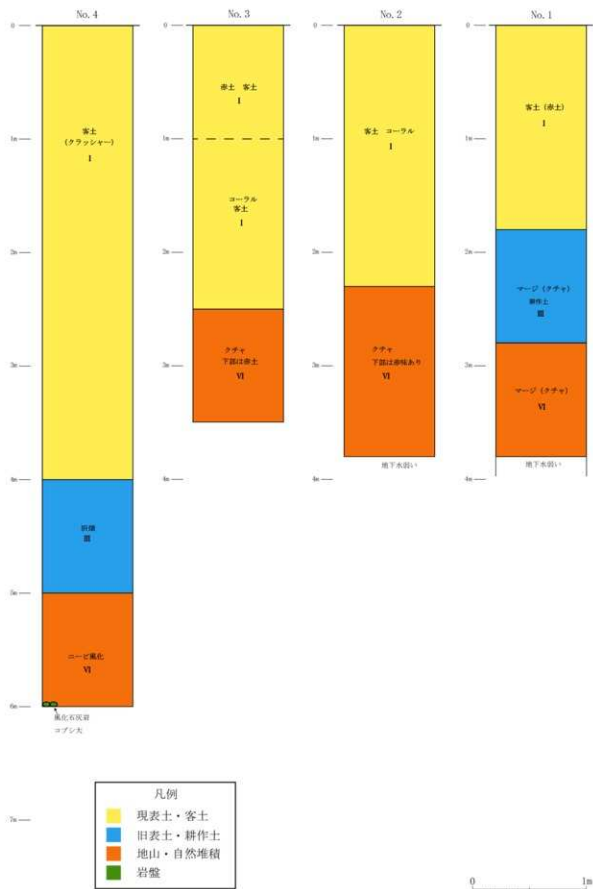
第 32 図 層序 2 (平成 6 年度 工場 (車両南) 地区 MC-403-D)



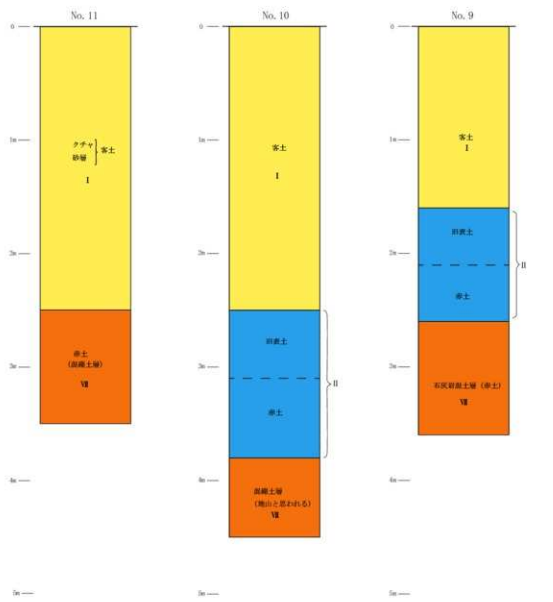
第33図 層序3 (平成6年度 工場(車河北)地区 MC-376)



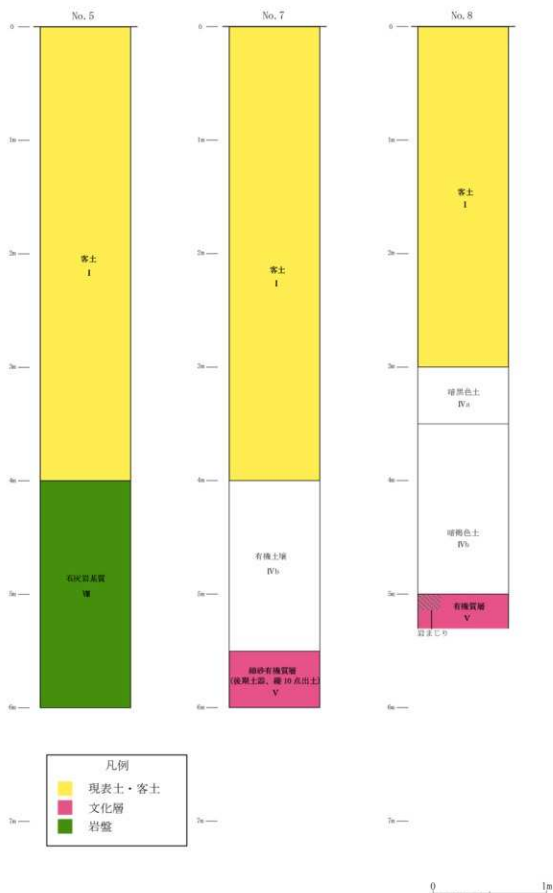
第34図 層序4 (平成6年度 バスターミナル地区 MC-455-R)



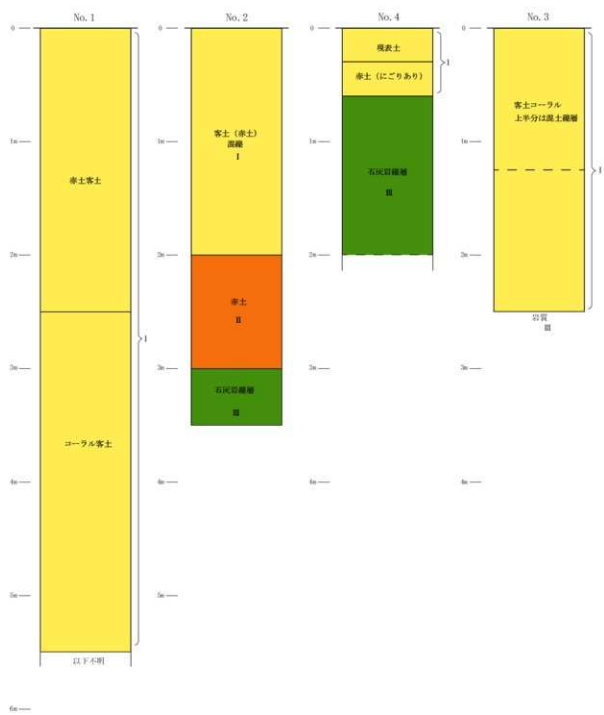
第35図 層序5 (平成6年度 家具販売所地区 MC-450-R) 1



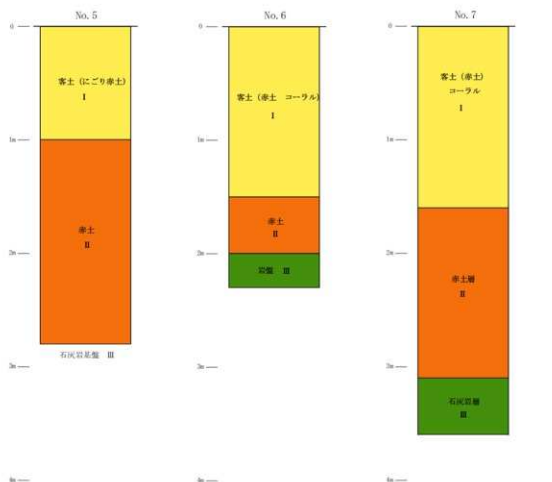
第 36 図 層序 6 (平成 6 年度 家具販売所地区 MC-450-R) 2



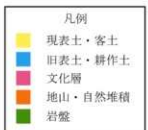
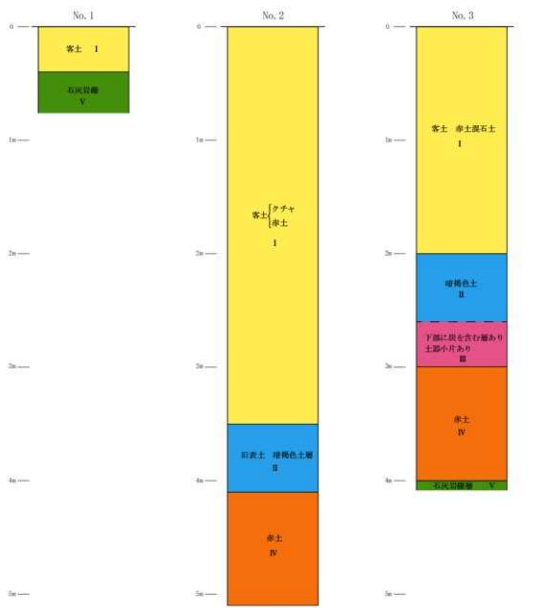
第37図 層序7 (平成6年度 家具販売所地区 MC-450-R) 3



第 38 図 層序 8 (H6 年度 OWAX 本部地区 MC-452-R) 1



第39図 層序9 (平成6年度 OWAX 本部地区 MC-452-R) 2



第40図 層序10 (平成6年度 道路地区 MC-113-D)



試掘 No. 1 上层



試掘 No. 1 下層



試掘 No. 2 上层



試掘 No. 2 下層

図版 26 平成6年度 工場（營繕）地区（MC-391-D） 1



試掘 No. 3



試掘 No. 1



試掘 No. 2 上層



試掘 No. 2 下層

図版 27 平成6年度 左上：工場（営繕）地区（MC-391-D）2、右上・下：工場（車両南）地区（MC-403-D）1



試掘 No. 3 上層



試掘 No. 3 下層



試掘 No. 1



試掘 No. 1

図版 28 平成 6 年度 上：工場（車両南）地区（MC-403-D） 2、下：工場（車両北）地区（MC-376） 1



試掘 No. 2



試掘 No. 2



試掘 No. 3



試掘 No. 3

図版 29 平成6年度 工場（車両北）地区（MC-376） 2



試掘 No. 1



試掘 No. 1



試掘 No. 2



試掘 No. 2

図版 30 平成6年度 バスターミナル地区 (MC-455-R) 1



試掘 No. 3 上層



試掘 No. 3 下層



試掘 No. 1 上層



試掘 No. 1 下層

図版 31 平成6年度 上：バスターミナル地区 (MC-455-R) 2、下：家具販売所地区 (MC-450-R) 1



試掘 No. 2 上層



試掘 No. 2 下層



試掘 No. 3 上層



試掘 No. 3 下層

図版 32 平成6年度 家具版売所 (MC-450-R) 2



試掘 No. 4 上層



試掘 No. 4 下層



試掘 No. 5 上層



試掘 No. 5 下層

図版 33 平成6年度 家具販売所 (MC-450-R) 3



試掘 No. 7



試掘 No. 9



試掘 No. 8 上層



試掘 No. 8 下層

図版 34 平成6年度 家具販売所 (MC-450-R) 4



試掘 No. 10 上層



試掘 No. 10 下層



試掘 No. 11

図版 35 平成6年度 家具販売所 (MC-450-R) 5



試掘 No. 1 上層



試掘 No. 1 下層



試掘 No. 2 上層



試掘 No. 2 下層

図版 36 平成6年度 OWAX 本部地区 (MC-452-R) 1



試据 No. 3



試据 No. 3



試据 No. 4

図版 37 平成6年度 OWAX 本部地区 (MC-452-R) 2



試掘 No. 5



試掘 No. 6 上層



試掘 No. 6 下層

図版 38 平成6年度 OWAX 本部地区 (MC-452-R) 3



試掘 No. 7 上層



試掘 No. 7 下層



試掘 No. 1

図版 39 平成6年度 上：OWAX本部地区 (MC-452-R) 4、下：道路地区 (MC-413-D) 1



試掘 No. 2 上層



試掘 No. 2 下層



試掘 No. 3 上層



試掘 No. 3 下層

図版 40 平成6年度 道路地区 (MC-413-D) 2

第V章 平成7年度 試掘調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成7年度の試掘確認調査については、那覇防衛施設局（現沖縄防衛局）より、平成7年9月13日付け施那施第247号（AFQ）にて、提供施設整備工事及び移設整備工事実施予定箇所における埋蔵文化財の有無照会があり、北谷町教育委員会は平成7年10月13日付け北教文7第1099号で、給電施設・管理棟・倉庫・ピクニック場（北・南）の5地区について試掘調査が必要である旨を回答した。回答後、給電施設地区については古墓群地域であることが確認されたため試掘を取りやめ、平成8年度に計画されていた教育施設（カウンセリングセンター）地区の調査を実施することとなった。ピクニック場（南）地区は、現地調査の結果、石灰岩基盤が露頭している状態にあり、隣接する場所で過去に実施した試掘調査では文化財が確認されなかったため、当該地に文化財はないと判断された。そのため、調査を実施したのはカウンセリングセンター・管理棟・倉庫・ピクニック場（北）の4地区である。調査は平成7年12月18日から平成7年12月22日まで実施し、調査結果については平成8年3月21日付け北教文2113号にて回答した。

当年度の4地区はカウンセリングセンター地区（MC-621-D）で2箇所とピクニック場地区（MC-458-D）で2箇所、管理棟地区（MC-510）7箇所、倉庫地区（MC-511）12箇所の試掘を実施した。

期間：平成7(1995)年12月18日～12月22日

調査は、12月18日～12月22日の期間において、管理棟地区とピクニック場地区の掘削を実施し、12月19日にカウンセリングセンター地区と倉庫地区の調査を行った。

第2節 調査体制

調査主体	北谷町教育委員会	
調査責任者	教 育 長	當山 憲一
事 務 局	文 化 課 長	松田 盛
	文 化 係 長	中村 暎
調査担当	文化財調査嘱託員	山城 安生

第3節 調査成果

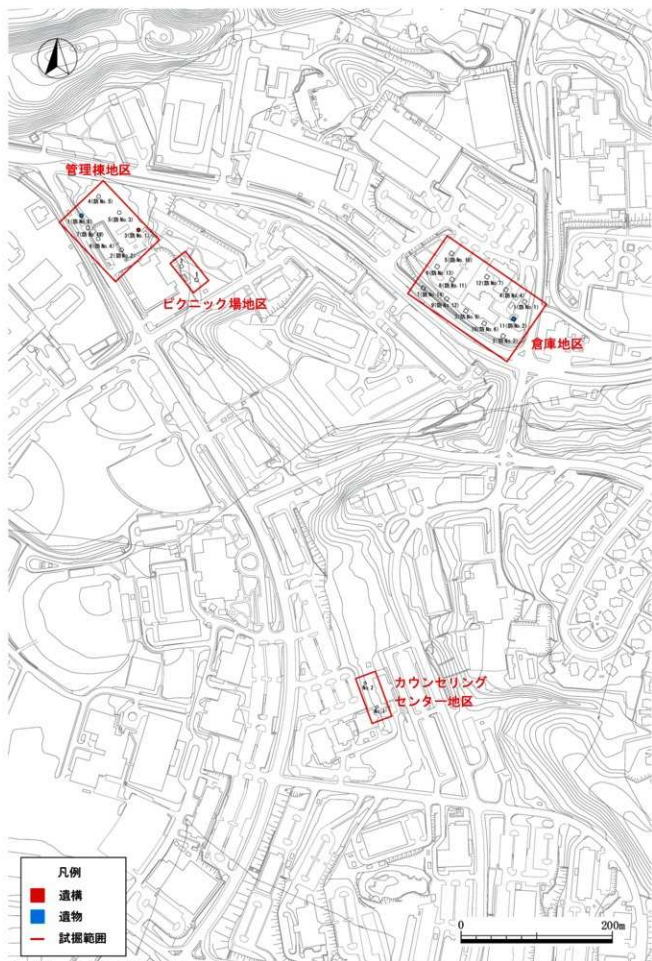
試掘調査は、カウンセリングセンター・管理棟・倉庫・ピクニック場の4地区で実施し、管理棟地区で埋蔵文化財を確認した。そのほか3地区については、埋蔵文化財は確認されなかった。基本層序・遺構・遺物は、調査地区ごとに取りまとめ、以下に記す。

カウンセリングセンター地区（MC-621-D）

試掘坑は2箇所設定し、そのなかで遺構・遺物等は確認されなかった。

1. 基本層序

I層：米軍基地造成に伴う客土層。No.1では地表下約3.5mの深さまで堆積することが確認され、



第41図 平成7年度調査地区位置

№2では土色等で細分可能であるが、掘削深度全域が客土であると判断された。基本層序としては客土として一括する。

II層：暗褐色土層。遺構・遺物等は確認されなかったため、詳細は不明であるが、基地造成以前の旧表土の可能性は残る。

III層：赤土層。自然堆積の地山層とみられる。

IV層：№2でのみ確認された石灰岩層で、基盤層とみられる。

小結

2箇所の試掘坑を設定し、掘削を実施したが、遺構・遺物等は確認されず、遺跡なしと判断された。いずれの試掘坑も地表下3m前後まで客土の堆積が確認され、№2については基盤層とみられる石灰岩直上まで客土が及んでいることから、深い深度まで基地造成による削平や造成の影響を受けていると想定される。

管理棟地区（MC-510）

試掘坑は7箇所設定し、うち2箇所で文化層が確認された。第41図で試掘坑番号の後に括弧書きしている番号については、調査箇所設定当初時の番号の為、以下では試掘番号で示す。

1. 基本層序

I層：現表土層。腐植土層、赤土、灰色粘質土（クチャ）などが確認されたが、基本的には米軍基地造成に伴う客土である。№1は、層下部に近世やグスク時代の遺物を含む攪乱層である。

II層：戦前の旧表土層とみられる。№1・2・3で確認されており、層直上で屋敷の痕跡とみられる礎の集石が検出された。また、同じく№3のII層最下部では貝が層状を成す様子が認められた。時期としては近世～近代（戦前）の層と推測される。

III層：№3で確認された暗褐色土層をあてた。遺構・遺物の出土は認められず、詳細は不明であるが、前後の層序の堆積状況から、グスク時代～近世の時期の層と推測される。

IV層：№3・7で確認された文化層である。№3では黒褐色土層で貝を少々含み、12世紀頃の青磁碗（櫛描文）の破片が出土した。№7は暗褐色の混貝土層で、遺物は含まないが、土質等の類似がみられることから、№3と同時期の堆積層（文化層）と判断された。時期としてはグスク時代の層とみられる。

V層：№4・5・6で確認されたニービ（砂岩）の黄褐色土層で、風化土壌である。基盤層とみられる。

2. 遺構・遺物

第6表は平成7年度の調査で出土した遺物を集計し、示した。遺物は合計99点得られており、人工遺物と自然遺物に分けられる。本報告においては、管理棟地区（MC-510）の遺物のみを掲載した。自然遺物は貝類遺体、獣骨などが出土し、人工遺物では器物が主で、中国産・沖縄産・本土産等の陶磁器が確認されているが、大半は沖縄産となっている。種類は染付・褐釉陶器・陶質土器・沖縄産無釉陶器・沖縄産施釉陶器・瓦・本土産磁器などが認められた。

器種としては碗、小碗、鉢、摺鉢、壺、急須、瓶、火炉が確認され、瓦は丸瓦、平瓦とも出土、多様な器種がみられる。得られた遺物の部位は大半が胴部破片であったが、少量ながら口縁部、底部片が認められたため、その中から図化できた資料を報告する。

第6表 平成7年度 出土遺物集計

地区名称	地区	試掘No.	種類 器形	染付		釉軸 陶器		陶質土器		沖縄産無軸 陶器		沖縄産施釉陶器		瓦		瓦質 土器?		本土産 磁器		自然 遺物		合 計		
				碗	瓶	不 明	火 炉	鉢	不 明	壺	攪 鉢	不 明	碗	鉢	急 須	不 明	丸 瓦	平 瓦	不 明	小 碗	不 明		貝	骨
管理棟 地区	MC510	No. 1		1		1	1	1	1							2					2		12	
		No. 3			1	1		1		1		2				1		1		1	19	3	31	
		No. 7								1	1								1		33	1	38	
地区不明	—	No. 不明						1	1	10	1	1	1		2						1	18		
合	計			1	1	2	1	1	2	2	1	16	1	1	1	2	1	4	1	1	1	54	5	99

①染付（中国産）

第41図1は染付の瓶で、頸部の一部のみ出土した。口縁部は朝顔状に開く形態と推測される。肩部はなで肩を呈し、残存部の径から短頸と考えられる。文様は胴部と肩部を区画するように対で二条、間隔をあけ一条、計三条の圏線を施し、圏線の上下には唐草文を施す。軸は明緑灰色で、呉須の発色は濃く、素地は灰白色を呈し緻密である。器種は天界寺^{註1}出土資料に、文様は今婦仁城跡^{註2}出土資料に類似する。形態及び図柄から玉壺春瓶と推測される。

図2は染付の底部のみの資料で、残存する形状から想定すると器種は碗と考えられる。底径は5.8cmで、見込みと高台内の底面の厚みは約4mmと薄い。釉薬は見込み部分や高台内、外面も薄く、畳付けから上に2mmほどは釉を施さず無釉で素地のままである。見込みの中心の文様は残存部からは不明、高台脇に呉須で一条の圏線を施す。高台の下部にも淡く一条圏線状のものが認められるが、圏線を意識したかは不明である。

畳付けの形状は舌状を成し、接地面も1mmと幅が狭い。素地の色調は灰白色を成し、若干だが髹^註がみられる。釉薬や呉須の色調が新しい印象を受ける為、清代の染付の可能性も考えられる。

②東南アジア産釉軸陶器

図3はタイ、ベトナム又はミャンマー産の釉軸陶器と考えられる。胴部のみ資料で口縁及び底部形態は不明。器面の内外面には緩い段差が数か所認められ断面に積み跡らしきものが確認できる。

器壁は5～6mm程度と薄く、この時点で大型の壺ではないと想定された。器壁が薄い場合、大型の壺類は変形が生じ、器形を維持できない為である。素地は砂質気味で荒く、混和材には石英粒が多く含まれ、中には4mm大の粒も確認された。若干、雲母も認められる。軸は外面がやや黒みを帯び、内面は暗黄褐色で部分的に細かい斑模様を呈す。軸が1mmもない程薄いのが、表面に細かい貫入状のものが認められる。

内外表面は石英の粒が突出し、器面は凹凸が多く滑沢でない印象を受ける。中国産釉軸陶器を想定から除外した要因としては胎土や素地の砂質気味な点と、器壁が薄く大型の壺ではない点、胴下部が内湾し器高が低いと想定される点などが挙げられる。胴径は残存部で傾き具合など計測に誤差が大きく、確実ではないものの30～35cm台と推測され、胴の張った器高の低い器種と考えられる。

③陶質土器

鉢と火炉の器種が確認され、ほか破片で器種の判断困難な資料も幾つか出土した。図4は火炉の口縁部と考えられ、上面の火窓の縁部分が残存する為、火炉と判断した。残存部は外面の器壁が殆

ど割れており、口径は測れない。器壁は1.0cmの厚みを呈し、肩部～口縁に至る箇所には1条の丸彫りの圏線を施す。素地には混和材に少量の雲母、白色粒、黒色粒が認められ、焼成はしっかりとし、良好である。色調は薄い橙色を呈し、又内面には器面調整の細沈線が認められる。

火炉は首里城出土²³の資料や北谷町平安山原A遺跡²⁴の報告では大別して3タイプに分類しており、本資料は首里城のI類、口縁上部に三か所の火窓を有するもので器形が屈曲し、肩部に1条の圏線を施す器形と類似する。形態は若干異なるものの、沖縄産施釉陶器²⁵にも火炉が認められる。

図5の器種は水鉢で口縁部の形態は緩やかに内湾し、口唇は厚みをもつが舌状を呈す。口径は21.0cmを呈し、胴部の最大径は22.5cm、器壁は最大で1.1cmを測る。素地には雲母、白色粒、黒色粒の混和材が認められ焼成は良好で堅固、色調は内外面とも明橙褐色を呈す。口縁部下2.5cmのところに段差を設け、その下に櫛描きの波状沈線文を5条施す。沖縄産無釉陶器にも同様の水鉢が認められるが、陶質土器との相違点は口径や器高が大振り、焼成具合が異なる。

④沖縄産無釉陶器

図6は口縁部の破片で、口径は8.4cmと小振りなものと推測され、器壁は4mm程度を測る。口唇は欠損し一部のみ残存、口縁部は頸部より外反し、頸部は短頸を成す。胴部が残存せず、全体の器形は想定だが、胴の張る器高の低い壺と考えられる。胎土は一部に亀裂が見られるものの素地、焼成は良好である。混和材は黒色粒が表面に若干認められる。器面調整は轆轤痕が表面に確認され、内面の頸部あたりに斜方向にへラ撫での形跡が窺える。色調は表面、断面とも暗赤褐色、内面はやや黒みを帯びる。

⑤本土産磁器

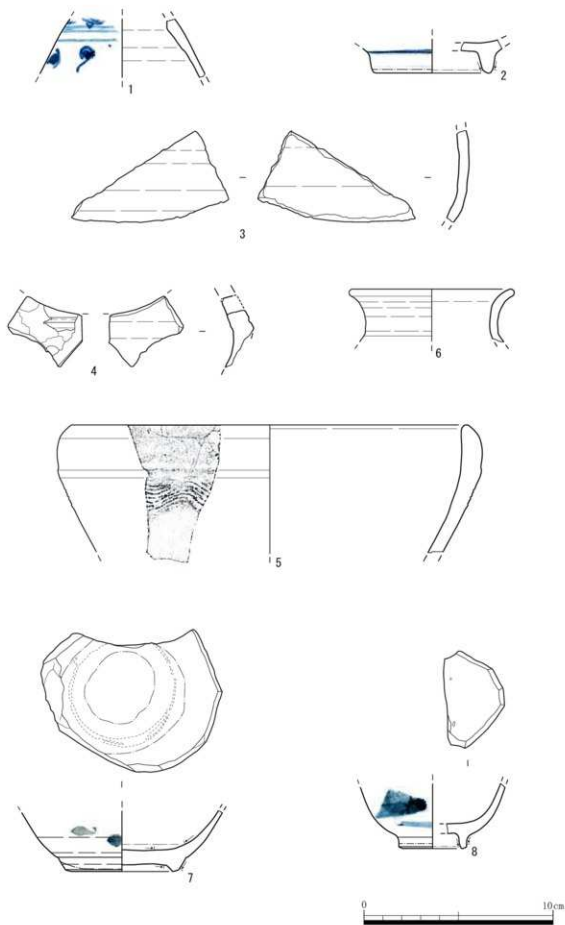
図7は本土産磁器と考えられる碗の底部である。形状は高台脇から腰の部分へ緩やかに広がりつつ立ち上がり、胴部の厚みは3mmと薄い。底径5.4cmで、高台の形状は高台脇から角を付け内側に傾斜し、高台内は低い。軸葉は内外面に施されるが見込みの部分は蛇の目に軸刺ぎされ、重ね焼きの痕跡もみられる。又、高台の一部と高台内、畳付けには軸が掛けられていない。文様の図柄は腰部に呉須で草花文を描き、呉須の色調は黒みを帯びた薄い藍色を呈す。

図8は本土産磁器の染付、器種は小碗である。底径は3.2cmと小さく、高台の厚みも4mmと細身を呈す。畳付けから上に2mmは軸葉が掛けられておらず、素地のままで露胎、接地面も2mmと細い。口縁～胴部は欠失しているが、形状は緩く外反か直口すると推測される。

胴部の厚みは口縁に最も近い部分で3mmと薄い。文様は呉須で図柄を描くが破損の為、全体の構図は不明である。素地は白色を呈す。呉須の色味は濃淡があり、鈍い印象を受ける。図柄の感じから近代のものより若干、古くなる印象を受ける。

今回出土した資料では中国産の染付が最も古い時期の資料で、褐釉陶器などもみられたが量的にはごく僅かであった。近世・近代の時期の新しい本土産磁器の量も少ない。沖縄産陶器類が若干数認められ、中でも沖縄産無釉陶器が多い。破片のため器種の判断ができない資料が多いが、主に戦前の資料と推測される。今回の試掘調査地区は県道130号線周辺ということもあり、戦前の集落跡としては、北谷三箇村と呼ばれた北谷、伝道、玉代勢の集落があった地域である。『北谷町の地名』掲載の戦前の航空写真などと照合すると、試掘箇所は集落が密集する場所を外れており、集落地域周辺の田んぼや畑などの耕作地域にあたる。

今回報告の遺物は出土量も僅少で、器種の判断が難しい破片資料が多かったが、戦前の集落や耕



第42図 平成7年度 出土遺物 (染付・褐袖陶器・陶質土器・沖縄産無袖陶器・本土産磁器)



図版 41 平成7年度 出土遺物 (染付・褐釉陶器・陶質土器・沖縄産無釉陶器・本土産磁器)

作域内にあたることから、広範囲の全面調査が行われた場合には、遺物の出土状況も異なるものになると思われる。

引用・参考文献

- 註1 『天界寺跡(1)』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第2集 2001年 沖縄県立埋蔵文化財センター
 註2 『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅲ』今帰仁村文化財報告書 第24集 2007年 沖縄県今帰仁村教育委員会
 註3 『首里城-管理用道路地区発掘調査報告書-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第1集 2001年 沖縄県立埋蔵文化財センター
 註4 『平安山原A遺跡』北谷町文化財報告書 第38集 2016年 沖縄県北谷町教育委員会
 註5 『首里城-正殿地区発掘調査報告書-』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第82集 2016年 沖縄県立埋蔵文化財センター

⑥貝類遺体(管理棟地区/MC-510)

第7表に出土した貝類の詳細を示した。自然遺物も人工遺物同様、管理棟地区(MC-510)の№1・3・7からの出土となっている。

分類方法は完形、破損、破片で細分を行い、二枚貝は左右の判断が可能なものは表記した。

管理棟地区全体では54点得られ、№1で巻貝1点、二枚貝1点が出土した。№3は計19点の出土で、内訳は巻貝11点、二枚貝8点である。№7では計33点認められ、巻貝17点、二枚貝16点である。貝種の生息域で分類すると、河口干潟のアラスジケマン、外洋性の珊瑚礁域のサラサバテイラ、同様に外洋性の珊瑚礁域イノの礫砂泥に生息するオニツノガイやマガキガイがみられた。又、シャコガイ類も科目でみると全体の16.6%となっている。全体的に外洋性の貝類と内湾、河口干潟の貝が確認された。

第7表 平成7年度 貝類遺体出土状況

貝種	地区名称 管理棟地区(MC510)	試掘No.			合計
		試掘No. 1	試掘No. 3	試掘No. 7	
ギンタカハマ	破損	1			1
サラサバテイラ	完形			3	3
	破損		1		1
ニシキウズ	破損			1	1
ニシキウズ	破片		1		1
ウズイチモンジ	完形			1	1
チョウセンサザエ	完形		1	2	3
オニツノガイ	完形		3	2	5
ハシナガツノブエ	完形			1	1
マガキガイ	破損		1	4	5
クモガイ	破損		1		1
スイショウガイ科種不明	破損		1		1
	破片		2		2
ツノレイシ	完形			1	1
ニシキミナシ	完形			1	1
オキナワキヤマニシ	完形			1	1
ニセマガキ	完形,R		1		1
	完形,L		1		1
	完形,R		2		2
アラスジケマンガイ	完形,L	1			1
	完形,R		3	3	6
リュウキュウサルボオ	完形,L			1	1
シラナミ	破損			2	2
ヒメシャコガイ	破損			1	1
シャゴウ	破損			2	2
シャコガイ科/種不明	破損			4	4
二枚貝・科/種不明	破損			3	3
	破片		1		1
合計		2	19	33	54

第8表 平成7年度 貝類遺体の分類学的位置と生息場所類型

和名	学名	生息場所類型	図版番号
軟体動物門 Mollusca			
腹足綱 Gastropoda			
ニシキウズ科 Trochidae			
ニシキウズ	Trochus (Trochus) maculatus	I-2-a	3
モンタカハマ	Trochus (Tectus) pyramis	I-4-a	1
サラサイテイラ	Trochus (Rochia) nitidus	I-4-a	2
ウズイテモンジ	Trochus rota	I-2-a	4
リュウテン科 Turbinidae			
チュウセンサザエ	Turbo (Murex) angyrostromus	I-3-a	5
オニノツノガイ科 Cerithiidae			
オニノツノガイ	Cerithium (Cerithium) modulosum	I-2-c	6
ハシナガツノブエ	Cerithium rosstratum	I-2-c	7
スイショウガイ科 Strombidae (別名: ソデガイ科)			
マガキガイ	Strombus (Gonamurex) luhuanus	I-2-c	8
クモガイ	Lambis lambis	I-2-c	9
スイショウガイ科 / 種不明	Strombidae	-	-
アツキガイ科 Muricidae			
ツノレイシ	Mancinella tuberosa	I-3-a	10
イモガイ科 Conidae			
ニシキミナシ	Conus (Striocoelus) striatus	I-2-c	11
ヤマタニシ科 Cyclophoridae			
オキナワヤマタニシ	Cyclophorus turgidus	V-8	12
二枚貝綱 Bivalvia			
イタボガイ科 Ostreidae			
ニセマガキ	Saccostrea echinata	I-2-a	1
マルスダレガイ科 Veneridae			
スダレハマグリ	Katylis japonica	II-1-c	2
アラスシクマン	Gefrarium tumidum	III-1-c	3
フネガイ科 Arcidae			
リュウキウサルボオ	Anadara (Anadara) antiquata	II-2-b	4
シャコガイ科 Tridacnidae			
シラナミ	Tridacna maximo & noae	I-2-a	5
ヒメジャコ	Tridacna crocea	I-2-a	6
シャゴウ	Hippopus hippopus	I-2-c	7
シャコガイ科 / 種不明	"Tridacna" spp.	I-2	8
二枚貝 / 科・種不明		-	-

生息場所類型 (Habitat)

- I: 外洋 - 露岩造域
 II: 内海 - 転石域
 III: 河口干潟 - マングローブ
 IV: 淡水域
 V: 陸域
 VI: その他
- 0: 潮間帯上部 (Iではノッチ, IIIではマングローブ)
 1: 潮間帯中・下部
 2: 亜潮間帯上縁部 (Iではイノー)
 3: 干潟 (Iにのみ適用)
 4: 植床面及びその下部
 5: 止水
 6: 流水
 7: 林内
 8: 林内・林縁部
 9: 林縁部
 10: 海浜部
 11: 打ち上げ物
 12: 化石
- a: 岩礁 / 岩盤
 b: 転石
 c: 砂 / 底塵
 d: 植物上
 e: 淡水の流入する陸地



図版 42 平成7年度 貝類遺体 (上: 巻貝 下: 二枚貝)

⑦動物遺体（管理棟地区/MC-510）

本年度において出土した動物遺体は5点と僅かで、出土地は管理棟地区（MC-510）のNo.3・7である。いずれも破損資料のみで、種や部位が判断できたものはウシの中足骨、橈骨である。その他、種不明の資料が3点認められた。

第9表 平成7年度 脊椎動物遺体出土状況

種	部位	劣/破	地区 管理棟地区 (MC510)		合計
			No. 3	試掘 No. 7	
ウシ	中足骨	破損	1		1
ウシ	橈骨	破損		1	1
イノシシ/ブタ	不明	破損	2		2
哺乳類 (同定不可)	不明	破損	1		1
合	計		4	1	5

第10表 平成7年度 脊椎動物遺体種名一覧

哺乳綱	MAMMALIA	合計
偶蹄目	Order Artiodactyla	
イノシシ/ブタ	<i>Sus scrofa</i>	2
ウシ	<i>Bos Taurus</i>	1

小結

試掘坑は7箇所設定し、うち2箇所で文化層が確認された。No.1では基本層序1層下部で近世やグスク時代の遺物を含む攪乱層がみられ、下層に位置する旧来の層序が基地造成に伴う影響を受けたと推測される。出土遺物では土器片や青磁片（小片であるが櫛描文の碗と推測）などグスク時代初期の段階から、南蛮焼、壺屋焼といった近世期のものまで連続とみられる。当該地は古地図や地籍図、伝承等からみると直径約90m、高さ約16mの独立丘陵であったが、現在の調査地区周辺の標高は10m以下となっていることから、戦後、丘陵上部を削平し、残土を周辺に均して建物が建設されたと考えられる。確認された遺跡は調査で新たに発見された遺跡で、「塩川原（すーがーばる）遺跡」と呼称している。

倉庫地区 (MC-511)

試掘坑は12箇所設定し、遺構・遺物は検出されなかったが、戦前の表土・耕作土として利用したとみられる層が確認された。

1. 基本層序

- I層**：米軍基地造成に伴う客土層と、造成の影響を受けたとみられる攪乱層を含めた。調査地区全域がアスファルト舗装されており、基本はそれに伴う舗装、クラッシャー等の客土層である。戦前の旧表土が攪乱を受けたとみられる層は、No.1・10でみられる。
- II層**：戦前の集落に伴う旧表土・耕作土層。堆積状況等から、旧表土かと推測される腐植土層も含めた。
- III層**：暗褐色、黒色を呈する層。遺構・遺物等は検出されていない。No.11では炭化物を含むが、詳細は不明である。自然堆積層と思われる。
- IV層**：赤土層。No.6・7・10では下部に黄色味を帯びた土壌がみられるが、人為的な要因によるものではなく、自然堆積に伴うものと捉え、層序としては一括して捉えた。No.11では水の影響を受けたとみられる筋状の痕跡が認められる。
- V層**：暗褐色土層。遺構・遺物等は検出されず、自然堆積層とみられる。
- VI層**：No.9でのみ確認。遺物、遺構等は出土しない赤土層である。色味で細分すると、赤味を帯びた土層、黒味を帯びた土層と細分可能であるが、自然堆積層と判断し、VI層として一括する。
- VII層**：石灰岩基盤層。No.1～7・12で確認された。

2. 遺構・遺物

調査区内の試掘坑での掘削においては、遺構・遺物ともに確認されなかった。

小結

12箇所設定した試掘坑のうち、一部で戦前の表土・耕作土とみられる層がみられたものの、遺構・遺物等は確認されなかったため、遺跡なしと判断された。

ピクニック場地区 (MC-458-R)

試掘坑は2箇所設定し、遺構・遺物等は確認されなかった。

1. 基本層序

I層：米軍基地造成に伴う客土層。褐色土を主体として礫がまばらに混入する層、赤土に礫が混入する層に細分可能であるが、基本層序では客土として一括する。

II層：島尻層（クチャ）の基盤層。

2. 遺構・遺物

遺構・遺物ともに出土は確認されなかった。

小結

2箇所設定した試掘坑では遺構・遺物等は確認されなかったため、遺跡なしと判断された。どちらの試掘坑でも、地表下約4mまで米軍基地造成に伴う客土層が確認され、基盤層とみられる島尻（クチャ）層まで及んでいる様子がみられた。

第11表 平成7年度 調査別遺物出土状況

調査年	月日	試掘地区	試掘番号	遺構	遺物	備考
1995年	12月18日～22日	管理棟 (MC-510)	1		南蛮焼・染付?	
			2			
			3	屋敷址	青磁碗・貝	
			4			ニービの芯全面に露出
			5			ニービの芯
			6			ニービの芯
			7			文化層
	12月19日	ピクニック場 (MC-458-R)	1			
			2			
		倉庫 (MC-511)	1			
			2			
			3			
			4			
			5			
			6			
			7			
			8			
			9			
			10			
			11		木炭	
			12			
			カウンセリングセンター (MC-621-B)	1		
2						

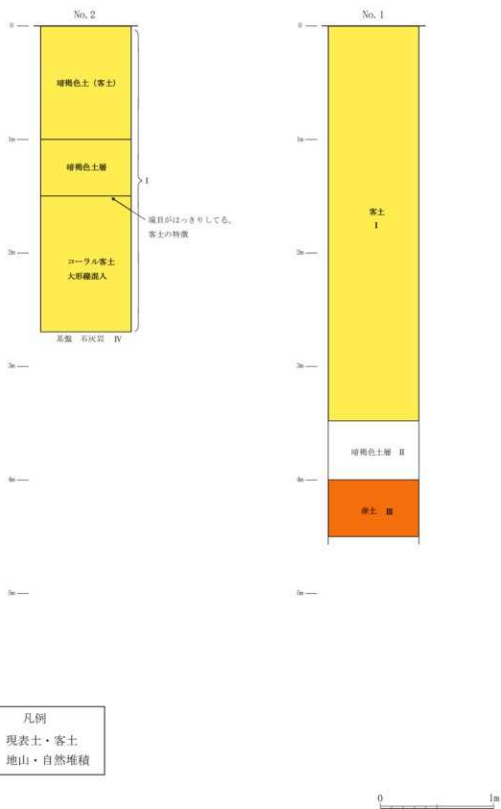
第11表に各調査地区の概要をまとめた。カウンセリングセンター地区、ピクニック場地区においては遺構・遺物の確認はない。倉庫地区においてもNo.1～10・12では遺物の出土はなく、No.11では炭化物の出土のみである。管理棟地区では上記の項目、地区別層序で述べたように、No.1・3・7で若干の遺物が認められ、No.2・4・5・6での遺物の確認はない。

以上のように、今回の試掘調査では管理棟地区でグスク時代の文化層が確認され、「塩川原遺跡^{ナニガハラ}」と呼称している。遺跡の所在する一帯には古地図や地籍図、伝承等からみると直径約90m、高さ約16mの独立丘陵があり、「イヌアタイ」と呼ばれていた場所とみられる^{註1}。地名としては「メーグスク（前城）」と呼ばれ、城外あるいはムラの入口として機能していたと考えられる。出土遺物は12世紀の土器や青磁などグスク時代初期の段階から、15～16世紀の南蛮焼、近世の壺屋焼まで連続とみられ、当該地の北側には北谷城、東側には玉代勢原遺跡が位置していることから、グスク時代から地域にとって重要な場所だったと考えられる。

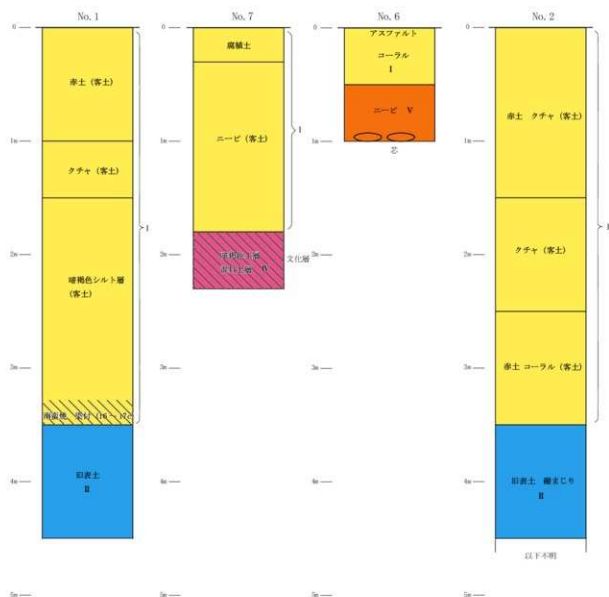
その他の調査地区では遺構・遺物の出土はなく、遺跡なしと判断したが、倉庫地区では戦前の旧表土・耕作土層とみられる層を確認した。当該地には戦前、玉代勢原集落が所在しており、本調査で確認された旧表土・耕作土層はこの集落に係るものと判断される。

引用・参考文献

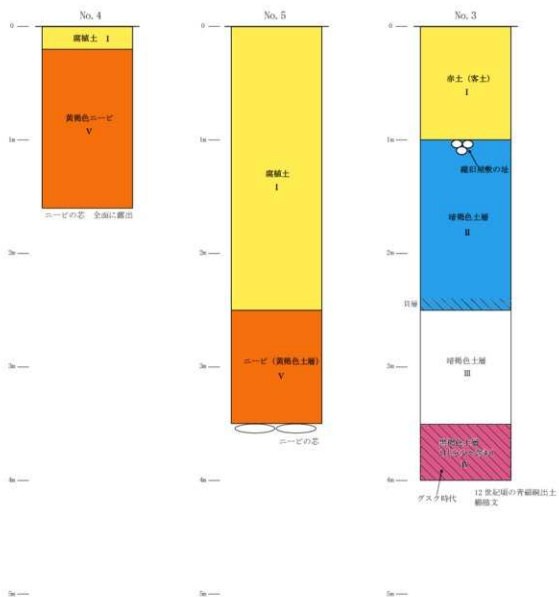
註1 『北谷町の地名』北谷町文化財調査報告書 第24集 2006年 沖縄県北谷町教育委員会



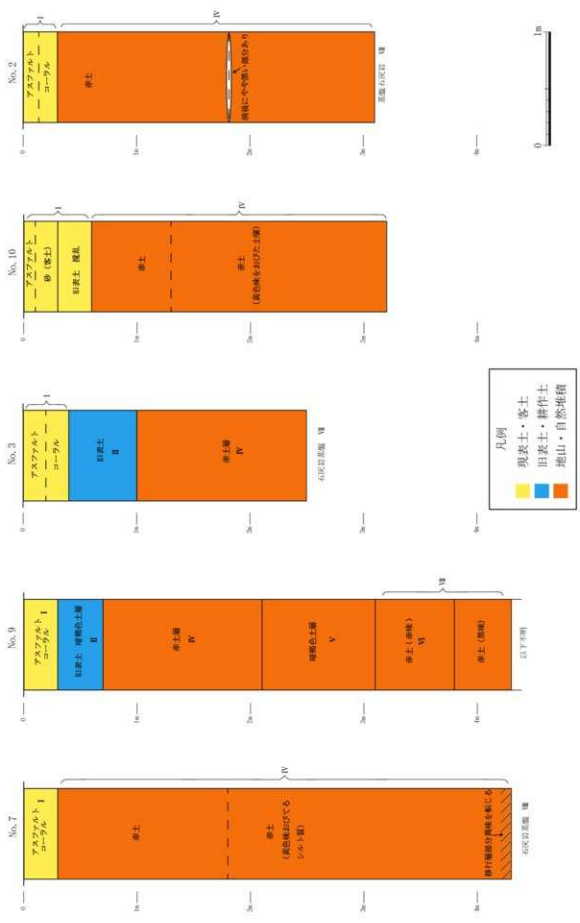
第43図 層序1 (平成7年度 カウンセリングセンター地区 MC-621-D)



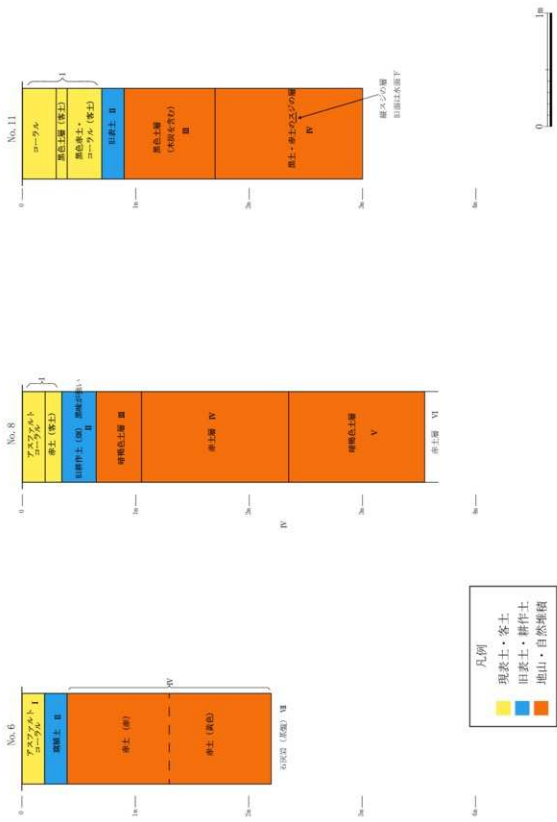
第 44 図 層序 2 (平成 7 年度 管理棟地区 MC-510) 1



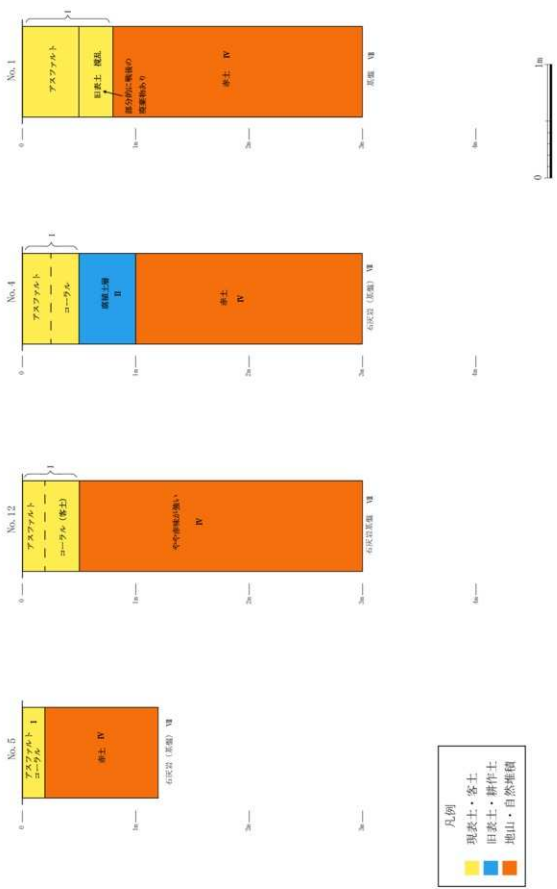
第45図 層序3 (平成7年度 管理棟地区 MC-510) 2



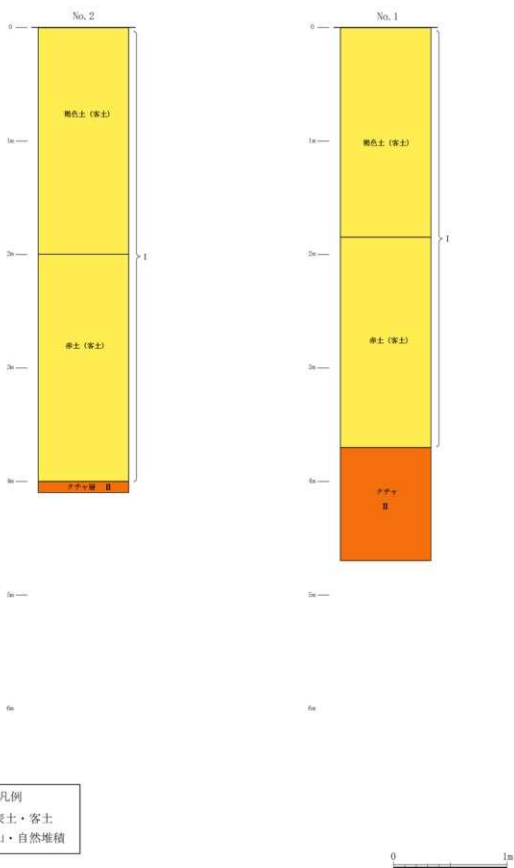
第 46 図 附序 4 (平成 7 年度 倉庫地区 MC-511) 1



第 47 図 附序 5 (平成 7 年度 倉庫地区 MC-511) 2



第 48 図 附 6 (平成 7 年度 倉庫地区 MC-511) 3



第 49 図 層序 7 (平成 7 年度 ビクニック場地区 MC-158-R)



試掘 No. 1 上層



試掘 No. 1 下層



試掘 No. 2

図版 43 平成7年度 カウンセリングセンター地区 (MC-621-D)



試掘 No. 1 上層



試掘 No. 1 下層



試掘 No. 2 上層



試掘 No. 2 下層

図版 44 平成7年度 管理棟地区 (MC-510) 1



試掘 No. 3 上層



試掘 No. 3 下層



試掘 No. 4

図版 45 平成7年度 管理棟地区 (MC-510) 2



試掘 No. 5 上层



試掘 No. 5 下層



試掘 No. 6



試掘 No. 7

図版 46 平成7年度 管理棟地区 (MC-510) 3



試掘 No. 1



試掘 No. 3



試掘 No. 2 上層



試掘 No. 2 下層

図版 47 平成7年度 倉庫地区 (MC-511) 1



試掘 No. 4 上层



試掘 No. 4 下层



試掘 No. 5



試掘 No. 6

図版 48 平成7年度 倉庫地区 (MC-511) 2



試掘 No. 7 上層



試掘 No. 7 下層



試掘 No. 8 上層



試掘 No. 8 下層

図版 49 平成7年度 倉庫地区 (MC-511) 3



試掘 No. 9 上层



試掘 No. 9 下層



試掘 No. 10 上层



試掘 No. 10 下層

図版 50 平成7年度 倉庫地区 (MC-511) 4



試掘 No. 11 上層



試掘 No. 11 下層



試掘 No. 12 上層



試掘 No. 12 下層

図版 51 平成7年度 倉庫地区 (MC-511) 5



試掘 No. 1 上層



試掘 No. 1 下層



試掘 No. 2 上層



試掘 No. 2 下層

図版 52 平成7年度 ピクニック場地区 (MC-458-R)

第VI章 平成8年度 試掘調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成8年度の試掘確認調査については、那覇防衛施設局（現沖縄防衛局）より、平成9年1月13日付け施那施第5号（AFQ）にて、建設工事計画予定箇所における埋蔵文化財の有無照会があった。キャンプ瑞慶覧では5地区（管理棟・厚生施設・倉庫・バスターミナル・倉庫（資材））で試掘調査を実施している。調査内訳はバスターミナル地区で6箇所、倉庫（資材）地区6箇所、厚生施設地区（MC-616-D）8箇所、管理棟地区（MC-609-D）10箇所、倉庫地区（AR303-D）で6箇所の試掘を実施した。

調査期間：平成8年度（1997年）2月24日～3月13日

管理棟・厚生施設・倉庫地区については平成9年2月24日から28日の5日間、バスターミナル・倉庫（資材）地区については同年3月12・13日の2日間で試掘調査を実施した。調査は先ず2月24日に厚生施設地区のNo.3・5・7・10と管理棟地区のNo.7を調査し、2月25日には管理棟地区のNo.1・3・4・8を実施した。2月26日は厚生施設地区のNo.2・6・8・9と管理棟地区のNo.5・6を、2月27日には管理棟地区のNo.9～11と倉庫地区のNo.1・2を行い、2月28日に倉庫地区のNo.3～6を調査した。3月12日にはバスターミナル地区のNo.1～6、3月13日は倉庫（資材）地区のNo.1～6の調査を行った。調査結果については平成9年5月16日付け北教文9第397号にて回答している。

第2節 調査体制

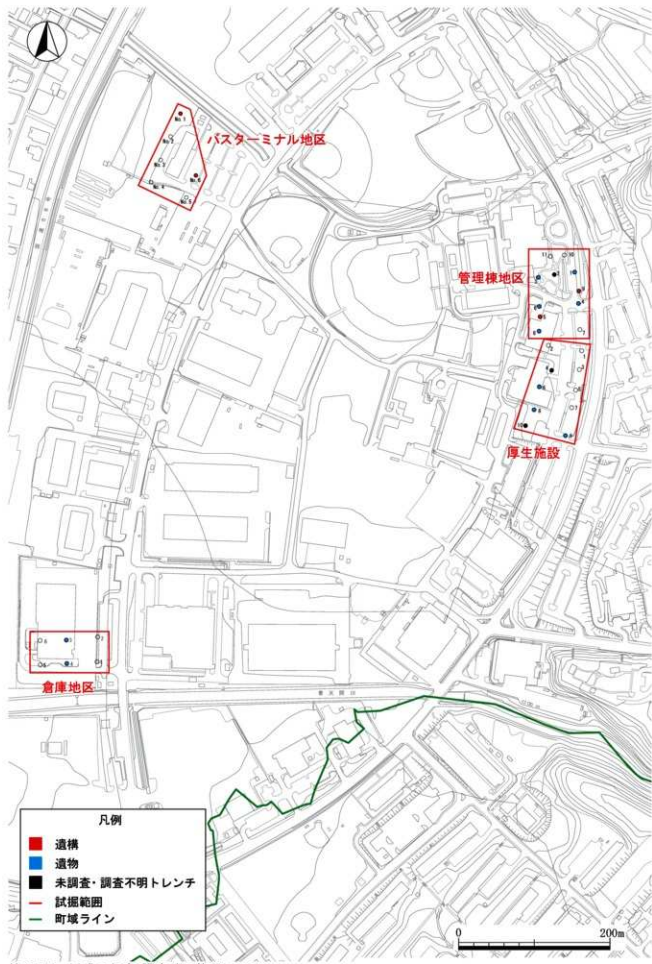
調査主体	北谷町教育委員会	
調査責任者	教育長	當山 憲一
事務局	文化課長	松田 盛
	文化係長	中村 愿
調査担当	文化課主事	山城 安生

第3節 調査成果

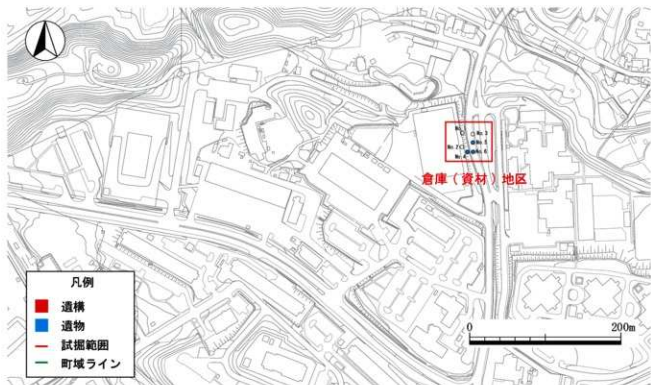
試掘調査は、管理棟・厚生施設・倉庫・バスターミナル・倉庫（資材）の5地区で実施し、管理棟地区で埋蔵文化財を確認した。基本層序、遺構・遺物は、調査地区ごとに取りまとめ、以下に記す。

管理棟地区（MC-609-D）

試掘坑は11箇所設定したが、No.2については既設の污水管が埋設されていたことから当初の設定箇所では掘削を実施せず欠番とし、調査区北側に試掘設定箇所を振替、No.11とした。No.10についても周辺の試掘状況を考慮して当初設定した場所から調査区北側に振り替えて掘削を実施したため、計10箇所での調査となった。試掘調査の結果、No.1・4・5・9の4箇所ですり片や遺構等の埋蔵文化財が確認された。



第50図 平成8年度調査地区位置(南側)



第51図 平成8年度 調査地区位置(北側)

1. 基本層序

- I層**：現表土を含む、米軍基地造成に伴う客土層。試掘坑全域で確認されており、地表下3mまで堆積がみられる箇所もある。土質、土色等により細分可能であるが、基本層序では客土として一括する。
- II層**：検出遺構の出土状況、堆積層の前後関係等から近世～近代の時期と想定される。No.4では淡褐色土層が該当する。No.11では暗灰黒褐色粘質土、No.3では暗黄褐色粘質土・暗褐色土層、No.6では暗灰褐色粘質土層が該当するとみられる。No.5では淡灰褐色土層で墓の一部とみられる石積が確認され、この層からはレンガの出土も確認された。
- III層**：No.4でのみ確認した暗褐色土層。層上部は後世の造成・耕作等により人為的な影響を受けたとみられる。時期を断定できる遺物は検出されていないが、層下部には土留め状の集石が認められ、町内の遺跡で確認された遺構との類似性から、グスク時代～近世の時期のものと推測される。
- IV層**：No.1・9で確認された淡暗茶褐色粘質土、淡暗褐色土層は遺物を包含する文化層である。No.1では南壁の層下部で炉跡の可能性ある焼土面がみられ、焼土上面では土器片が認められた。IV層の下層は地山とみられる黄茶褐色粘質土層（基本層序V層）で、No.9ではV層を掘り込む柱穴（ピット）が8基確認された。1箇所柱穴の埋土からは土器の細片が出土した。No.1で出土した土器片は、胎土等の特徴から縄文時代後期の時期のものと推測される。
- V層**：地山とみられる自然堆積層。No.1・9では黄茶褐色粘質土層が該当する。No.6では暗灰色粘質土（クチャ）層、No.8では岩盤直上に僅かに堆積する茶褐色土層が地山と想定される。
- VI層**：石灰岩の基盤層。層上部は風化し礫状になっている部分もある。No.1・5～10で確認された。

2. 遺構・遺物

遺構は、Na 5ではⅡ層（近世～近代）で墓の一部とみられる切石積みめの石積が確認された。Na 4のⅢ層下部では土留め状の集石が認められた。遺物を伴わないため詳細な時期は不明であるが、北谷町内の伊礼伊森原遺跡、後兼久原遺跡で検出されたグスク時代の土留め状石列遺構と類似していることから、グスク時代～近世の時期の遺構の可能性はある。Na 1ではⅣ層下部に焼土面が認められ、炉跡の可能性はある。焼土面直上では縄文時代後期のもたと推測される土器の小片が確認された。Na 9ではⅤ層（地山）を掘り込む柱穴（ビット）が8基確認された。直径は約10～15cmで、1箇所柱穴の埋土からは土器の細片が出土した。

遺物は、Na 1・4・9で土器片、Na 5・8で煉瓦、Na 6で沖縄産陶器（壺屋焼）が出土した。遺物は、どれも小破片の胴部で図化の可能な資料は得られなかった。

小結

試掘は10箇所で行われ、うち4箇所で行われた埋蔵文化財を確認した。Na 1・4・9から、出土量は僅かだが小片であるが、土器片を包含する文化層と、炉跡の可能性のある焼土面、柱穴状のビット、土留め状の集石部分などが確認された。土留め状の集石については、時期を判断できる遺物は含まれていなかったが、北谷町内の伊礼伊森原遺跡、後兼久原遺跡で検出されたグスク時代の土留め状石列遺構と類似していることから、グスク時代～近世の時期の遺構の可能性はある。Na 5では石灰岩切石で積まれた石積が確認された。切石の形態や、最下部に砂粒を多く含んだセメントが使用されていることなどから、近世～近代の時期の墓に伴うものと推測される。このほか、遺物包含層ではなく、流れ込みとみられる堆積層からの出土ではあるが、Na 4の黄色土粒混入層から縄文時代晩期のものとみられる土器片が出土した。

調査で新たに確認された遺跡は、「東表原遺跡」と呼称している。また、調査地区には既存の建造物があるが、その周辺には遺跡が残存している可能性がある。

厚生施設地区 (MC-616-D)

試掘坑は10箇所を設定したが、Na 4・10は掘削を行わなかったため、計8箇所で行った調査を実施した。そのうち2箇所で行った戦前の旧表土とみられる層を確認したが、遺構等は検出されなかった。

1. 基本層序

Ⅰ層：現表土を含む、米軍基地造成に伴う客土層である。土質等により細分可能であるが、基本層序では客土層として一括した。

Ⅱ層：戦前の旧表土層とみられる。Na 6・8・9で確認された。暗灰褐色を呈し、Na 9では陶質土器のサークー（鍋）の破片が出土した。Na 6・8では炭、焼土等が含まれるが、人工遺物の出土はない。

Ⅲ層：茶褐色土層。地山とみられる自然堆積層である。Na 2・6・8・9で確認された。

Ⅳ層：石灰岩の基盤層。層上部は風化し、礫状になっている部分もある。調査地区全域で検出されており、Na 3・5・7では基本層序Ⅰ層（厚さ約20cm）以下はすぐ岩盤が検出される状況であった。

2. 遺構・遺物

遺構は検出されておらず、遺物ではNa 9で唯一陶質土器（サークー）が出土しているが、資料として図化は困難であった。

小結

試掘は計8箇所の試掘坑で実施し、うち2箇所で戦前の旧表土層を確認したが、遺構等は確認されなかったため、遺跡なしと判断された。客土以下ですぐ岩盤が確認されたことや、地表下約2～3mまで客土の堆積がみられることなどから、調査地区全域で基地造成に伴う削平等の地形の改変が行われたと推測される。

倉庫地区 (AR303-D)

試掘坑は6箇所設定し、遺構・遺物は検出されなかったが、戦前の表土、耕作土として利用したとみられる層が確認された。

1. 基本層序

- I層**：現表土を含む、米軍基地造成に伴うアスファルト舗装以下にみられる砂質土層等は、過年度の調査でも一帯で確認されている浚渫土とみられる。
- II層**：戦前の集落に伴う旧表土、耕作土層。Na.2・3・4では戦前水田や畑として利用されたと考えられる暗灰色粘質土層が認められた。Na.5・6では、他の試掘坑での堆積状況等を参考とし、濃暗茶褐色土層粘質砂層を旧表土と想定してII層に含めた。
- III層**：Na.1の暗灰色粘質土層・濃暗灰色粘質土層、Na.4の淡灰色粘質土層が該当する。遺物・遺構等は検出されていない。自然堆積層と思われる。
- IV層**：Na.2の暗黒褐色砂質土層、Na.3の淡黄色砂層、Na.4の暗灰色混砂粘質土層・暗黒褐色荒砂層、Na.5の淡褐色砂層・枝サンゴ混砂層、Na.6の黄褐色砂層・枝サンゴ混砂層が該当する。遺物・遺構等は検出されていない。自然堆積層と思われる。また、これら砂質堆積層と上記III層との境から湧水の流出が多く認められた。

2. 遺構・遺物

遺構は検出されておらず、自然遺物としてはNa.3・4で貝類、マンガン塊の出土は確認されたが、人工遺物は確認されなかった。

小結

6箇所設定した試掘坑のうち、一部で戦前の表土・耕作土とみられる層がみられたが、遺構・遺物等は確認されなかったため、遺跡なしと判断された。また、過年度の一帯での調査同様、基地造成に伴う浚渫土を用いた客土、戦前の集落に伴う表土・耕作土層が確認されたほか、湧水の流出が多く認められた。

バスターミナル地区

試掘坑は6箇所設定し、遺物は確認されなかったが、戦前の旧表土・耕作土層とみられる層と、戦前のものと推測される溝が確認された。

1. 基本層序

- I層**：米軍基地造成に伴う客土層。細分すると、I a層はコーラル（クラッシャー）層、I b層は過年度の調査でも一帯で確認されている浚渫土とみられる灰色シルト層である。

Ⅱ層：戦前の集落に伴う旧表土・耕作土層。No.1～4・6で確認された。土質、土色で細分可能であるが、基本層序ではⅡ層として一括した。

Ⅲ層：遺物・遺構等が確認されない自然堆積層とみられる層。No.1～5の最下部で確認された砂質の海産堆積層のほか、No.5の河川堆積層とみられる層などがある。

2. 遺構・遺物

No.6で戦前のものと想定される溝が確認されたが、遺物の出土はない。このほか、No.1～6で水田として利用されたとみられる層が検出されたが、こちらでも遺物は確認されていない。

小結

バスターミナル地区では、基本層序Ⅰ層で米軍基地造成に利用された浚渫土とみられる灰色シルト層の堆積が認められた。遺物の出土は認められなかったが、戦前の集落に伴う旧表土、耕作土層とみられる層が確認されたほか、最下層部分で海産堆積とみられる砂層が認められ、旧海岸線の痕跡と考えられる。これらの状況は、過年度に一帯で実施した調査結果とも整合する結果となった。

倉庫（資材）地区

試掘坑は6箇所設定し、うち5箇所で戦前の集落に伴う旧表土・耕作土層とみられる層を確認したほか、同じく戦前のものとみられる陶器片が出土した。

1. 基本層序

Ⅰ層：米軍基地造成に伴う客土層。土質、土色等により細分可能であるが、基本層序では客土層として一括して取り扱った。

Ⅱ層：戦前の集落に伴う旧表土、耕作土とみられる層。暗褐色、黒褐色を呈する。No.1・2・4～6で確認された。No.4では壺屋焼とみられる陶器片が1点出土した。

Ⅲ層：遺構・遺物等が出土せず、自然堆積とみられる層。土質等により細分可能であるが、基本層序では自然堆積層として一括した。

2. 遺構・遺物

遺構は検出されていない。遺物としては、No.4で沖繩産陶器（壺屋焼）の破片が出土したほか、No.5・6で少量の炭が確認された。

小結

倉庫（資材）地区については、調査時は小字名の知真良原地区と呼称していた。試掘坑は6箇所設定し、No.3を除く5箇所で戦前の集落に伴う旧表土・耕作土層を確認し、うちNo.4で戦前のものとみられる陶器片（壺屋焼）が1点出土した。調査地区の南西側には周知の埋蔵文化財である「山川原古墓群」（グスク時代～近世）が所在しており、関連する遺物、遺構等の出土も想定されたが、今回の調査では近代（戦前）の層序しか確認できなかった。

遺物は管理棟地区等で確認され、土器、焼土、沖繩産施釉陶器、瓦が得られた。しかし、点数も少量でいずれも破片の為、図化可能な資料は得られなかった。

第12表 平成8年度 調査区別遺物出土状況

調査年	調査月日	試掘地区	試掘No.	遺構	遺物	備考	
1997年	3月12日	バスターミナル地区	1	水田			
			2				
			3				
			4				
			5				
			6	戦前の溝?			
	3月13日	倉庫(資材)地区 山川原古墓群北側(菅真良所)	1				
			2				
			3				
			4		炭層焼		
			5		炭		
			6		炭		
	2月24日	厚生施設地区(MC-616-B)	1			表土下約1.1mで埋設管検出	
	2月26日		2		焼土・炭		
	2月24日		3				
			5				
	2月26日		6		炭・焼土		
	2月24日		7				
			8		炭・焼土		
	2月26日		9		サーター		
			2月25日	管理棟地区(MC-609-D)	1		土器・ニュービスフニ
	3					炭・焼土	
	4					土器・鉄滓・焼土	
	5				石積み	煉瓦	
	6					炭層焼・焼土・炭	
	7						
	2月24日	2月25日	8		煉瓦		
			9	柱穴	土器		
	2月27日	倉庫地区(AR303-B)	10				
			11				
1							
2月28日		2					
		3		アラスジケマン・マンガン塊			
		4		貝			
		5					
		6					

以上のように、今回の試掘調査では管理棟地区で縄文時代後・晩期、近世～近代の遺構・遺物等が確認され、「東表原遺跡」と呼称している。検出遺構としては炉跡の可能性のある焼土面、柱穴状のピットのほか、土留め状の集石があり、遺物を伴わないため、時期は判然としないが、北谷町内の遺跡で類似性のみられる土留め状石列遺構が検出されていることから、グスク時代から近世のものかと推測される。このほか、近世～近代の時期の墓に伴うとみられる石積が検出されている。調査地区から南東側に約300m離れた丘陵上には、大道原A遺跡(グスク土器出土)、大道原B遺跡(宇佐浜式土器出土)が所在しており、関連が想定されるが詳細は不明である。

上記の管理棟地区に隣接する厚生施設地区では、計8箇所のうち2箇所ですぐ岩盤が確認されたことや、地表下約2～3m

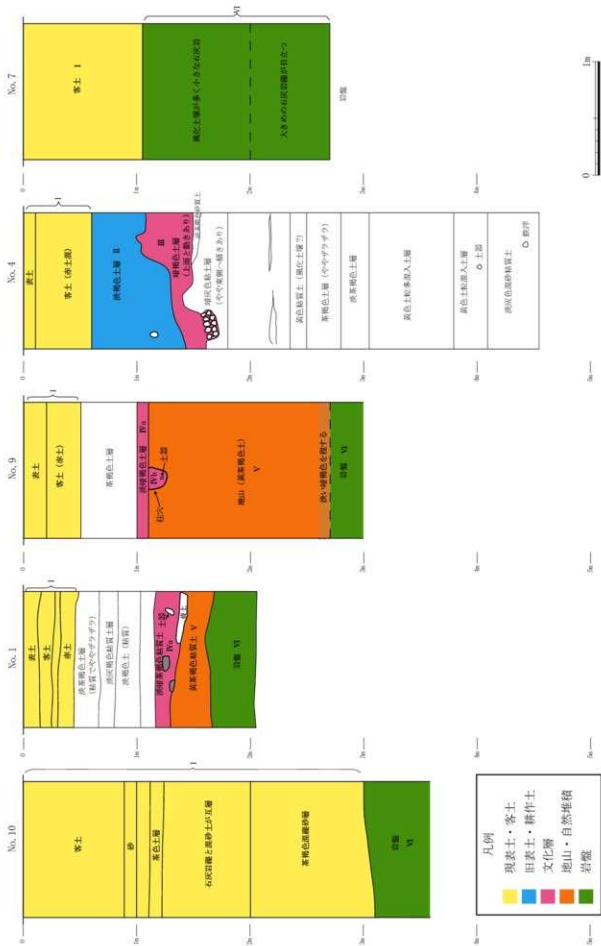
まで客土層の堆積がみられることなどから、調査地区全域で基地造成に伴う削平等の地形の改変が行われたと想定され、遺跡なしと判断された。

管理棟地区、厚生施設地区については、戦前は旧北谷集落の東側に広がっていた「北谷ターブクワ」の範囲内に位置している^{註1}。

倉庫地区、バスターミナル地区については、過年度の調査でも確認されている浚渫土を利用した基地造成に伴う客土層（砂層・シルト層等）以下に、戦前の集落に伴う旧表土・耕作土層が認められた。倉庫地区は「北谷ヌ前屋取」の範囲内、バスターミナル地区は旧北谷集落の範囲内に位置することから、確認された層序等はこれら集落に係るものと推測される。また、倉庫地区、バスターミナル地区の最下層部では、旧海底堆積等に由来するとみられる砂層が検出されており、砂層付近からは湧水の流出が著しい様子もみられ、過年度の調査結果とも整合する。

引用、参考文献

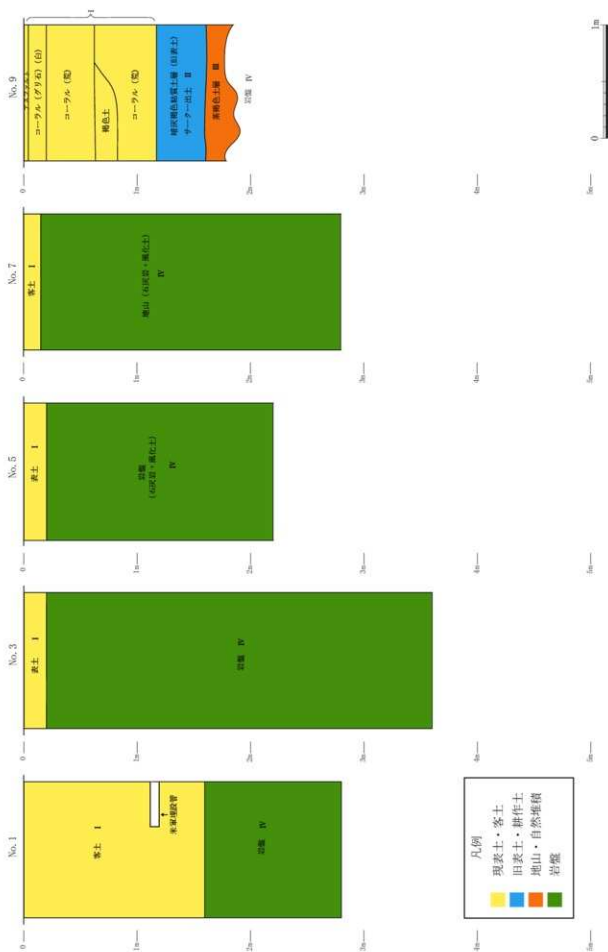
- 註1 『北谷町の地名』北谷町文化財調査報告書第24集 2006年 北谷町教育委員会



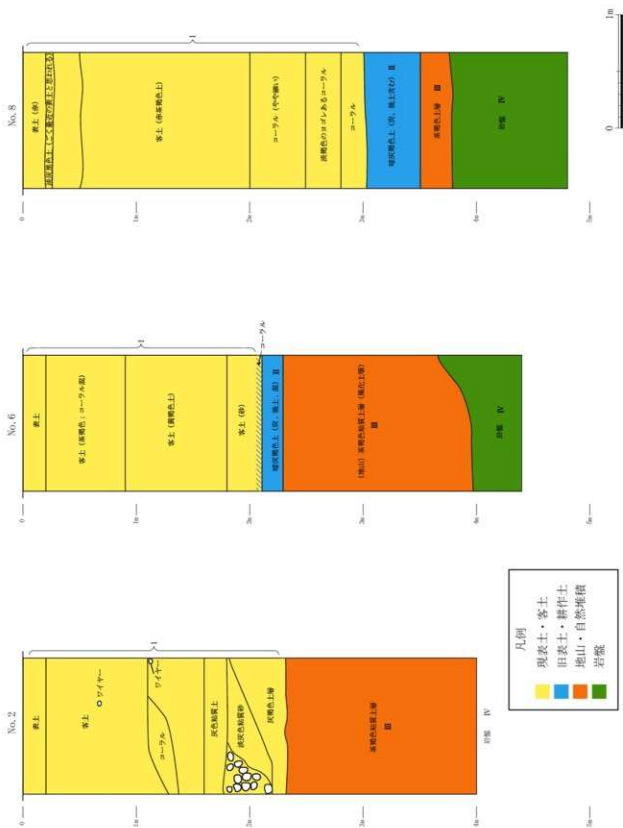
第 52 図 層序 1 (平成 8 年度 管理棟地区 MC-09-D) 1



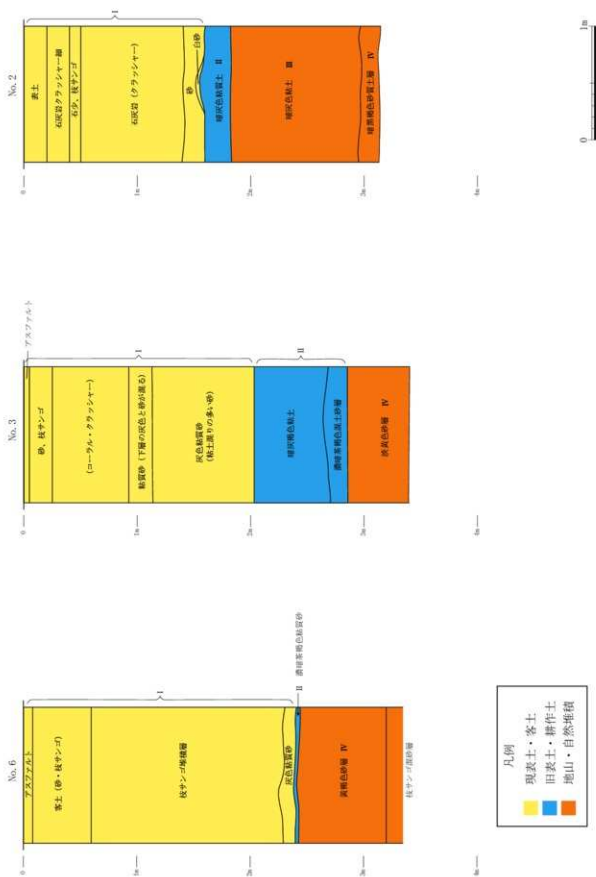
第53図 層序1 (平成8年度 管理庫地区 MC-609-D) 2



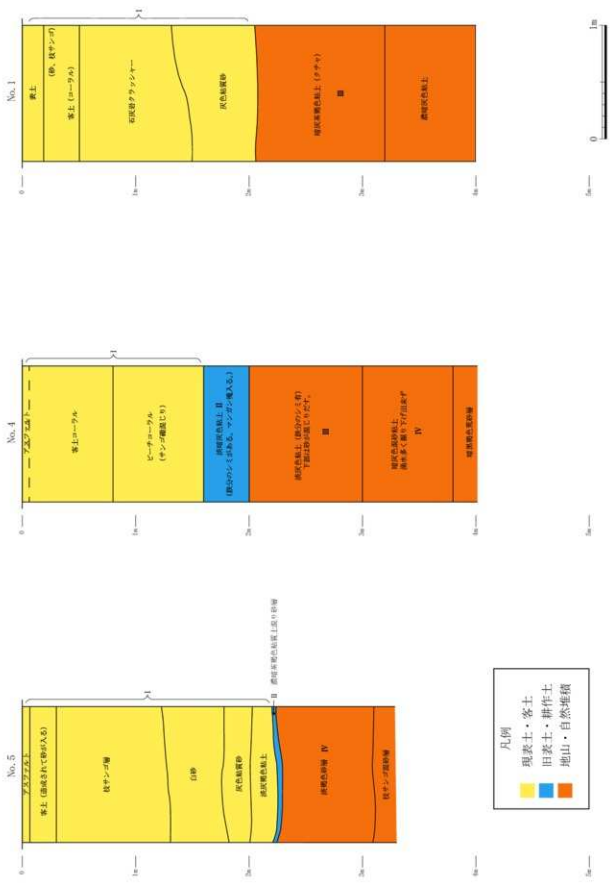
第 54 図 附序 3 (平成 8 年度 厚生施設地区 MC-6(6-D) 1



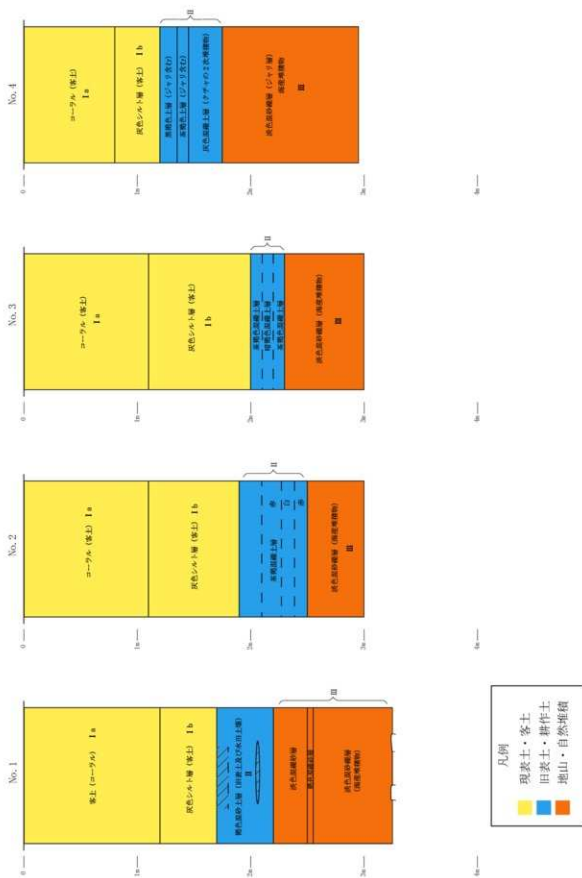
第55図 層序4 (平成8年度 厚生施設地区 MC-6(6-D) 2)



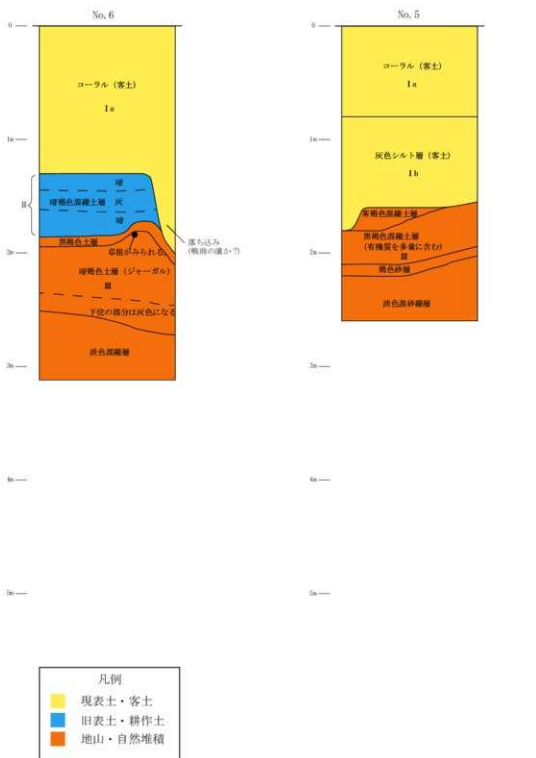
第56図 層序5 (平成8年度 倉庫地区 AR303-D) 1



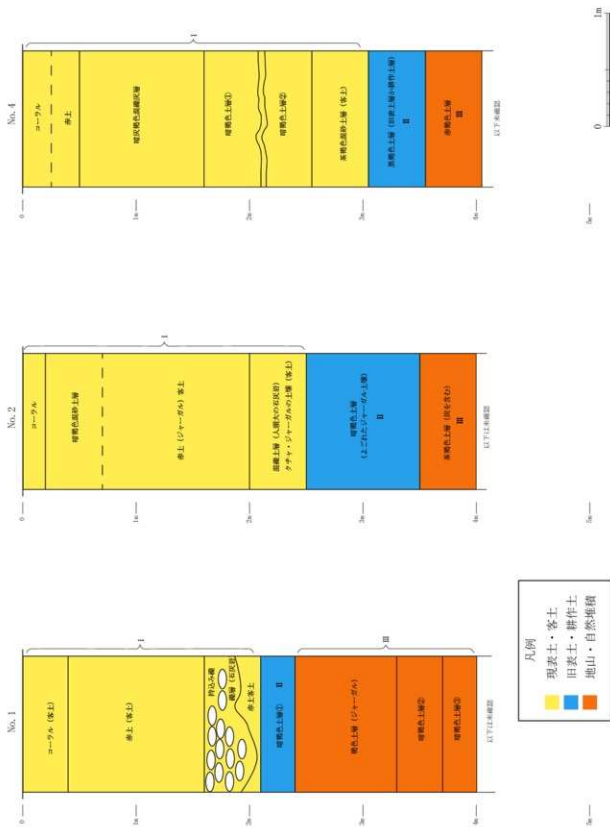
第 57 図 層序 6 (平成 8 年度 倉庫地区 AR303-D) 2



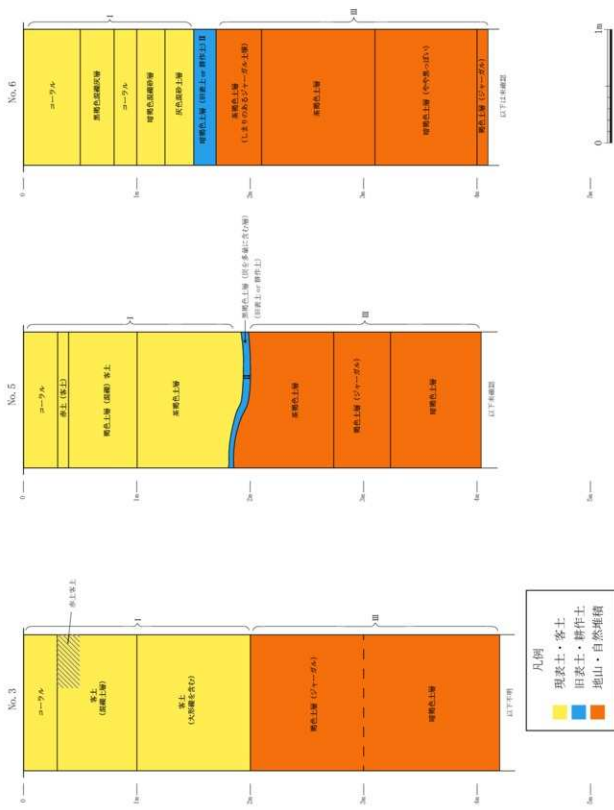
第 58 図 附序 7 (平成 8 年度 バスターミナル地区) 1



第59図 層序8 (平成8年度 バスターミナル地区) 2



第60図 階序9 (平成8年度 倉庫(資材)地区) 1



第61図 層序10 (平成8年度 倉庫(資材)地区) 2



試掘 No. 1 (北壁)



試掘 No. 1 (東壁)



試掘 No. 1 土器出土



試掘 No. 1 ニービスフニ出土



試掘 No. 3 上層



試掘 No. 3 下層

図版 53 平成 8 年度 管理棟地区 (MC-609-D) 1



試掘 No. 4 (東壁)



試掘 No. 5 石積検出 (南壁)



試掘 No. 6



試掘 No. 7

図版 54 平成8年度 管理棟地区 (MC-609-D) 2



試掘 No. 8 南壁上層



試掘 No. 8 南壁下層



試掘 No. 9 南壁



試掘 No. 9 西より



試掘 No. 9 西壁



試掘 No. 9 柱穴検出

図版 55 平成 8 年度 管理棟地区 (MC-609-D) 3



試掘 No. 10 北壁



試掘 No. 10 南壁



試掘 No. 11 南壁上層



試掘 No. 11 南壁下層

図版 56 平成8年度 管理棟地区 (MC-609-D) 4



試掘 No. 1 北壁



試掘 No. 2



試掘 No. 3 南壁



試掘 No. 3 東壁・南壁

図版 57 平成 8 年度 厚生施設地区 (MC-616-D) 1



試掘 No. 5 東壁



試掘 No. 6 東壁



試掘 No. 6 北壁

図版 58 平成 8 年度 厚生施設地区 (MC-616-D) 2



試掘 No. 7



試掘 No. 8



試掘 No. 9

図版 59 平成8年度 厚生施設地区(MC-616-D) 3



試掘 No. 1 東壁上層



試掘 No. 2 西壁



試掘 No. 1 東壁下層



試掘 No. 3 北壁



試掘 No. 4 北壁

図版 60 平成 8 年度 倉庫地区 (AR303-D) 1



試掘 No. 5 北壁



試掘 No. 6 南壁



試掘 No. 1



試掘 No. 2 東壁

図版 61 平成8年度 上：倉庫地区 (AR303-D) 2、下：バスターミナル地区 1



試掘 No. 3 北壁



試掘 No. 3 北壁下層



試掘 No. 4 北壁上層



試掘 No. 4 北壁下層

図版 62 平成8年度 バスターミナル地区 2

第Ⅶ章 総括

今回の報告では、平成4年度から平成8年度にかけて実施したキャンプ瑞慶覧基地内での試掘調査の成果を述べてきた。以下、調査成果の総括を述べ、本報告書のまとめとしたい。

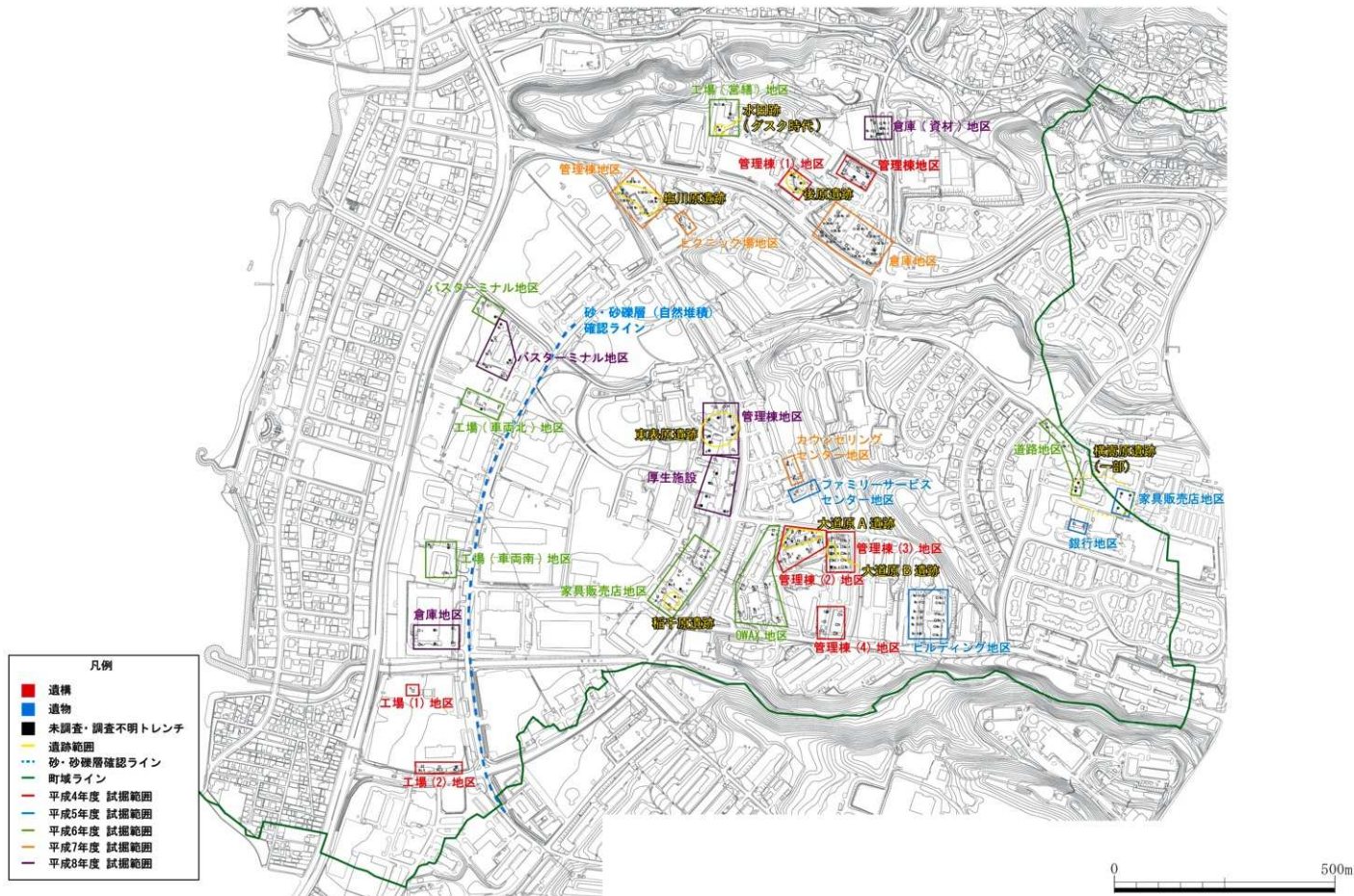
1. 年度ごとの調査成果

層序については、調査地区ごとに時期・土質等を基に現表土・客土層、旧表土・耕作土層（戦前）、文化層（近世以前の遺物包含層等）、自然堆積層、基盤層に分類し、壁面図では色分けを行った。ただし、一部基本層序に当てはめきれない層もあり、それについては色わけを実施していない。

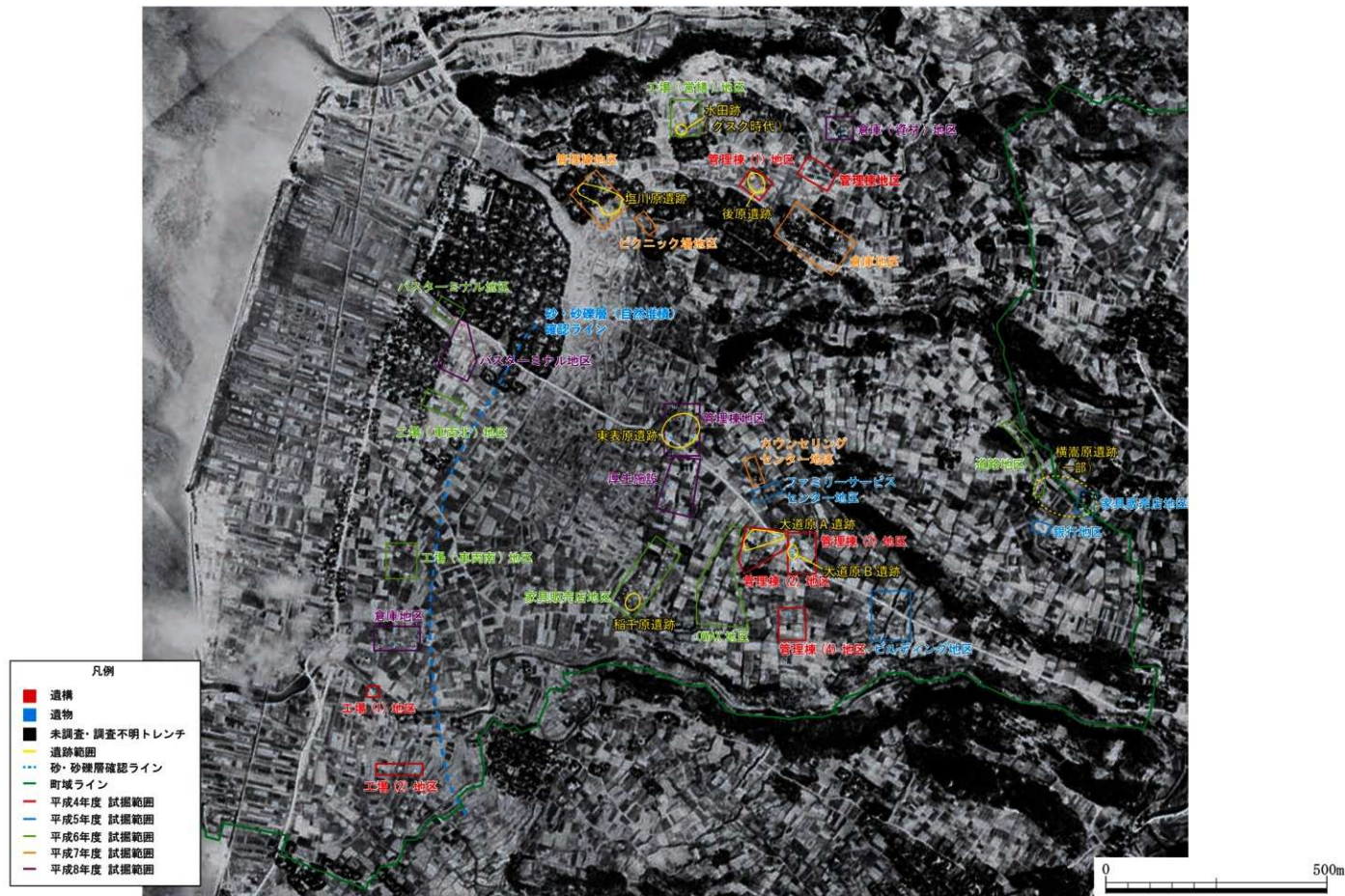
以下、本報告書にて記載した年度ごとの調査の試掘坑数等を表に示す。

第13表 年度ごとの調査箇所数まとめ

調査年度	調査地区	試掘坑数	試掘坑計 (年度別)	面積 (試掘坑は3×3=9㎡ を基準とした)
平成4年度	管理棟 (1)	3	40	360㎡
	管理棟 (2)	12		
	管理棟 (3)	9		
	管理棟 (4)	6		
	工場 (1)	1		
	工場 (2)	3		
	管理棟	6		
平成5年度	ファミリーサービスセンター	2	20	180㎡
	家具販売店	4		
	銀行	2		
	ビルディング	12		
平成6年度	工場 (営繕)	3	33	297㎡
	工場 (車両南)	3		
	工場 (車両北)	3		
	バスターミナル	3		
	家具販売店	11		
	ORAX 本部	7		
	道路	3		
平成7年度	カウンセリングセンター	2	23	207㎡
	管理棟	7		
	倉庫	12		
	ピクニック場	2		
平成8年度	管理棟	10	36	324㎡
	厚生施設	8		
	倉庫	6		
	バスターミナル	6		
	倉庫 (資材)	6		
試掘坑数総計 / 総面積			152箇所	1,368㎡



第 62 図 平成4～8年度 調査成果



第 63 図 戦前の土地利用状況 (1945年1月3日米軍撮影 沖縄県立公文書館所蔵の写真資料を借用・加筆)

平成4年度の調査では7地区の調査を実施し、管理棟(1)地区でグスク時代・近世～近代(戦前)時代の「後原遺跡」、管理棟(2)地区でグスク時代・近世～近代(戦前)時代の「大道原A遺跡」、管理棟(3)地区で縄文時代晩期・グスク時代期の「大道原B遺跡」、計3件の埋蔵文化財を発見、確認した。工場(2)地区では戦前の耕作地帯「北谷ターブックワ」に関連する水田跡とみられる層が確認された。このほか工場(1)・(2)地区では、最下部で旧海底堆積とみられる砂質層が認められた。

平成5年度の調査では4地区の調査を実施し、家具販売店地区でグスク時代の時期とみられる「横嵩原遺跡」を発見、確認した。ビルディング地区で土器片の出土がみられたが、当該層序は客土であり、本来の堆積層(遺物包含層)ではなかった。ファミリーサービスセンター地区では、地表下3m以下に旧表土層とみられる堆積が確認されたが、時期については不明である。

平成6年度の調査では7地区の調査を実施し、工場(営繕)地区ではグスク時代のもものと推測される水田跡が確認された。当該地区の北西に周知の埋蔵文化財包蔵地である「北谷城跡」が所在する丘陵が位置していることから、水田跡は個別の遺跡という認識ではなく、北谷城跡及び周辺の古集落の遺跡に付随するものと判断されている。道路地区では前年度の調査で発見された「横嵩原遺跡」の範囲が西側まで拡大することが判明した。そのほか、家具販売所地区で貝塚時代後期の時期のもものとみられる土器が出土する「稲千原遺跡」を発見、確認した。そのほか、バスターミナル地区、工場(車両北)地区、工場(車両南)地区では、米軍基地造成に伴う客土層(一帯の集落や田畑を埋め立てるのに用いたといわれる浚渫土とみられる砂層を含む)の直下に、戦前の集落の屋敷跡とみられる痕跡、水田や畑として利用したとみられる耕作土層が確認された。バスターミナル地区、工場(車両北・南)地区の調査時においては、最下層部については旧海底堆積とみられる砂質層が確認された。

平成7年度の調査では4地区の調査を実施し、管理棟地区でグスク時代の「塩川原遺跡」が発見、確認された。当該地は古地図や地籍図、伝承等からみると直径約90m、高さ約16mの独立丘陵であったが、戦後、丘陵上部を削平し、残土を周辺に均して建物が建設されたと考えられる。倉庫地区では戦前の旧表土・耕作土層とみられる層が確認され、戦前当該地一帯に所在していた玉代勢原集落に係るものと推測される。

平成8年度の調査では5地区の調査を実施し、管理棟地区で縄文時代後・晩期、近世～近代の遺物、遺構を伴う「東表原遺跡」を発見、確認した。隣接する厚生施設地区では、計8箇所のうち2箇所まで戦前の旧表土層を確認したが、遺構等は確認されなかった。管理棟地区、厚生施設地区については、戦前は旧北谷集落の東側に広がっていた「北谷ターブックワ」の範囲内に位置している。倉庫地区、バスターミナル地区については、過年度の調査でも確認されている浚渫土を利用した基地造成に伴う客土層(砂層、シルト層等)以下に、戦前の集落に伴う旧表土、耕作土層が認められた。倉庫地区は「北谷ヌ前屋取」の範囲内、バスターミナル地区は旧北谷集落の範囲内に位置することから、確認された層序等はこれら集落に係るものと推測される。また、倉庫地区、バスターミナル地区の最下層部では、旧海底堆積等と推測される砂層の堆積が確認されている。

2. 調査成果からみる旧地形・土地の利用状況

本項では、平成4～8年度に実施した試掘調査の結果から推測される、キャンプ瑞慶覧内における旧地形、遺跡の立地、戦前における土地の利用状況等について述べる。調査成果をもとに、平成4～8年度調査成果図(第62図)、戦前の一帯の様相の資料として第63図を作成した。

まず、キャンプ瑞慶覧内でも広い面積を占める、西海岸に面した海岸低地での調査成果から述べる。国道58号から東側、幅約200mの範囲で実施した調査において、地表下約2.5～4mで砂・砂礫層等が確認されている。この砂層・砂礫層が確認される標高は、現標高を参考に算出するとおおよそ海拔0m前後であることから、旧海底堆積もしくは旧海岸の砂浜等に由来する堆積層とみられる。自然堆積であるため、時期の特定は困難であるが、旧来は現在より海が東側に入り込んでいたと推測される。その後は陸地化が進み、海岸線は次第に西側へと変遷し、陸地化が進んだ場所では集落の形成、水田や畑など耕作域として利用されるようになっていく。西海岸に面し、国道58号に接する海岸低地の現標高は3～4m前後で、部分的に地表下1～2m前後に戦前の旧表土・耕作土層が検出され、旧表土・耕作土層上に堆積する客土には、枝サンゴを含む砂質土やシルト質粘質土がある。これらの客土層は過去の聞き取り調査等で、戦後米軍が浚渫した砂を用いて田畑を埋めたとの証言があり、証言内容と整合する結果とみられる。戦前、一帯には北谷・玉代勢・伝道の3つの字（旧村）があり、これらは総称して「北谷三箇^{きたやさんか}」或いは「三村^{みつむら}」と呼ばれていた。この北谷三箇の南側には耕作域が広がっており、「北谷ターブクワ」と呼ばれ、美田地帯として知られていた。旧表土・耕作土層については、これら戦前の旧集落、耕作域に含まれるものと推測される。旧表土・耕作土層以下については、文化層の堆積は認められていないが、地表下2～3m程掘削すると湧水の流出が著しく、壁面の崩落や滲水により底面や壁面の観察等が困難になったほか、旧海底堆積もしくは旧海岸に由来する堆積層の堆積が厚く、基盤層の確認が行えないなどの課題があった。北谷間切とその範囲内に含まれる九つの村が成立したのは17世紀後半といわれており、これら九つの村は近世以前、古琉球（グスク時代）から存続した村々と考えられるが、国道58号沿いの海岸低地西側の範囲での調査ではグスク時代・近世の時期と明確に判断できる堆積層は確認できなかった。また、調査成果図で示した砂・砂礫層の確認ラインは本書にて報告した平成4～8年度の調査成果に基づくものであり、平成8年度以降の調査成果報告の際はラインの再設定を行う必要がある。

本書にて報告した遺跡（単独では遺跡名のついていない場所も含む）は合計8箇所あり、時期としては縄文時代後・晩期、貝塚時代後期、グスク時代、近世から近代までと幅広い。比較的古手の縄文時代、貝塚時代後期の時期を含む遺跡は、東表原遺跡、稲千原遺跡、大道原B遺跡があり、これらの遺跡はキャンプ瑞慶覧西側の海岸低地のなかでも東側、海岸段丘を成す台地の麓に近い場所に立地する。

グスク時代、近世の時期を含む遺跡は、北谷城跡の所在する丘陵南側麓の水田跡、後原遺跡、塩川原遺跡、東表原遺跡、大道原A遺跡、大道原B遺跡、横高原遺跡があり、海岸低地だけでなく、海岸段丘上にも遺跡が立地している。塩川原遺跡は旧北谷集落、水田跡と後原遺跡は旧伝道集落の範囲内に位置し、北谷城跡とも近接することから、グスクや旧集落と関連する遺跡と考えられる。大道原A遺跡、大道原B遺跡については、近世以降の集落範囲からはやや離れるが、北谷発祥の地との伝承の残る「チャタンシジー」と呼ばれる小丘陵に近く、関連を考えたいところであるが、どちらも戦後の米軍基地造成に伴う削平等の影響が大きく、遺跡の残存状況・遺構遺物の出土状況はあまりよくないため詳細は不明である。横高原遺跡については、本書にて報告した平成4～8年度以降にも遺跡周辺での調査が実施され、遺跡範囲の広がりも確認されているが、調査成果図では本書報告の成果に基づく遺跡範囲のみの掲載とした。横高原遺跡の範囲については、今後調査成果の整理・報告に伴う遺跡範囲の検討が必要である。また、後原遺跡についても現在利用している遺跡分布図に掲載している遺跡範囲と、本書にて報告した調査成果に基づく遺跡範囲の位置にずれがあ

り、今後修正が必要である。

基盤層については、海岸低地東側及び海岸段丘上では石灰岩層の検出が多く認められた。北谷城跡の所在する丘陵に近い場所では、最下層でクチャ（灰色粘質土）の検出が認められたほか、海岸低地に位置する調査地区でも一部最下部でクチャが確認されている。平成6年度に調査を実施した家具販売店地区の一部、平成7年度に調査を実施した管理棟地区（塩川原遺跡が所在）の一部では最下層でニービ（砂岩）が確認された。塩川原遺跡が所在する管理棟地区については、『北谷町の地名』のなかでも土質はニービだったとの記載がある。

以上、平成4～8年度にキャンブ瑞慶覧にて実施した試掘調査の成果について総括した。調査から多くの年数が経過し、散在していた調査資料や出土遺物を確認・整理しながらの報告書作成となり、不備不足を感じさせるものとなってしまったことは反省するところである。しかし、これまでは内部資料に留まっていたものが、報告書として取りまとめを行うことで今後行われる開発行為等の事前協議資料としてだけでなく、基地造成以前の北谷町の土地の利用状況、歴史を再考する一助となれば幸いである。

特に海岸低地（沖積平野部）の調査では、多量の湧水の流出やそれに伴う壁面の崩落など、安全管理上の制約が大きいことや、海岸低地という地形上、試掘調査を実施しても基盤層の確認が困難であることなどから、今後新規の調査を実施する際にも同様の事態が発生することが想定されるため、遺跡の有無に関わらず過去の調査成果の取りまとめを行い、一体的に地下の状況把握することは重要であると考えられる。

また、海岸低地東側及び海岸段丘上、北谷城跡南東側麓付近では、縄文時代後期・晩期からグスク時代、近世と時代幅の広い遺跡が確認されており、一部は基地造成に伴う削平等の影響を受けている遺跡もあるが、遺跡確認により建物の建築等を免れ、遺跡には影響が及ばない形で現地保存されている遺跡も多い。偏に在沖米軍、沖繩防衛局（旧那覇防衛施設局）等関係機関の御理解、御協力あつてのことと拝察する。

本報告書では平成4～8年度という調査成果の一部の報告に留まったが、キャンブ瑞慶覧における試掘調査は現在も継続的に実施しており、新規に発見された遺跡もある。今後も過去の調査の取りまとめ及び報告書の作成は継続して行い、基地内に所在する埋蔵文化財の保護・活用に供する資料の蓄積に努めたい。

末尾になりましたが、本報告書をまとめるにあたり御指導・御協力を頂いた関係機関・各位に心より感謝を申し上げます。

参考・引用文献

書名・篇名	発行年	編著者・発行機関・集号	参考・引用箇所	章・節番号
『北谷町の遺跡』	1994	北谷町文化財調査報告書 第14集	全般	
『北谷町の祥所』	1995	北谷町文化財調査報告書 第15集	全般	
『北谷村史』	1961	北谷村役所	全般	
『北谷町史』第1巻通史編	2005	北谷町教育委員会	全般	
『北谷町史 第三巻資料編2 民俗下』	1994	北谷町役場	全般	
『北谷町の地名』	2006	北谷町文化財調査報告書 第24集	全般	
『やきもの事典』	1984	平凡社	貿易陶磁器全般	II～VI
『やきもの鑑賞基礎知識』	1997	至文堂	貿易陶磁器全般	II～VI
『<新装版>陶磁器染付文様事典』	1998	柏書房株式会社	貿易陶磁器全般	II～VI
『五代勢原遺跡』	1993	北谷町教育委員会	H4年度 調査経緯・体制	II-3
『北谷城跡-総括報告書-』	2020	北谷町教育委員会	H4年度 調査経緯・体制	II-3
『北中城村の遺跡』	1995	北中城村文化財調査報告書 第3集 北中城村教育委員会	H5年度 調査経緯・体制	III-3
『首里城-管理用道路地区発掘調査報告書-』p139-141	2001	沖縄県立理蔵文化財センター調査 報告書 第1集	H7年度 調査経緯・体制/ 陶質土器	V-3
『首里城-正殿地区発掘調査報告書-』p138-139	2016	沖縄県立理蔵文化財センター調査 報告書 第82集	H7年度 調査経緯・体制/ 陶質土器	V-3
『浦田古宮群(II)-県庁舎会議棟建設に係る発掘調査-』	1995	沖縄県文化財調査報告書 第121集 沖縄県教育委員会	H7年度 瓦質土器	V-3
『今帰仁城跡発掘調査報告1』	1983	今帰仁村文化財調査報告 第9集	H7年度 染付・ベトナム 陶磁	V-3
『今帰仁城跡発掘調査報告II』p204.220-221	1991	今帰仁村文化財調査報告書 第14集	H7年度 染付/瓶	V-3
『今帰仁城跡周辺遺跡III-村内遺跡発掘調査報告-』p117-124	2007	今帰仁村文化財調査報告書 第24集	H7年度 染付	V-3
『今帰仁城跡発掘調査報告IV』	2009	今帰仁村文化財調査報告 第26集	H7年度 染付/瓶	V-3
『天界寺跡(1)-首里社跡地下駐車導入り口新設工事に伴う 緊急発掘調査-』p47-56	2001	沖縄県立理蔵文化財センター調査 報告書 第2集	H7年度 調査経緯・体制/ 染付/瓶	V-3
『中城御殿跡-県営首里城公園中城御殿跡発掘調査報告書-』 p55-62	2010	沖縄県立理蔵文化財センター調査 報告書 第53集	H7年度 染付/瓶	V-3
『伊礼原D遺跡-委江伊平地区原状回復事業に伴う発掘調査事業 (平成18年度)-』p225-230	2017	北谷町文化財調査報告書 第41集	H7年度 染付	V-3
『首里城跡-下之御庭, 用物座跡, 瑞泉門跡, 扇形門跡, 廣福門 跡, 木挽門跡発掘調査報告書-』p62-65	2001	沖縄県立理蔵文化財センター調査 報告書 第3集	H7年度 タイ産髹輪陶器	V-3
『首里城跡-京の内発掘調査報告書(1)-』	1998	沖縄県文化財調査報告書 第132集	H7年度 染付・髹輪陶器	V-3
『首里城跡-京の内発掘調査報告書(V)-平成6年度調査の 遺物編(2)-』	2014	沖縄県立理蔵文化財センター調査 報告書 第73集	H7年度 手練土器/タイ 産無輪陶器	V-3
『首里城跡-二階殿地区発掘調査報告書-』	2005	沖縄県立理蔵文化財センター調査 報告書 第29集	H7年度 染付/髹輪陶器	V-3
『首里城跡-御内原発掘調査報告書-』	2006	沖縄県立理蔵文化財センター調査 報告書 第34集	H7年度 染付	V-3
『鶴達城跡-南貝塚および二の丸北地点の発掘調査-』	1984	鶴達町 教育文化財 第6集	H7年度 染付	V-3
『鶴達城跡-西の曲輪北区発掘調査報告書-』	2011	うるま市文化財調査報告書 第14集	H7年度 染付/髹輪陶器	V-3
『鶴達城跡-西の曲輪西区および東区発掘調査報告書-』	2014	うるま市文化財調査報告書 第23集	H7年度 髹輪陶器	V-3
『坂兼久原遺跡-庁舎建設に係る文化財発掘調査報告-』	2003	北谷町文化財調査報告書 第21集	H7年度 髹輪陶器	V-3
『沖縄における貿易陶磁研究』	2007	瀬戸12か/『紀要 沖縄学文研究5』	H7年度 髹輪陶器	V-3
『沖縄出土の本土系瓦質土器について』	2004	瀬戸哲也/『グスク文化を考える』 /今帰仁村教育委員会	H7年度 瓦質土器	V-3

参考・引用文献

書名・篇名	発行年	編著者・発行機関・集号	参考・引用箇所	章・節番号
『播磨編年からみた近世琉球製業に關関』	1987	安里進・上原政昌・家田淳一/『名瀬博物館紀要3号』/名瀬博物館	H7年度 沖縄産/本土産無軸陶器	V-3
『琉球出土陶磁社会史研究』	2001	吉岡・門上/真蔭社	H7年度 貿易陶磁器全般	V-3
『北谷城-伊礼原B遺跡』(小発掘調査事業-)	2010	北谷町文化財調査報告書 第32集	H7年度 沖縄産無軸陶器	V-3
『平安山原A遺跡-桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業(平成19.21.22.23年度)-』 p158-167	2016	北谷町文化財調査報告書 第38集	H7年度 沖縄産無軸陶器/本土産磁器	V-3
『原色沖縄海中動物生態図鑑』	1977	白井洋平(新原図書)	H7年度 調査経緯・体制/貝類遺体	V-3
『決定版 生物大図鑑 貝類』	1986	奥谷喬司(世界文化社)	H7年度 調査経緯・体制/貝類遺体	V-3
『生態/検査図鑑 沖縄の海の貝・陸の貝』	1995	黒住耐二(東海大学出版会)	H7年度 調査経緯・体制/貝類遺体	V-3
『日本近海産貝類図鑑』	2000	奥谷喬司(編)(東海大学出版会)	H7年度 調査経緯・体制/貝類遺体	V-3
『日本近海産貝類図鑑【第二版】』	2017	著編者 奥谷喬司(東海大学出版部)	H7年度 貝類遺体	V-3
『日本の貝 1巻貝』	2006	奥谷喬司/フィールドベスト図巻18/株式会社学習研究社	H7年度 貝類遺体	V-3
『日本の貝 2 二枚貝・陸貝・イカ・タコほか』	2006	奥谷喬司/フィールドベスト図巻19/株式会社学習研究社	H7年度 貝類遺体	V-3
『石川市 古我知原貝塚-沖縄自動車道(石川~那覇)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(6)-』	1987	沖縄県文化財調査報告書 第84集	H7年度 貝類遺体	V-3
『渡地村跡』	2007	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集	H7年度 調査経緯・体制/動物遺体	V-3
『平安山原B・C遺跡-桑江伊平地区区画整理事業に伴う発掘調査事業(平成20・21年度)-』	2016	北谷町文化財調査報告書 第40集	H8年度 土器全般	VI-3

報 告 書 抄 録

ふりがな	きゃんぷずけらんまいぞうぶんかざいしくつちょうさ							
書 名	キャンプ瑞慶覧埋蔵文化財試掘調査							
副 書 名	平成4年度～平成8年度							
巻 次	-							
シリーズ名	北谷町教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第46集							
編著者名	太田菜摘美・上地千賀子							
編集機関	沖縄県北谷町教育委員会							
所 在 地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL. 098-936-3159							
発行年月日	2022年(令和4年)3月23日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	° / ′	° / ′		m ²	
キャンプ瑞慶覧埋蔵文化財試掘調査	沖 縄 県 北 谷 町 字 大 村・ 北 谷・北 前	473260		26° 30′ 49″ 26° 29′ 40″	127° 77′ 42″ 127° 76′ 91″	19921124) 19970312	約1,368 m ²	埋蔵文化財の有無照会に伴う試掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
後原遺跡		グスク時代～ 近世・近代			青磁・南蛮焼・壺屋焼			
大道原A遺跡		グスク時代～ 近世・近代			沖縄産陶器・土器片			
大道原B遺跡		縄文時代晩期・ グスク時代			土器片			
横嵩原遺跡		グスク時代			土器片			
稲千原遺跡		貝塚時代後期			土器片			
塩川原遺跡		グスク時代～ 近世・近代			土器片・青磁・南蛮焼・ 壺屋焼			
東表原遺跡		縄文時代晩期・ グスク時代～近 世・近代	焼土面・ビット・土留 め状の集石・近世～ 近代の墓		土器片			
要 約	本書は、埋蔵文化財の有無照会を受けて平成4～8年度にキャンプ瑞慶覧基地内にて実施した試掘調査の報告書である。確認された上記7箇所の遺跡については、調査後に遺跡の新規発見報告を行い、周知の埋蔵文化財としている。							

北谷町文化財調査報告書 第46集

キャンプ瑞慶覧埋蔵文化財試掘調査

— 平成4～8年度 —

編集：北谷町教育委員会

発行年：2022年（令和4年）3月

〒904-0192 沖縄県北谷町字桑江226番地

TEL 098 - 936 - 3159

印刷：有限会社 ドリーム印刷

〒901-0314 沖縄県糸満市座波1065番地

TEL 098 - 835 - 6850



北 谷 町